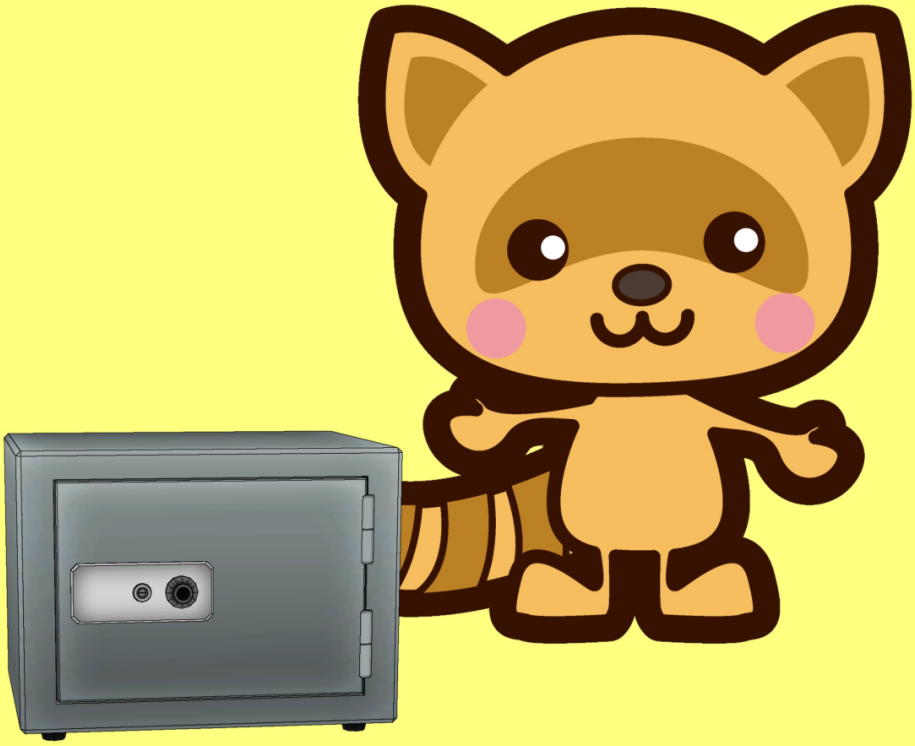
続・短編集

「タヌキの宝くじ指南」

黒川 文



www.comipo.com

目次

タヌキの宝くじ指南
はじめに 3
タヌキの宝くじ指南 4
学校のスパイ 7
犬と糞害 10
不測のターゲット 13
蔵の中 16
犬と散歩 19
軽トラタクシー 22
寂れたお化け屋敷 25
ただいま 28
虚偽の発言 32
機密書類 35
小惑星探査機の持ち帰ったもの 38
三人のキャメロン 41
安楽死病棟 44
空っぽのパッケージ 47
絶滅危惧種 50
硝煙反応 53
最後のフライト 56
職業選択の自由と石像職人 60
富士登山 66
タヌキのお札 71
久しぶり　ー　タイムトラベル　ー 76

起訴と不起訴の狭間
１．混乱 83
２．知見 86
３．被害者の声 89
４．裁判 91

お菓子の思い出

（１） 97
（２） 99
（３） 101
（４） 103

１３日の金曜日とふたりの娘
1. 107
2. 110
3. 112
4. 114
5. 116

行方不明になったおばあちゃん
（１）買い物 121
（２）行方不明 125

デパ地下大騒動
（１） 131
（２） 135

お遍路さん　―　運命の人　ー
1. 141
2. 143
3. 145
4. 147

薬剤に漬けられた小指の標本
1. 151
2. 154
3. 156
4. 158

妖怪奇譚《ようかいきたん》
1. 妖怪画 163
2. 貧乏神 165
3. 絵師 168
4. 大不況 170

暗号機と三百枚の小判
1. 祖父の暗号機 175
2. 小判のありか 177
3. 解読 179
4. 小判 182

タヌキの宝くじ指南

はじめに

本書を手に取っていただき、誠にありがとうございます。
この短編集は筆者が神戸新聞・文芸へ投稿した作品をまとめたもので、別に出ております「短編集・輪ゴムのイカフライ」の続編にあたるものです。
１作品あたり、原稿用紙７枚の作品になっております。

お読みいただければ幸いと存じます。

タヌキの宝くじ指南

わたしの趣味は宝くじだった。

一等六億円を目指して毎回発売される度に購入していた。しかし当たることはなくせいぜい末等の三〇〇円くらいのものだった。わたしは、そんな面白くもない経緯をブログの記事にしていた。どこそこの売り場で買ったが一向に当たらなかったなど。

最初は誰もそんな下らないブログなど読まないみたいだったが長年続けていたせいなのか、ひとり、ふたりと読者が出来た。お互いの記事にコメントを残したり、あるいはこちらが訪問してコメントを書いたりと言った間柄だ。ブログ友達と呼ぶのだとは後で人から聞いて知った。

彼か彼女かはわからないが「占いの四柱推命と言うものがあり、生まれながら金運を持っているかどうか、結構な確率で当たる」と教えてくれた。当たる占い師まで。

わたしは三宮駅から北へ一キロほどの所にある骨董品店を兼ねた占い師を訪ねていった。

占い師は白髪のおじいさんだった。彼はわたしの生年月日と時間、生まれた場所と手相を読み鑑定を下してくれた。

「あまり金運やくじ運はよくないみたいだね」と言った。「でも、開運の方法はあるよ」

「ぜひとも教えて下さい。この通りです」

わたしは藁をも掴む気持ちで彼に頼み込んだ。

おじいさんは骨董品店の片隅で埃をかぶっていたタヌキの置物を持ち出してきた。結構な値段がするものだった。聞く所によるとさるお大尽が戦前に持っていたものらしかった。これを東が南向けに置き毎日磨いてやると効果が出るという。今のわたしに取っては高い金額だったが一念発起し購入した。

埃やカビ、苔をきれいに白布で拭き上げ、コメと塩を供えて毎晩拝んでから寝る様になった。ある日の夜、わたしは夢を見た。タヌキが出て来て、わたしに宝くじを買う指南をするのだ。

「宝くじ売場は大阪第五ビルの地下一階の所。一〇時三〇分二五秒に一番右側のおばさんから連番で一〇枚購入するのですよ。間違えないで。右側のおばさんですよ」

明け方、わたしはハッと目が覚めた。覚えていた内容を忘れない様にメモに取り、そして時計を見て慌てて大阪行きの電車に乗り込んだ。わたしはタヌキの言う通りにそのくじを購入した。ちょうどその時間になるように、後ろに人がいれば、お先にどうぞと

順番を譲ったりして、その時刻に間に合わせた。するとどうだろう。おばさんは笑顔でくじを渡してくれたのだ。なんだか、それだけで当たりそうな感じになった。
　タヌキの言う通り、それは当たりくじだった。
　わたしの預金通帳に六億円の金額が書き込まれ、銀行の係員は「当選者へのお知らせ」という急に大金を持った人への注意書きみたいなものを書いた冊子をくれた。でもそんなものはどうでもよかった。次から次へと高額当選が続いたのだ。使い切れない位に。

　わたしはそのとき以来タヌキの虜になった。
　もう、このタヌキの置物は手放せない。そう感じた。わたしは毎日きれいな白布でタヌキの体をきれいにしていた。埃がつかない様に垢がつかない様に苔がつかない様に。
　もし、タヌキがいなければ今でもわたしはただの文無しの男でしかなかった。それが、単なる偶然だとしても高額の宝くじに連続して当選し、一財産、いや普通のサラリーマンの生涯所得の数倍の資産を保有することができたのだ。タヌキ様々であった。
　もし、あのときブログ友達の意見を真に受けず、占い兼業の骨董品店に行っていなければ今の私は存在しないのだ。もし、真に受けていなければ.....と考えるだけでも恐ろしかった。人生における偶然とはそんなものだったのだろう。

　タヌキはそれからも当たりくじを、わたしに導いてくれた。当たるにつれ段々と通帳の残高は鰻登りに増えていった。そうなるとさらに欲が出るというものだ。わたしはタヌキに相談した。
「タヌキさんよ。何か.....儲かる話はないのかい？」
「そうですねえ。宝くじだけでは不満なのですか？　　旦那様」
「しょせんはあぶく銭じゃないか。実業的なものと言うのか？　　そんなものを考えているんだ」
「ではこうなさいまし。旦那様。企業に投資をするんです。知識がなくても構いません。わたくしめが指南して差し上げます」
「なるほどねえ。それって儲かるの？」
「実業だけに、その会社の社会的価値が上がらなければなりません」
「なるほど。でも難しそうだな。俺に出来るのか？」
「簡単です。まずは身分証を持って証券会社に行き証券用の口座を開いて下さい。後は、わたくしめが言う通りに株を売り買いして下さい。これはタイミング勝負です。早い遅いはかなり重要な要素を占めます」

　その日からわたしの仕事は倍増した。
　宝くじ売場に並び、当たりくじを買うことと、証券会社で株を売り買いすることと。しかし、わたしにはこの仕事スタイルが合っているみたいだった。楽しいし博打的な要素もわたしの射幸心を刺激した。株は宝くじより知識が試される。どの企業がどんな商売

をしてどのくらい儲けているのか？　その辺りはしっかり経済の勉強になったし、何より、タヌキの言う通りにしていれば大損をすることもなく、貯蓄額はまたもや鰻登りになっていった。

「旦那様。基金をお作りなさいませ。資金の運用はそこに任せてしまうのです。団体であれば、特定の個人投資家ではなくなります。適当に損を出したり、儲けたりして長い目で得をしたらいいのです。そして儲けの一部は慈善事業に投じなさいませ。それは旦那様の陰徳になります。いいことですよ」

タヌキはわたしの人生指南までし始めた。しかし、それはそれでいいことだと思った。自分だけが得をするのはよくないことだ。わたしはこの一連の儲け話の中で悟りつつあった。社会全体で富を増やして行かなければ、こんなことは早晩成り立たなくなるだろう。

わたしは、儲けの一部を科学の振興と交通事故で親を亡くした子供のための慈善資金団体を立ち上げた。社会のために研究をしている科学者と次世代を担う子供たちのために株で儲けた資金を投じるのだった。ある意味、これが究極の投資だったのかも知れない。

この資金を作り出す中で、長いスパンの話だったが、わたしの基金は大いに感謝されることとなった。タヌキのお陰だった。きっと、前の所有者も慈善家だったに違いなかった。　了

学校のスパイ

わたしは警察学校の教官だった。

主に拳銃操法を担当していた。装備品の他、実際の犯罪に用いられる外国製の銃器の構造や特性などの座学を担当していた。

学生の中に小川明と言う小学校から高校時代までをアメリカで過ごした、いわゆる帰国子女と言う者がいた。大学だけは日本の私立大を出ており大卒扱いで警察学校に入校していた。

彼は銃器の講義には一際熱心だった。

記録では「銃犯罪を社会から一掃したい」。それが彼の警察官を目指した主な理由だった。

同僚の教官に尋ねたところ、銃に関するものの他は法学や体術などにはあまり熱心ではないと言うことだった。学生には嫌と応とに関わらず柔道、剣道、逮捕術などが必須で課せられている。

わたしは法学担当の西島教官とゆっくり話す機会を設けて事情を尋ねた。この学生は「凶悪犯罪に対し積極的に実力行使すべきだ」と言う主張の持ち主の様だった。ある意味危ない性格だと言えた。彼の本心はどこにあるのだろう。

わたしは、事を荒立てない為に、学校には内密に調査を開始した。

「西島さん。最近、学生たちの様子はどうです？」

「そうですねえ。やる気はあるみたいなのですが、実力が伴っていないとでも言うのでしょうか。それに大卒組でほぇーんとしたのが多い気がしますね。卒業後、現場に出て大丈夫なんですかねえ」

と、そうぼやいた。

誰しも最初はそんなものだ。最初から出来る奴などそうはいないだろう。だからこそ、この長い教育訓練を課されているのだ。大卒・高卒のこの間まで学生だったのが、一端《いっぱし》の警察官になっていく。過酷な訓練が彼らを一人前にしていくのだ。

「ときに小川明と言う、アメリカで幼少時代を過ごしている学生がいるでしょう？　彼は拳銃実技がトップなのですよ。ほかの科目はいまいち奮わないのに。どう思います？」

「アメリカですか。向こうは基本的に銃社会でしょう？　州によっては拳銃も合法な所もあるみたいですよ。自己責任で身の安全を守ることもあるのだとか」

「自己責任ですか？　実際、日本で拳銃を所持できるのは、警官や海上保安官と自衛隊員くらいではないですか。過去の例から言っても、ただ拳銃を撃ちたいと言う目的で警察官を目指す者もいましたしねえ」

「そうなのですか？　わたしも彼には気をつけておきます。山田さんも何かあったら教えて下さい」
　彼はそう言い、教官室に戻って行った。

　わたしは警察学校の銃器担当の一教官に過ぎなかった。しかし、それは表の顔で実際には、彼らを陰で監視している公安委員会のスパイだった。
　ただ市民の安全を守りたいという殊勝な者から、就職活動にあぶれた者がいた。そして何より重要なのは、拳銃を撃ちたい、権力をふるいたいと言う危ない人間を密かに任務から外すことだった。
　これ見よがしに退学させたりすれば、普段から陰で監視していることが外部にバレてしまう。だから、愚鈍な拳銃繰法の一教官のふりをして仲間ごっこをして上層部に情報を送り、その後の配置換えなどで、町のお巡りさんの世界から自然に外してしまう。そんな役割を担っていた。

　今期入学の学生たちとは、もう三ヶ月ほどの付き合いになる。わたしは小川明と言う、他の学生たちとは明らかに異なる経歴を持つ男に最初から注目していたのだ。そして、手慣れていたのは拳銃実技だけではなかった。ひとつの知識として教材にしていた自動小銃の扱いにも長けていて、分解組み立ては一番早かったし、銃剣を使った格闘技も優れた成績を残していた。
　気になるのは、与えられた拳銃や小銃への異常なまでの愛着だった。分解して油を引いてまた組み立てる。彼は手に油や錆がつくのもいとわず、いつも、ピカピカに磨き上げていた。
　わたしの経験では、「実弾で人を撃ってみたい」そんな人種が少なからずいたのだ。彼はそのパターンに一致していた。もちろん、警察官になり、拳銃を貸与されたからと言って、粗暴な犯人を撃っていい訳がない。もう、よっぽど、身の安全そのものが脅かされなり限り、発砲することはおろか、拳銃をホルスターから抜くことすら認められないのが通常の勤務に於けるその取り扱い規定だった。多分、大多数の警察官は、交番時代を通じて、拳銃を撃つことなどないまま定年退職を迎えているはずだった。訓練場での射撃を除いてはだ。

　わたしは小川明が座学に出る前の五分ほどの間に、彼の持つ事情について聞き取りを行った。
「小川君。ちょっと聞きたいことがある」
「はっ。山田教官。何でありましょうか」
「君は帰国子女だったね。アメリカでは銃を撃ったことがあるのか？」
「はっ。あちらでは一般に販売されていますし、猛獣や犯罪者から身を守らなければならないと言う事情もあります」
「わたしは、『撃ったことがあるのか？』と聞いている。質問にだけ答えなさい」

「はっ。あります。ホームステイ先のホストファーザーの指導で害獣を撃ちました」
「ひとを撃ったことはあるか？」
「.....です」
「聞こえない。大きな声で答えよ」
「あ、ありません」
「そうか。なら行っていい。講義が始まる。遅れるな」
「はっ」
　彼は駆け足で教室に戻っていった。
　彼は、ひとを撃ったことを頑なに否定した。逆を返せば、そんな事実があるのだろう。正当防衛だったとしても、この学校では不利に働く。それをわたしの口調から察して不意に嘘をついたのだ。わたしはそう判断した。そして、彼にはふたつの未来が予想された。彼が優秀な警官となり.....銃の危険性も威力も熟知して「本当に」銃犯罪を防ぐために尽力してくれるか、逆にわたしが恐れていた通りに実際に「合法的に」ひとを撃つことに魅力を感じてしまうかのどちらかだった。
　そして、わたしは上部組織から、後者の様な不穏な輩を警察官になる前に学校の段階で排除してしまう役目を仰せつかっていたのだ。判断するには余りに情報が少なすぎた。「実際に」現場に配属され、被害者が出るまでは、本当の所はわからないことでもあった。
　わたしは悩んだ末に判断し、彼が寮生活で禁止されていたいかがわしい雑誌を持ち込んだことと、自由時間外に携帯電話を私的に使用したと言う名目で彼の退学処分を校長に意見具申をした。了

犬と糞害

　愛犬ジョンを飼い始めて半年。毎日の散歩もわたしの生活習慣の一部となりつつあった。ジョンと暮らし始めるまでは気がつかなかったのだが、犬の散歩に出ることで犬を飼う人同士のつきあいが出来る。いわゆる犬友達ともいうべき顔見知りだ。
「やあ、どうも。今日は早いですねえ」
「やあゴンちゃん。今日は元気そうですねえ」
「プリンちゃんの調子はどうですか」
　などと、お互いの愛犬の名前で呼び合い、声を掛けたり掛けられたりしてそこから話が始まるのだ。だから、人間には興味はなくひたすら犬を中心とした話になり、結局、親しくなった割には、相手がどこの人だか知らない場合もよくあることである。

　そんなある日、犬を連れていない年配の男性に声をかけられた。
「可愛いワンちゃんですね。散歩ですか？」
「ええ、夕方の散歩です」
　午前中の散歩は父が、夕方の散歩はわたしが連れて行っていた。町内を一周して公園で一服するというコースである。その男性は自治会の清掃担当の役員をしていると言い、公園の草むらのあちらこちらに落ちているフンの後始末がなされていないことを嘆いていた。
「日曜の清掃のたびに見つかるんですよ。別に普通のゴミと思えばいいんですけどね」
「わたしは、いつもちゃんと後始末していますよ。ほら」
　わたしはポリ袋の入った小さめのバッグを見せた。
「袋を持つだけで、後始末しない人もおられるし、最初っから持ってもいない人も結構多いんです。この公園に落ちているフンの量から言ってもわかると思います」
「確かにねえ」
　そんな飼い主が多いのも事実だが、わたしの犬友達にはそんな人に心当たりはなかった。みんなきちんとマナーを守る人たちだ。
「いや、あなたに文句を言っているのではないのです。自治会に意見を言う人がいて、その人たちへのポーズとしてですね、日曜日の清掃に愛犬家の方達にも草むらの掃除をしてもらいたいのですよ」
「そんな！　　わたしには関係ないはずですよ」

別に掃除することが嫌なわけではない。もし、ボランティアで参加を要請されるのであれば喜んで参加したであろう。しかし、一部の不心得者の尻ぬぐいをさせられるような行為はごめんだった。
「いやあ、誰がどこでフンをして後始末をしていないかがわかっていれば問題はないんですよ。それこそ、条例違反ですからね。わからないからこそ、不心得者なんです」
「何だか不本意ですね。掃除を手伝うのはやぶさかではないですが、そうした不心得者の一人とみなされて掃除に参加させられたくはありません」

つい、犬のこととなるとムキになってしまう。自治会役員との対立はそんな感じで始まった。わたしは、散歩のたびに出会う犬友達数人に声を掛け、他の愛犬家達に非難の目が向けられないうちに見廻り隊を組織することにした。いわゆる自警団とも呼べるだろうか。
そうして、袋を持たずに散歩している人、袋を持っていても用を足した後に何もせずに立ち去ろうという人に一言注意し、マナーの向上に努めようと試みたのだった。
自警団の人数はごく少数にすぎなかったものの、効果はあったようだ。
見廻りをはじめて、三週間がたつ頃には、公園の草むらにぽつんと落ちているフンがめっきり減ってきたのだ。
結局、公園掃除に犬を飼う人が加わる話は少し延期になるかに思えた。
が、今度はわたしが代表者のように見なされてしまい、自治会の役員は直接やってきた。
「この間の件を、お話ししてから公園が少し綺麗になったようですね」
彼は素直に認めた。
「ええ、モラル向上の証ですよ。やれば出来るものですよ」
「でも、まだ、フンは落ちています」
確かに完全にゼロになったわけではない。でも、言いがかりに感じた。
「もし、落ちていたとしたら町内の人ではないと思いますよ」
「だから、誰がやったとかやらないとか言う議論から一歩踏み出してですね。全員参加ということで落としどころを探りませんか？」
と、何だか政治家のようなことを言い出す始末。元々、犬を飼うのは個人の自由であり、公園の掃除は自治会の決まり事だが、ボランティアの一環である。だから、犬を飼うことと公園の掃除とを強引に結びつけようという彼の意図が理解できない。

要請があってから最初の公園掃除の前の夕暮れ時のことであった。
我々自警団が公園を見張っていると、いつも見慣れた犬、「ゴン」を連れたご婦人が散歩させに来ていた。知っている犬だし、そう注意もせずにいると、急に催したのか、ゴンは草むらでしゃがみ込んで用を足した。たまたまポリ袋の持ち合わせがなかったみたいだった。
我々の方を見て、あらあら、やってしまいましたよ、という顔で気まずい笑い顔に

なった。
「まあ、一回くらいはいいんではないですか。そんなに大型犬でもないし」
「そうそう、どうせすぐに干からびて肥料になってしまいますよ」
　自警団の仲間はそう言ってご婦人を慰めた。わたしとて、犬仲間であればそう言うべきかも知れないが、仲間なのは犬だけであり、この女性とは面識がないのだ。見逃すかどうか少しだけ迷い、大目に見ることで同意した。
　運の悪いことは重なるもので、ことの一部始終を自治会役員の男に見られていた。彼は鬼の首を取ったように騒ぎ立て、わたしの言うことなど当てにならないとうそぶき、愛犬家仲間全員を次の公園掃除に駆り出すことを約束させた。

　渋々ながらも、次の公園掃除からわたしの声かけで愛犬仲間が参加することになった。必ずしも町内の犬を飼う人全員ということでもなく、徹底はされていなかったが体裁はあくまでもボランティアだ。
　見ると草むらの、特に立木の側にフンがころころと乾燥して落ちていた。わたしたちはゴミばさみで挟んでつまみ上げポリ袋に放り込んでいった。
「しかし、まあ、何ですな。普段は犬の顔しか覚えていないから、こうして飼い主同士だけで何かで顔を合わせるのもいいものだと思いますよ」
「それもそうですねえ」
　日光が照りつけ皆の額にいい汗が浮かんでいた。たまには犬抜きの犬仲間もいいものかも知れないと思った。了

不測のターゲット

わたしは空軍基地の兵器担当の軍曹だった。

月に一度の作動確認の日だった。ミサイル発射装置の電源を入れ、システムがきちんと作動するかチェックしていた。スイッチを入れて機器からのアンサーバック信号を確かめるだけのごくごく通常の「いつも通り」の作業だった。

係員もいつもの面々だ。わたしを支えてくれる一五人からなる作業チームだった。ミサイル機器管理小隊だ。

整備は順調に行われ、チェック済みのシートがわたしの元に次々と送り届けられた。後はこれをバインダーにはさみ、検査済みのサインを入れて軍司令部へ提出するだけだった。普段と何の変わりもない、ごくごく普通の日常だった。

「軍曹殿！　大変であります！」

と、部下のゴードン二等兵が叫び声をあげた。

「何事か？　簡潔に述べよ！」

「スイッチが.....スイッチが入ったまま、切れなくなりました！　大変です」

元々、この作業は最前線基地でのこうした事態を避けるために行われているものだった。不測の事態。.....大歓迎と言いたかった。機器の不具合が事前に判明することは、むしろ望ましいことだった。

わたしはゆっくりとした足取りでゴードン二等兵の元に近づいた。確かにコンソールパネルにはミサイル制御の「ＯＮ」ボタンが赤く点滅していた。電気的には作動していることを示すサインだった。単なる点灯の不具合だろう。わたしはこの時点では、この現象を軽く考えていた。

点滅しているランプの横ではコンピュータの液晶画面が何かを表示させ、その数字が次々と変化していたのだ。――何としたことか？　わたしはまだ状況の全貌を把握しきれていなかった。

「おい！　ゴードン二等兵！　どうなっているんだ！」

「先ほど、検査した所では異常はなかったのです。しかし、点検を終えてコンソールボックスの扉を閉じようとしたら、にわかに発射警報が鳴りだしたのです」

「ああん？　変なところに触れたのではないか？」

「それが.....もしかしたら、工具で回路基板のネジに触れたときに作動ボタンに接触してしまったのかも知れません。どうしたらいいでしょうか？」

「接触だと？」
　回路がショートすることだった。この瞬間、ゴードン二等兵が何かのボタンを押したのと同じ現象が生じていた可能性があった。コンピュータの液晶画面が秒読みを始めた。
　――一〇、九、八.....。

「おい。誰か！」
　わたしはこの装備品の管理担当者を探した。
　無線で呼び出すと、軍属の技術者が返事をした。
「軍曹殿。ミサイルシステムが動いています。現場で誰かが誤ってスイッチに手を触れたのではないですか？　　コンソールパネルの表面に赤い大きなボタンがあるでしょう？
　それを押し込んで下さい。緊急にシステムを停止させるものです。早く！」
　しかし、どこを見てもスイッチは見あたらなかった。
「軍曹殿。あれではないでしょうか」
　ゴードン二等兵は地面を指さした。草の上に赤いボタンの欠片が落ちていた。わたしは、――終わったと思った。
　ミサイルは火薬に点火して猛炎を吹き上げた。
　わたしたちは、二次被害を避けるためにその場で地面に伏せた。轟音とともにミサイル本体は空中に向かって、高くその排煙をまき散らしながらどんどんと上昇して行った。ごうっと噴射音だけが当たりに鳴り響いていた。ミサイルの速度はすぐにマッハ五にも到達する。ミサイルの姿が見えたその五秒後に轟音が地面にたどり着いた。わたしは、技術者に無線で怒鳴りつけた。
「おい。発射されてしまったぞ！」
「大変です。緊急停止ボタンは押せなかったのですか？」
「そんなものは、取れて地面に落ちていた！」
「それでは、あれですね。.....わたしの責任ではありません。管理小隊のあなた方の整備ミスですよ」
　と、悠長なことを言った。今は責任の所在を押しつけ合っているときではなかった。打ち上げられたミサイルの行き先を心配しなければならなかった。わたしは、司令部のキング少尉に連絡を取り、ことの顛末を報告した。

「あのミサイルは管制装置から切り離されると、最初に発見した熱源か、金属からの電波反射に反応する様に出来ている。射程は四〇キロだ。付近をジェット機が通りかかったら、もう最後だ。命中するまで追尾して飛び続けるだろう。おい！　　.....誰かいるか！」
　無線機の向こう側では、キング少尉が回りの誰かを呼び出している様子が伝わってきた。事態は急を要する。
「自爆装置は働かないのか？」
　わたしは技術者を問い詰めた。
「ですから、あなたが落とした赤いボタンを長押しすると自爆させることが出来た

のに.....」
「わたしのせいだと言うのか？　　ああん？」
「そう言う訳では.....」
　わたしの剣幕に技術者は語尾を濁した。
　射程は四〇キロ。八秒ほどで圏外になるはずだった。わたしは、どこにも命中することなく地面か海上に落下して不発に終わることを祈るのみだった。

　その時である。司令部の無線で情報が錯綜し始めた。わたしは耳を澄ましてやりとりを聞き取った。まずいことにこの上空を通過するジェット機があるらしかった。しかも、大統領専用機だという。当たっても当たらなくても、ニアミスになるだけで、大変な騒ぎになるだろう。
　わたしは自身が責任を取らされることを、いの一番に考えた。大統領暗殺事件の真犯人にされてしまう。大統領専用機が木っ端微塵に吹き飛んでしまい、死体の回収すら難しくなるだろう。わたし以外にも、空軍対空ミサイル連隊の責任者ごと首が飛ぶか、国家反逆罪の汚名を着せられ、処刑されることを案じた。
　上空で何かが光り、その数秒後にずーんと言う爆発音が鳴り響いた。

　この事件は表沙汰にはならず、テロリストが飛行機に爆弾を取り付けたのだと言うことで幕引きとなった。大統領暗殺とは責任があまりに大きく、軍の上層部だけでも話のまとめようがなかったみたいだった。了

蔵の中

店のワゴン車で高速道路を延々と走り、とある田舎に着くと同業者から聞いてあった農村の集落に入った。田んぼは青々とした中に稲穂だけそろそろ黄金色に変わりつつあった。今年も豊作をうかがわせた。村にいくつか点在する農家の中で、比較的裕福さを象徴する大きな土蔵がいくつもある屋敷の前でわたしはワゴン車を停めた。わたしは、アルバイトの藤本君に、わたしの後からついてくるように言った。

その農家を覗くと、当主らしいおじいさんが縁側でお茶を飲んでいた。わたしは、こんにちはと挨拶しながら庭から入っていった。

「何か用かい？」

「あの、わたしは東京で古物商をやっている者です」と、名刺を出した。

「ああ、古道具屋さんね.....」

「今までそう言った業者が来たことがありますか？」

「年に二、三回はあるよ」

わたしは少しがっかりした。わたしは、こうした農家や旧家の蔵の中を見せて貰い、刀剣や鎧《よろい》など、価値のある品物を探して交渉し、仕入れて東京にある古美術店で売ると言う商売をしていた。この手の業者は大抵、価値のあるものとないものをまとめていくらと言う買い付け方をするので、同業者が一度来たのなら、もうめぼしい品は残っていないはずだ。

「古道具屋さんは来るんだが、見たらすぐに帰ってしまうんだ。わしも不思議に思っていたんだが、あんたも見るかね？」

「え？　彼らは何も買わずに帰ったのですか？」

「そうだよ」

「それなら、一度見せてもらえませんか？」

「いいよ。いま土蔵の鍵を取ってくるわい」

わたしは、藤本君に向かって笑いかけた。同業者が見て、何も買わずに帰ったのなら高すぎて値段の折り合いがつかなかったのだろうと、わたしは勝手に解釈した。どんなお宝が眠っているのだろう。わたしは期待した。

庭を見ると、たくさんの植木は綺麗に剪定されていて、この家の裕福さをうかがわせた。母屋もしっかりとした材木が使われていて、玄関の柱など太い木材が真横に一本通されていた。継ぎ足しではなく一本の木である。こんな材料を使っているだけでも、たいそう金のかかった家であることがわかる。

しばらくすると、おじいさんがジャラジャラと太い鍵のついた束を手にやってきた。わたしたちはおじいさんについて土蔵に向かった。土蔵は三つもあったが、普段用のな

い古道具の類は一番奥の土蔵に入れてあるみたいだった。その土蔵の前に立つと、大きなかんぬき錠に鍵を差し込みガチャリと開けた。この鍵もかなり古そうな感じだ。
　そして、重たい土蔵の扉を力一杯引くと少しずつ開いていった。その時、中から冷気が流れた。藤本君は背筋をぶるぶるっと振るわせた。
「おい、どうしたんだい？」
「あ、はい.....いいえ」
　彼は何かを感じたようだったが、それがどんなものかは言わなかった。
「では、失礼します」と、わたしが声を掛けて中に入るとおじいさんは行ってしまった。中は真っ暗で古道具のカビ臭さが漂っていた。

　わたしが目ぼしい物がないか見繕っていると、ふと、彼は誰もいない所で暗闇に向かって語りかけていた。
「おじいさん。大丈夫ですか？」
　わたしは蔵の中に誰かいるのかと思った。彼が向かっている方を見ると誰もいなかった。
「おい。藤本君。どうしたんだい？」
「あ、いえ。いいえ。おじいさんがしゃがみ込んでいて、苦しそうにしていたので」
「ええ？　　誰かいるのか？」
　わたしは、ここのおじいさんが蔵の中に様子を見に来たのかと思った。しかし、そこには誰もいなかった。
「おいおい。目の錯覚かい？　　君はまだ若いんだろう？　　しっかりしてくれよ」
「あ。はい。おかしいなあ。.....さっきまで確かにおじいさんがいたんですよ」
「ここのおじいさんかい？」
「いや、違う人でした。頭頂部だけ禿げていて、周りは白髪なんです。確かに見えたんですが.....。やっぱり、目の錯覚だったのでしょうか」
　わたしはその話を聞き、背中がぞくりとした。確かに何かいる。霊感など少しもないわたしにも、そこにいたと言う何者かの気配を感じ取ったのだ。
　そもそも、農家であるこの家の蔵の中に、骨董品の壷や什器類があるのは、裕福だからあってもおかしくはない品物だった。しかし、刀剣や槍《やり》や薙刀《なぎなた》、そして、甲冑《かっちゅう》や兜《かぶと》の類があるのは、どこの買取現場でも事情があった。
　こうした武器の類を所蔵しているのは、戦国時代までは武士が農家と兼業だったことに由来するもの、その昔戦場となった田畑で、討ち取られた武士の骸《むくろ》から剥ぎ取る様に回収してきたもの、そして一番怨念の籠もっていそうなパターンは、戦《いくさ》に破れて這々《ほうほう》の体で落ち延びる武士たちを手にかけたと言うものがあった。多分、最後の事例では、鎧《よろい》や兜にはかなりの怨念が込められていると考えられた。

「藤本君。そのおじいさんはどんな格好だったんだい？」
　霊感のないわたしは、少しでも所蔵品の来歴を探ろうと彼の感覚に頼った。
「白い破れた着物を着ていました。よく考えると、昔の人の髪型と言うんですか？　髻《もとどり》があった気がします。……いや、違うかな？　えっと……すみません。はっきり見たんですが、細部がどうしても思い出せないんです」
「その着物に血はついていたかい？」
「さあ。そこまでは気がつきませんでした」

　わたしは、一旦その場を撤収した。農家のおじいさんに休憩をしたいと申し出て軒先で持って来たペットボトルのお茶を飲んだ。おじいさんは、これでもどうぞと、皿にお茶菓子を載せて持って来てくれた。
「ああ、申し訳ないです。……ときに御主人。この家は昔は何をしていたのですか？」
「変なことを聞く人だな。見ての通りの農家だよ」
「いつ頃からこの村に？」
「さあなあ。お寺の過去帳も天明《てんめい》の大火で燃えてしまっているし。……でも、戦国時代の末期に戦に敗れた侍が何人かこの村にたどり着き、田畑を耕し始めたのが始まりだとか言う物語を聞いたことがあるなあ」
　わたしは、落ち延びてきた侍たちの命より大切にしてきた、これらの武具を粗末にしたり売り払ったりするのを、彼らがよしとしていないことに気がついた。あのとき蔵の中で見た老人は彼らの訴えだったのかも知れなかった。わたしたちも何も買い取らず、この家を後にした。了

犬と散歩

　犬を連れて散歩していると、ときどき、犬を連れた人が挨拶してくることがある。
「やあ、どうも」
「どうも、いい天気ですねえ」
　そんな、他愛もない会話からはじまって、近所の話、自治会執行部の悪口など様々なテーマにまで話が及ぶこともあり、人付き合いの苦手なわたしに取り貴重な社交の場となっていた。犬がいなければ成り立たない挨拶であった。でも、ほとんどは犬にまつわる会話が多いのも事実だ。
「この子は女の子？」
　犬を飼っている人は「雄・雌」という用語を嫌い我が子のような表現を好む。
「ええ、だから、女の子同士だと仲が悪いときもあります」
　実際には、女の子と言うより、おばあさんという表現が近いような老犬だったが、あえて相手に合わせた。相手の愛犬はミニチュアダックスというのだろうか、背が低く足の短い、胴の長い犬種である。こちらのポチの周りをまとわりつき、くんくんと臭いを嗅ぎまわっている。聞くところによるとおしりの周りを嗅いで、お尻の穴に鼻をちょんとくっつけると仲良しの合図だという。犬はこれだけで、相手の年齢や性別、その他健康状態までわかってしまうらしい。もちろん、嫌いな犬には背後に回ることを最初から許さず、下手に近づこうものなら、わん、と吠えられる。これは、人間の飼い主でも同様だろう。嫌いな奴、苦手な奴に背後を取られるのは嫌であることに替わりはなかった。

　しばらく歩いていると、今度は向こうから大きめの犬がやってきた。飼い主を見ると若そうな女性だ。まだ、学生かと思えるくらいの年齢だった。それに対し、犬は白い雑種のよぼよぼの老犬だった。
「こんにちは。いい天気ですねえ」
「はい。いい天気ですねえ」
　わたしから声を掛けると、老犬がこちらのポチに近寄ってきて、女性もつられて近寄ってきた。きれいな皺のないジーンズに洒落たジャンパーという格好で、わたしのジャージ姿とは比べものにならないくらいよそ行きの格好をしていた。
「この子は、いくつくらいですか？」
　と、わたしは興味はなかったが聞いてみた。
「ええ、もう十四歳なんです。おじいさん犬なんですよ」

彼女はそう言って寂しそうに笑った。心から犬に愛情を抱いていると言わんばかりだった。
「うちの子は七歳です。でも、もらってきた頃に比べると大分くたびれてきました」
人間で言うと五十歳前後のおばちゃんに相当する。
その女性は、かがみ込んでポチの顔をくしゃくしゃとなで、ポチは気持ちよさそうにしてそのうちころりと寝そべりお腹を見せた。服従の姿勢だ。
「慣れていらっしゃるんですね」
「あれ、ご主人にはしないんですか？」
「ええ、全く」
こんなに愛想のよいポチを見るのも初めてだった。普段は餌をやるときしか、しっぽすら振らないのに、他人にここまでお愛想するなどまさに想定外の出来事だった。わたしはこの女性にある種の嫉妬さえ覚えたのだった。

次の日の夕方、わたしはいつものように犬の散歩に出た。首輪にリードを掛け、適度なたるみを持たせて犬のペースで歩いてやる。犬はこうしないとストレスがたまって死んでしまいます、と獣医から聞いていた。
自宅から二つブロックを歩いたところで、わたしは本当に犬のペースで歩かせてやろうと、首輪からリードを外した。
ポチは、首をかしげてわたしの方を見ている。が、わたしの本意を察したのかそのままいつもの散歩コースをとことこと歩き始めた。左端の電柱の根元の臭いを嗅ぎに行ったり、反対側の植え込みの中をのぞきに行ったりと、わたしがポチに引っ張られている動作をそのまま行っていた。まるで、わたしなどいてもいなくても同じだという風に。

しばらくして、同じように犬の散歩をしている人が通りかかった。
「まあ、ポチちゃん！　今日は一人なの？　偉いわねえ」
何が偉いのかわからないが、わたしはその光景を電柱の陰に隠れて観察していた。その婦人はポチの頭から背中をなでまわし、きれいに毛並みを整えた。ポチはしっぽを振り気持ちよさそうになでられていた。ポチは相手の犬と戯れることなく、ひたすら婦人の手に身を任せていた。
「でも、一人で出歩くと、ご主人が心配するといけないわ。早く帰りなさいね」
婦人はやさしくポチにそう言い聞かせると、ばいばいと手を振り行ってしまった。ポチは名残惜しそうにその後ろ姿をながめていたが、やがて、元の散歩コースに戻った。

わたしはひたすらポチの後をつけた。
そして、あるおうちの前で立ち止まった。そして、お尻を下ろして座り込んだ。「くぅーん」と甘えた声を出した。わたしは、何故この家の前でポチが佇んでいるのだろうと不審に思った。しかし、次の瞬間理由がわかった。家の中から奥さんが出て来て、ポチの前

におやつを置いたのだった。遠くから見た感じ「ビーフジャーキー」か何かの様だった。ポチの態度からして、普段から貰い慣れているみたいだった。――これはいけない！
わたしは電柱の後ろから身を乗り出し、ポチのリードが外れたのを追いかけて来た振りをして、ポチを捕まえた。
「あら、ポチちゃんのお父さん？」
「ええ。そうです。いつもうちの子が来ているのですか？」
「ええ。いつもは奥さんが散歩させておいでですよね？」
「ああ.....普段からおやつを貰っているとは知りませんでした。申し訳ないです」
　と、言いながらも、勝手にモノを食べさせるのはいけないことだと、言外に匂わせた。
「今が一番可愛いときですね」
　奥さんはそう言い、しっぽをふりふり、もっとおやつをねだるポチの頭をなでた。
　――今が一番。そうである。うちの子が一番可愛い。そんなフィルターが飼い主には存在していた。大抵は人間より先に寿命を迎える。だから六五歳以上になると犬を飼えなくなるのだ。ある意味厳しい現実だった。よその犬を可愛がる。無責任な様でいて、それなりに理由のわかる行為だった。
「わたしも以前、わんちゃんを飼っていたのですよ。もう、亡くなって五年ほどになるかしら。新たに飼えないから、知り合いの犬は出来る限り可愛がる様にしているの」
　奥さんはそう言ってポチの頭をなでた。了

軽トラタクシー

　この日、わたしは朝からパニックになっていた。
　午前中に出さなければならない書類を自宅で作成して、やっとの思いでメールし、かと思うと会社から電話が掛かってきた。こんなことをしている時間など、そもそもなかった。これから関西空港に行き、午後四時の便で南米チリの発電所の建設現場に行かなければならなかったのだ。
「まだ、寮を出ていないんだろう？　　ちょっと頼まれてくれないか？」
　と、上司は言った。
「もう、寮を出る所なんです。今日が締め切りの書類ならさっきメールで出しましたよ」
「それはご苦労様。用事は別件だ。これから向かうチリの現場に部品を届けてもらいたいんだ。もうそちらに着く頃だと思う。宅配便だから受け取ってそのまま、君と一緒に現地に飛んでもらえればいいから.....ああ、それと」
　そこまで聞いてわたしは電話を切った。
　時計を見るともう午前一一時になろうとしていた。いくらなんでも、もう寮を出なければならない。宅配便？　　そんなものを待つ時間などあろうはずがなかった。

　荷物は多かった。
　長い出張の予定だったから、服は秋物と春物を入れていた。ボストンバッグが二個とスーツケースが二つ。中には仕事で使う書類を束ねたキングファイルや縮小コピーしたプラントの図面などがぎっしりと詰め込まれていた。持ち運びはかなり不便だった。でも、空港でチェックインするまでの辛抱だ。後は現地に着くまで航空会社が運んでくれる。わたしは車輪の付いたスーツケースの上にボストンバッグを乗せ、後ろから押して移動した。幸い社員寮にはエレベータが付いていた。とりあえず、荷物は多かったが、表通りまで出ればタクシーが通るだろうと見通しを立てていた。

　部屋を出ようとしたときインターホンが鳴った。
「はい？」
　わたしは応答ボタンを押してしまった。
「宅配便です。お荷物が届いています」
　わたしは軽く失望の笑みを浮かべた。

本来なら、会社の工場から出荷され、運輸部門が輸出手続きをして然るべき船便などで現地建設工事事務所まで送られるべきものだった。多分、設計者の手配が遅れて、正規のルートでは現地に届かないことが急遽判明したのだろう。実際、わたしも何度か現地に行く人間に部品の持ち込みを依頼したことが何度かあった。そのときは何とも思わなかったが、実際、自分が手持ちすることを考えると、ものすごく大変なミステイクなのだと改めて思った次第だ。

わたしは部屋のドアを開けると、配達員が手押し車に大きな段ボールを五箱乗せて持って来ていた。軽く目がくらんだ。受取伝票に判子を押して受け取ると彼は仕事を果たしたと言わんばかりの態度で去って行った。わたしの足元には大きな荷物が置かれた。

――宅配便と入れ違いだったことにして、荷物をこのまま置いていくと言う選択肢が考えられた。そうしようか？　わたしは逡巡した。しかし配送伝票に判子を押してしまった後だった。荷物はわたしが受け取ったことになってしまっている。端的に言えばインターホンに出た時点でアウトだった。

寮の管理人に頼んで台車をひとつ貸してもらった。そして、額に汗して表玄関から荷物を外に出して歩道に積み上げた。タクシー会社に電話を入れる。しかし、荷物の内容を告げると申し訳なさそうに断られた。セダン型タクシー車両には積み込めないらしかった。わたしは時計を見ながら焦った。

と、丁度その時である。目の前に軽トラが停まった。

運転手が嬉しそうな目でこちらを見ていた。よく見るとこの軽トラのナンバーは営業車両を示す黒地に黄色になっていた。荷台は空っぽ。運転手が降りてきた。そしてこう言った。

「お客さん。どちらまで？」

「え？　運んでもらえるのですか？」

「ええ。タクシーですから」

わたしは若干不安を抱えながらも運転手の申し出を受け入れることにした。客はひとりしか乗れないらしいが、荷物なら三五〇キロまでＯＫだと言う。荷物を抱えて途方に暮れていたわたしにとり天の助けに感じられた。運転手は荷物を手際よく荷台に積み込み、縄で固縛した。

「関空までお願いします」

わたしがそう告げると、運転手はメーターを倒してから、シートベルトを着用するよう言ってクルマを走らせた。

道すがら、運転手に尋ねた。

「軽トラのタクシーなんてあったのですね」

「昔は後席の広さやドアの大きさなんかを細かく規制されていたんですけどね。平成二七年の法律改正でどんなクルマでもＯＫになったんですよ」

と、運転手が説明した。軽トラでいいと言う客は少ないながらも一定数存在するらしかった。ちょうど現在のわたしみたいな人間だ。たくさんの荷物をひとりで運ぶ。

もっとも、荷物をわたしの寮に送るのではなく、空港にある運送会社の窓口に送ればこ

んな苦労はしなくても済んだのだ。手際の悪さはひとえに上司の怠慢にあったと言える。
　乗り心地はいまいちだったものの、この日のわたしにとりものすごく助かる存在だった。関空に着くと運転手は荷物を下ろして、空港のカートを持って来て積んでくれた。
「どうもありがとうございました。運転手さんがいなければ出張が出来ない所でした」
「いえいえ。これが仕事ですから。何でしたらどうです？　　帰りの便もぜひ利用してください」
　彼はそう言って名刺をくれた。

　その日、夕方四時の便でわたしは南米チリに飛んだ。三日がかりの旅路だった。わたしが持ち込んだ荷物のお陰で工事も順調に進んだ。
　現地事務所には色んなひとが集まっていた。工事監督や労働者はもとより、各機器メーカーからのエンジニアたち。そんな中にひとりの女性エンジニアがいた。一緒に仕事をする上で段々と仲良くなった。そして恋に落ちて同じ便で日本に帰ることになった。

　三ヶ月後、わたしは再び関空に戻って来た。
　空港出口には客待ちの列があり、その中にあの軽トラタクシーがいた。しかし、わたしはひとりではなかった。顔を覚えていた運転手に謝ると、「いやあ、いいことではないですか。お幸せに！」と言い、また別の客を探し始めた。ひとりきりで荷物を大量に抱えたお客。横目に見ながらわたしたちは普通のタクシーを選んだ。了

寂れたお化け屋敷

わたしはとあるアミューズメントパークのマネージャーをしていた。

小さな施設で正社員はわたしの他、切符販売係の田中君の二人っきりだった。

色んな乗り物やアトラクションがあり、平日、週末に関わらず、いつもそこそこの人出で賑わっていた。もちろん経費はあんまりかからない様にしていた。各施設の係員は皆アルバイトだった。とりわけ、ドル箱であるお化け屋敷には親会社が提携している俳優プロダクションから役者の卵を派遣してもらっていた。みな、将来は演劇で身を立てたいと思っている人ばかりだったから、お化けや幽霊の役を見事に演じていた。知っているわたしですら、背筋がぞくぞくとしたものだった。

毎日、わたしは歩き回っていた。

設備は古かったので、どこか塗装がはげている箇所はないか、鉄骨にひびが入っていないか、モーターやギアに異音はないか。そうした日常点検を兼ねて、また、どの施設にどんな年齢、性別のお客さんが入っているのか、実際に肌で感じられるようにしていた。

ある日、親会社から通達が来た。さらなる経費削減のためにアトラクション施設をひとつ廃止したいと言うものだった。小さいながらにもきちんと利益を出している積もりだったわたしにはショックな言い分だった。どの施設にも愛着めいたものを感じていた。どれかひとつをなくしてしまう事にものすごく抵抗感があった。それに正社員を配置していなかったため、廃止した所で節約出来る固定費はほとんどないだろう。しかし、決定事項だと告げられ、次の日からわたしの気持ちは重くなった。

日常の見回りも、「少しでもよくしていこう」と言うものから「どこを削れるだろうか」という見方に変わってしまった。

わたしは切符係の田中君にお客さんの声を尋ねてみた。

「最近どうだい？」

「ええ。どのアトラクションも評判は上々みたいですよ。特にお化け屋敷が最高だと言う意見が多いです。リピーターさんもいらっしゃいますね」

「そうだろうねえ。お化け屋敷はうちの一番の施設だからねえ」

わたしは頭の中でアミューズメント－パークの全体像を描いていた。一番の売りは

やっぱりお化け屋敷だろう。そして、ここを中心にゴーカートやメリーゴーラウンドやジェットコースターが置かれている。
「中でも、看護師さんの幽霊が怖かったという声が多いですよ」
「看護師さん？」
「ええ、そう言っていました」
　わたしは、人員配置表を確認した。
「看護師さんなんて、このお化け屋敷にはいないよ。君」
「でも、確かに怖かったと.....」

　このお化け屋敷は三つのエリアからなっていた。
　まずは寂れた墓場だ。人魂が出て妖怪キツネが出て、土葬の墓場を経て、その途中に幽霊が出る。そして、廃病院に導かれる。診察室と病室、霊安室からあった。そこには死体役の演者が寝ていてお客が通ると起き上がるという案配だった。
　そして、廃屋へ。ギシギシ言う床を歩き幽霊に襲われながらトイレや寝室を回る。これがコースの全貌だった。病院はあるものの医師や看護師は配置していなかった。
「看護師の幽霊？　　何者なんだ？」
「いないって本当ですか？　　確かに見たと言うことでしたが、いないハズだと仰るんですか？」
「うん。でも、このことはしばらく他の人には言わないでくれないか。僕がちょっと調べて見ようと思うんだ」
「わかりました」
　と、答えて彼は職務に戻った。

　休憩中の演者のリーダーの女性に尋ねた。幽霊の格好をしてジュースを飲んでいた。そしてわたしの顔を見て「お疲れ様です！」と元気な挨拶をした。少し違和感がある。
「看護師ですか？　　確かにいませんよ。病院エリアは死体役だけです」
　と、彼女はわたしの問いかけに答えた。しかし「実は」と彼女は声をひそめた。
「演者の中にもいるんですよ。見たと言うひとが。でも、みんながみんなではないのです。いつもと言う訳でもないみたいですし。ですから、確証はないんです。でも診察室には何か気配みたいなものを感じるのですよ」
「ええ？　　本当かい？」
　わたしはお客さんのいない時間帯を見計らって病院エリアの中に入ってみた。壁がすすけて陰鬱な雰囲気の診察室と隣の病室。まさに廃病院だった。何となく背筋に冷たいものを感じた。――もしかしたら本物の幽霊が出たのだろうか？　　いや、それが本当だとしたらこっちが真っ先に取り潰されそうな気がした。それだけは避けたい。

　わたしは事務室に戻りお化け屋敷を企画した会社に問い合わせた。
「ああ、あの病室ですか？　　ええと.....」
　担当者はもう何年も前のことになる制作時の記録を調べてくれた。「そうですね。実

際の廃業した病院から処理費用をもらって引き取ったものみたいですねえ」と教えてくれた。
「ええ？　本当ですか？」

わたしは更に調べを進めた。
元の廃業した病院は市内にあるさざなみ病院だとわかった。そこで当時働いていた看護師や薬剤師を見つけることが出来た。そして、当時の話を聞き取った。
「病院はガンの末期患者さんばかりを受け入れている所だったんです。もう全身に転移が進み、鎮痛剤で痛みを抑えるだけの施設でした。そこに葉山さんと言う看護師がいたんです。もう亡くなっていくだけの患者さんに寄り添い懸命に尽くしておいででした。その葉山さんもあるとき体調を崩してしまって、そのときにご自身のガンが見つかったんです。それも自分で看ていた患者さんと同じ末期ガンでした。そして、数ヶ月の闘病後に亡くなりました。ご自身が看ていた患者さんよりも早かったんです。さぞや無念だったと思います」
と、わたしに話してくれた。
――看護師の幽霊は本物だったのだ。
このときわたしは確信した。診察室で感じた冷気と霊気。それらはまがい物ではなく実在の看護師さんの残された意識だったのだ。
そしてこのことが、このお化け屋敷が流行っている理由であることを悟った。本物のお化け屋敷だったのだ。了

ただいま

真知子の趣味は卓球だった。中学のときに部活経験があるものの、それ以降は勉強の忙しさにかまけていて、気がつくとラケットのラバーが硬くなり、剥がれている状態でもあった。転機が訪れたのは大学に入ってからのことである。初心者でもＯＫだと言う上級生からの勧誘を受けて入部してしまった。

初めての本格的な卓球。

しかし、親切な先輩が手取り足取り教えてくれた。もっとも、そうでもしないことには、せっかく勧誘した新入生もすぐに辞めてしまうのだろう。

そして、その先輩こそが現在の真知子の夫であった。

結婚は結構早かった。夫は二年先輩だったが、真知子の卒業を待つかのようにプロポーズされ、いつの間にか結婚式場の見学に二人で行くことになるとは、最初のうちは夢だに思わなかったし、どちらかというとタイプではなかった。

しかし、真知子の両親は「今の彼氏を逃してはいけない。法学部卒の公務員なのだろう？　どんなに不景気になっても食いっぱぐれることもないし、将来が安定しているじゃないか。今の人に決めておしまいなさい」と強引に勧めた。

そして、真知子が卒業してすぐに結婚するに至った。就職先は夫の勤め先の外郭団体で、出産して産休を取るまでの腰掛け仕事の予定だった。

真知子は今年、結婚して二五年になる。

子供は早い時期に生まれて今はもう独立していて、それぞれの天職に就き、せっせとその技量を磨いているみたいだった。長男からは来年の三月に第一子の出産予定であることを聞かされ「ああ、おばあちゃんになっちゃうの」と、嬉しさ半分、虚無感が半分だった。

夫との仲は大変よかった。

毎週末は地元公民館に申し込んである体育館に通っていた。

カコン、カコンとピン球がラケットと卓球台に反射する音がないと一週間が終わらない気がするほどだった。
夫の卓球の腕前は真知子の初心者級とは異なり、かなり上級者であることは知っている。インカレでは代表チームのレギュラー選手でいつもベスト１６かベスト８に入っているほどだった。従っていくら二五年前の腕前だとしても、本気で勝負すれば彼のサーブは真知子が空振りして、それだけで勝敗が決まってしまう。

そして、救いは夫の部下で家が近所である水谷瑞恵が時々加わったことだ。腕前はそれなりにという真知子と同じくらいのレベルで、交代しながら夫との対戦をすることで丁度よい感じだった。彼女は真知子とは親子ほど年が違うが、夫の部下でもあり同じ趣味ということもあり親しくしていた。

でも、今の卓球は趣味のものである。
夫は本気を出していなかった。真知子がリターンを打ちやすいようにフォアハンド側に打ってくれていたし、それに何より打ち返せないほどの強烈な球をお見舞いされることは、全くと言っていいほどなかった。
「ラリーを続けよう。お互いに打ち返せるかも気にしなくていい。気楽にゆっくり楽しもうぜ」
と、夫は毎回体育館に入る前にそう言った。
この日、真知子は何だか嫌な予感がしていた。卓球のことを考えるのは楽しい。しかし、虫の知らせと言うのであろうか。
「どうしたんだい？」
ラケットを手に卓球台に向かおうとして夫は立ち止まった。
「え？　あ？　ううん。何でもないわ。楽しみましょう」
しかし、夫の打つ球はいつになくキツかった。バシッと卓球台の端に決まり、真知子は打ち返せなかった。
「今日は何だかキツくない？　いつもより」
「そんなことはないさ。俺はいつも通りだよ。真知子こそ、普段の体のキレがないぞ」
とはいえ、真知子自身体調の変化など全くと言っていいほど何もなかった。――どうしたのだろう？　どこか悪いのだろうか。夫の打つ球に全然追いつけない。

そして卓球台を借りている時間が残り一〇分となったとき、夫は真知子の左側.....バックハンドに強烈な球を打ち込んだ。「あっ」と叫び真知子はラケットを持つ手をねじり、バックハンドで球を打ち返した。が、しかし、球はネット当たり自分のエリアに落ち、ラケットを振り抜いた勢いで倒れ込んでしまった。「あっつつ」手首を地面についた真知子は叫んだ。
「おい、大丈夫か？」

「何ともないと.....思う」
　真知子の左手首に激痛が走った。――折れているかも知れない。見る見るうちに手首は腫れてきて、痛みも増して立ち上がれなくなった。
　一晩中、たらいに張った氷水で患部を冷やし続けて痛みを紛らわせた。
　月曜の朝一番で、整形外科にかかると、やっぱり手首の細い骨が折れていて、入院して骨と骨をつなぐ手術が必要だと言われた。左手は指も動かせないし、何より痛みに耐えられなかった。真知子はその場で入院を決意した。約一週間だった。
　手術は局部麻酔で行われた。骨に穴を開けてチタンのプレートを入れて固定してボルトで留める。医師の指示をはっきりした意識で聞きながら、そんなに酷かったのかと内心ドキドキしていた。

　そして、一週間の入院をして家に帰ると、中は驚くほど綺麗になっていた。夫一人で食事は困らなかったのだろうか。洗濯物もたまっていなかったし、掃除も行き届いていたし、食器などの洗い物も何一つたまっていなかった。

　――夫はそんなことをする人ではなかった。
　真知子の脳裏に水谷瑞恵の存在が浮かんだ。あのとき夫がなぜ激しい球を打ってきたのか、なぜ、真知子の苦手なバックハンドで返さなければならないほど難しい球だったのか。もしかしたら、全てはこの空白の一週間を作り出すための企みだったのではないか。真知子は夫を疑った。

　しかし、家の中に第三者の存在を疑わせるものは何一つ.....本当に何一つ残されていなかった。夫に気づかれないよう、次の日は不自由な左手をかばいながら、ソファの隙間やスライドドアの溝の中など徹底的に探し回った。

　そして、ソファのマットの隙間から長い女の髪の毛が見つかった。
　今はショートボブにしていたので長い髪があるはずはなかったし、その髪はキューティクルがつやつやの若い女のものだった。水谷瑞恵に違いない。そう信じ込むには十分な状況証拠だった。

　真知子はボロボロと涙をこぼした。やっぱりそうだったのだ。女はこの一週間、夫との逢瀬を楽しみ、ソファの上で情事に耽ったのだ。そうに違いない。

　週の半ば。真知子は調査会社に夫の素行調査を依頼すると共に、女の髪の毛のＤＮＡ

鑑定を申し込んだ。

　しばらくして連絡が入り真知子は事務所へおもむいた。
「髪の毛はあなたのものでした。若いときは伸ばしておられたのですか？」
　それを聞いた真知子はその場にへたり込んだ。
　椅子に左手をついたときに激痛が走った。

　――こんなものをわざと見つけさせ疑惑を逸らさせようとしたのではないか。
　真知子の疑惑は次々と膨れあがり、妄想が妄想を引き起こした。
　もう、こんな調査会社に任せてはおれない。真知子は自ら夫の尾行を始めた。

　役所での入り口、そして職場。夫は水谷と楽しそうに話をし、一緒に休憩時間のコーヒーを楽しんでいた。そして定時。
　夫と水谷は共に職場を出た。
　――おかしい。いつも二時間ほどの残業があるはずだった。実際、家に帰ってくるのは午後十時前だった。その間、この女と何をしているのだろう？
　尾行生活が長引くにつれ、真知子の鞄の中身は膨らんでいった。
　カメラに双眼鏡にＩＣレコーダーに指向性マイク。そして、昨日からはナイフが加わった。

　そして家では笑顔が増えた。
　真知子は夫を疑っていることを悟られない様に勉めて明るく爽やかな笑みを絶やさなかった。ときおり家に遊びに来る水谷瑞恵にも優しく親切にした。
　――いつか、証拠を押さえる日に備えて。そして、水谷が油断している所を襲うのだ。
　真知子は夜中にナイフを研いだ。シュッ、シュッと音を立てて。

　長らくそんな生活が続いた。
　左手首の傷はいつしか癒え、再び卓球を楽しめるようになった。夫との仲は非常に良好で、夫婦生活の手本にしたいと、近所のひとからはそう言われるようになった。水谷瑞恵との関係もそのままだ。
　夫はあいかわらず午後十時前に帰宅していた。真知子の「笑顔」はますます爽やかさを増していった。周囲に殺意がバレないようにと。了

虚偽の発言

　私はＫ地検みなと支部に勤める検事だった。ある日被疑者の取り調べる仕事が一段落する頃合いを見計らって、みなと署の刑事課長が面会に来た。何やら法律上の相談がある様だった。
　法律に違反するのかどうか見当がつかないとき、警察だけで判断出来ないときなど、ときどき来ることがあった。取り調べが必要な被疑者は連日列をなして引き立てられてくる。ひとり終わると次の分という多さだった。しかし、所轄警察の刑事課長とはいい関係を構築しておかなくては業務に支障がでかねない。一〇分だけという条件で私は話を聞くことにした。
　とある会社の若手女子社員が自殺したという。度々上司から虚偽の発言をするよう強要されるのを苦にしていたそうだった。そう刑事課長は話した。自殺と決まれば警察はそれ以上の捜査は行わない。しかし、その原因に納得出来ない遺族の思いがあった。

　開口一番に刑事課長は口を開いた。
「虚偽の発言を強いられると言うのは罪に問われるのでしょうか？」
　強要罪は脅迫や危害の告知などにより、無理矢理自分の要望を実現させる行為だ。どの程度の脅迫だったのか、場合によりけりだった。
「ただそれだけでは、何とも言えないですね。その方は何をされていたんです？」
「民間の気象予報会社でキャスターをしていました。予報が当たらないことから、嘘をつくのが商売だと揶揄されたり、誹謗中傷を浴びていたりしたことを苦にしていた様です。これは視聴者からのＳＮＳのメッセージでした」
「会社との労働契約に指示通りの原稿を読み上げることが含まれていたなら、会社の責任は問えないですね。でも前途ある若者の将来を潰してしまったのなら、それなりに社会的責任は問われるべきです」と答え時間を稼いだ。そんな判例があるのか、起訴して裁判に持って行けるのか、そのことに自信がなかった。「この件は暫く私に預けてもらえないですか？ 私なりに時間を見つけて調べてみたいと思います」と、時間もないのに安請合いしてしまった。
そして事務官に依頼してここ数か月の予報と実際の天気を比較したデータを作ってもらった。確かに刑事課長の説明で悪口を言われていたみたいで短時間の予報はともかくとして、週間天気などについては的中率は四〇パーセントを切っていた。後はその数字をどう評価するかだった。

これらについては、気象の専門家と確率論を専門としている数学者に意見を聞くことにした。多分、司法解剖などを依頼しているみなと大学の研究者がいいだろうと判断した。わたしは裁判のない日を選んで大学に教えを請いに出かけた。

気象モデルで計算によって天気予報を算出する分野の専門家は現状を説明してくれた。
「民間の天気予報会社は気象庁からのデータや、それらの独自解析により、一番適切だと考えられる検討結果をテレビやラジオで放送しているのですよ。ただ.....」
彼の言葉にわたしは続きを促した。
「現在のコンピュータ科学では、風速、気圧、気温、蒸気の発生量などの計算は、それぞれ単体では比較的正確に求められるのです。しかしこれらを一緒にすると途端に計算が難しくなるのです」
「具体的にはどういうことですか？」
「例えば小数点以下の一番下の位がひとつ違っただけで答えが百万倍も違う値を取ることがあるのです。理論上もそうなっています」
「それは具体的に.....」
「計算上では蝶の羽ばたきがハリケーンを引き起こすのです。もう直前のデータが得られる短期予報しか当たらないのですよ」
「現在の技術の限界と？」
「端的に言えばその通りなのです」
担当教授の話では予報そのものが、気象会社の手に負えるものではないと言う印象を受けた。だとしたら「天気予報が当たらない」可能性が大きいとしても、会社自身が虚偽発言の強要をしたと見なすのは難しいと感じた。

次に隣の棟にある数学の確率論の専門家に面会した。彼女は「そうですねえ」と言葉を切り出した。「わたしは気象の専門家ではないですが、天気の予測の真偽は判定出来ますよ」
「それは頼もしいですね。実際はどうなのでしょうか？」
「例えばここにサイコロを用意して、一か二なら雨、三か四なら曇り、五から六なら晴れと見なして、二時間おきの天気をサイコロで予測します。もちろんこれは気象学を無視した当てずっぽうです」
「それにどんな意味があるのですか？」
「次にその天気予想会社のここ三ヶ月の週間天気予報が当たったかどうか調査します。この大学の気象学研究室でデータベースを作成しているのでそれを拝借して比較します。ざっと四〇パーセントの確率で当たっています。次にサイコロ予報と比較します」
教授がパソコンに向かい「簡単なシミュレーションです」といいパソコン上で流れる数字をまとめて平均値を出した。結果は三八パーセントらしかった。
「統計学の検定では有意な差は認められませんね」
端的に結果を述べた。

「どういうことですか？」
「天気予報は、サイコロを振って求めた偶然の数字と差がない.....数学的な話ですが。確率論からはそう言えます」
「そんなことが.....」

　次にわたしは当の自殺したとされる女性の実家を訪れた。
　両親からはそんなことで心が折れる様な娘ではなかったと言われた。ただ.....天気予報の番組に視聴者からのメッセージがネットのＳＮＳ掲示板に表示されるようになっていたと彼女の父親は語った。
　最後に面会した彼女の上司はこんな事情を述べた。元々当のＳＮＳは各地の話題を寄せてもらうシステムとして確立したものだった。ところが昨今のゲリラ豪雨で浸水被害や死亡災害が出たことから予報の不確実性に対する風当たりが強くなっていて彼女が矢面に立たされた側面も否定出来ないと語った。「お前のせいで子供の遠足が中止になった。死んでしまえ」とか「当たらない天気予報を垂れ流すのは詐欺じゃないか。予定キャンセルになったぶんを弁償しろ」とか罵詈雑言が並んでいた。
　私は、彼女の無念を晴らすために、掲示板へ無責任な書き込みをした人を彼女のＰＴＳＤについての暴行罪で。そして上司をそうと知りつつ虚偽の発言をさせた強要罪で立件することを決めた。了

機密書類

　サイバー攻撃なんて別の世界の出来事だと今このときまで思っていた。
　わたしの勤めている会社は比較的大きな機械メーカーだった。ある日、会社の大型コンピュータに外部から不正アクセスがあり、中に保存されていたファイルの何点かが流出したのだ。そのことに気づいたのは不正アクセスをしたハッカーからの脅迫状が届いたことからだった。
　不運にも社長秘書の元にメールの形式で送られて来て、それが即座に社長たちの目にとまったのだ。わたしは情報管理部門の責任者として朝一番に社長室に呼ばれる羽目になった。
「山田課長！　一体我が社の情報管理はどうなっているんだ！　こんなことがあるとなると、機密書類も他の会社に筒抜けとなるのではないだろうな？」
「はっ。現在被害の状況を確認している所であります。仔細は追って.....」
「馬鹿野郎！　現に脅迫状が来ている。身代金を払わないと情報をネット上に公開するとあるぞ。こんな金など払う気はないからな！」
「はっ。仰せの通りに」
「そうだ。人事関係の文書は含まれていないだろうな？」
「は？」わたしはその時、社長の言った言葉の意味がわからなかった。
「今回の不手際。早急に処置しろ。いいな」
「はっ」

　取り敢えず、数時間の余地が与えられた。わたしは自分の部署である情報システム課に戻り、職員を集め、社長室に送られたメールの出所を探ると共に流出したファイルの全貌を把握すべく、大型コンピュータへのアクセス履歴の解析を命じた。
　作業は難航した。ただでさえ文書や契約書に顧客データに図面や開発データなど、膨大なデータ量が日々、社内の各部署との間でやり取りがなされていた。脅迫犯である悪質なハッカーの集団はどこで我が社の大型コンピュータに目をつけて、暗号のパスワードを解析したのか全くもって不明だった。

　一時間ほどのアクセス履歴の解析で.....正規アクセスを含めると一日に百万件近くあったが、アクセスされたと思しき時間帯が割り出せた。後はこのアクセスが大型コンピュータの中にどこまで入り込み、何のデータを盗み出したのか突き止める必要が生じ

た。もっとも、犯人の目的は機密情報を人質に取って我が社から大金を受け取ることに相違ない。そのことだけは確かだった。

「山田課長。不正アクセスの相手と思しき記録とコピーして持ち出されたデータの概要がわかりました」と、コンピュータエンジニアの社員が報告した。
「相手はどこの誰だ？」
「それは.....相手の一次的なＩＰアドレスしかわからないのです。プロバイダに対して情報開示請求をするしかありません。それと、流出したデータは新製品の情報や経理書類、そして最先端の開発技術のノウハウが込められた書類などで占められていました」
「ふうむ。それは問題だねえ。しかし社長室に報告出来るレベルではないし、第一に対策案が何もないじゃないか」
「でも、うちの課で出来ることはここまでで限界だと思います。後はこう言った対策を専門にしているホワイトハッカーくらいでしょう」
　――ホワイトハッカーとは、悪質なハッカーとは違い、それに対抗する正義の味方だった。こうした事態に対処して相手を突き止め、逆に相手コンピュータに侵入して盗まれた情報を取り戻すことを生業としていた。
「あてはあるのかい？」
「情報システム課のＯＢがその手の会社を立ち上げていると聞いたことがあります」
　――今のわたしにとり、願ってもない存在だった。
　わたしはその場で依頼を指示した。
　その日のうちにＰＣと通信機器らしきものを鞄に詰めた背広姿の男がやって来た。わたしは名刺交換を行い簡単な挨拶をしてそのまま現在トラブルに見舞われていることを告白した。そして情報が公開されれば事業に支障が出ることを説明した。
「喋っているこの時間だけでも数百万円の利益が消えて行くのです」と。

　男は持っていた自分のＰＣを会社のネットワークに接続して悪質ハッカーのアクセス履歴から相手の素性を同定すべく作業を始めた。そして割合すぐに相手を特定した。男は「この相手こそが新製品の情報や経理書類、そして最先端の開発技術のノウハウが込められた書類などが盗み出した本人だと断定」した。どれも社外秘で公開されてしまうと非常に厄介な代物だった。犯人の脅迫状は社長からは教えてもらえなかったが、社長の言い方はものすごく激しいものがあり、身代金は多分、社長決裁だけで出せない様な金額。.....多分であるが数十億円くらいかも知れなかった。そして人事部の書類には特に厳重なる扱いをする様に命令があった。

　男は更に作業を進め犯人のＰＣ内部を探り出した。盗まれたファイルはまだ外部には出ていない様だった。
「これらはどうします？　　こちらからウイルスを送り込んでそれらファイルを破壊や暗号化してしまうことも可能ですが？」

――まだ相手の他には流れていない。わたしは作業の継続を希望した。男は注文通り犯人のＰＣ内のファイルにウイルス攻撃を仕掛けて該当するファイルを破壊した。データをランダムに切り刻みシャッフルして復元不可能な状態にしてしまうのだ。

社長からの命令はこれで一件落着だった。「人事関係の重要な」と言われたファイル。それが何だったのかわたしは気になった。元のファイルの中身を点検した。

その中で人事部発行の「最重要機密」扱いのファイルがあった。その中身にわたしは愕然とした。「昭和三〇年六月一日付の人事部長通達〇一三五号、女子社員選考基準の件」と言うものだった。

「採用担当者への伝達事項。ちび・でぶ・ぶすは採用するべからず」とあった。今だったら会社のコンプライアンスが問われるほどの重大機密だった。そして、実際、昭和三〇年からずっと今までこの基準が適用されていたのだ。

わたしは、毎年入ってくる女性社員が皆そろって美人でスタイルのいい人ばかりなのを喜んでいたのだが、こんな通知があったとは夢にも思わなかった。この事実は公開して会社の裏方針を改めさせた方がよかったのだろうか。わたしは悩んだ末に事態が収拾された事実だけを社長に報告した。了

小惑星探査機の持ち帰ったもの

　まさかそんなことが、現実に起こり得るのだろうか？　　わたしの長年の研究生活の中で、正直な所、思いもしなかった。ずっと奇跡が起こるのを待ち望んではいたのは事実だ。しかし、実際に起こるのはそれではなく、至って平凡な事象ばかりだった。今日このときまでは。

　わたしは研究棟の廊下を歩いているとき、ふと、背後から奇怪な音がして首筋に殺気を感じ、とっさに実験室の鉄製扉のレバーを引いて開けると、さっと中に飛び込んで頑丈なロックをかけた。並の力では破れない強度を持っていた。

「山田先生！　　あれは一体何なのですか？」

　実験室には先客がいた。実験助手だった。

「あれが何かと問われても、僕にもわからないよ。君の方が研究所内の噂話には詳しいのではないのかい？」

　わたしがそう言うと、彼はかぶっていた防護服の頭の部分に手をやり、ヘルメットの位置を直した。彼は、今日の朝から大騒ぎになっている中、防護服に身を包み金属製の長い棒を手に取ってこの実験室の奥深くに隠れていたみたいだった。

「聞いた話では.....小惑星探査機から持ち帰った岩石サンプルから、何か異変が起こったそうなのです。でも、非常事態を全員に周知することもなく、第一研究室で内々に処理しようとしているとか。わたしの得た情報はそれだけなのです。監視カメラで研究棟内部を見ていたのですが、何だか、タコみたいな奇っ怪な生物がぬめぬめとした体液を出しながら奇声を出して行ったり、来たり。何がなんだか訳がわかりませんよ」

　第一研究室では、小惑星から岩石や土壌のサンプルを持ち帰って分析し、地球に於ける生命の起源や進化の謎を解き明かすことを主なテーマとしていた。実際、五年ほど前のことだ。太陽系外から直径八〇〇メートルの巨大隕石か小惑星が地球と金星の間を通過するのに合わせて、我が国の宇宙開発機構と、英米独仏伊の五カ国で予算を出し合ってロケットを打ち上げたのだ。

　このプロジェクトは大成功で、どことも国民の大歓声で埋め尽くされた。

　サンプルは小惑星の岩と土砂からなり、採取したものの合計は八キログラムにも達し

た。これまでにない成功である。あのときの興奮は、我が国の科学者の間ではもう何と表現してよいかわからないくらいだった。そして、当研究所にも岩石と土砂が重々しいくらいの金属容器に封入されて持ち込まれたのだ。数多くの分析機器を総動員して「何か少しでも変わったものはないか？」を調べに調べ尽くしていた。ただの岩石なら成果がないところだっただろう。しかし、これだけ大がかりなプロジェクトを遂行して世界中でも大々的に成功が喧伝されたのだ。「ただの岩石でした」なんてことは、絶対に言えない台詞と化していた。

　そんな中、研究所の努力不足をあざ笑うかの様に諸外国での新発見のニュースが飛び交った。アメリカでは新元素が発見されたと発表され、先月にはドイツの研究チームから、生命の可能性を示す水の存在が確認されたと報告がなされた。このまま何もなしではこちらの面目が丸つぶれだった。

「あの生物が宇宙から来たと言うのですか？　　山田先生！」
　実験助手の男は叫んだ。
「第一研究室が何をやったかは部外秘なのでよくは知らない。しかし、あれだけの大規模プロジェクトだったんだ。何も出なかったでは面子の問題もあるのだろう。何かよくわからない生命体でも混じっていたのかもしれない」
「その危険性を無視して、生命体の培養を行ったと言うんですか？」
「多分な.....あ！」
　その「タコ」の様な生物が体液を吹きつけるとガラス窓や金属がみるみるうちに溶けて穴が開きだした。.....ガラスすら溶かしてしまう！　　もしかしたらフッ化水素か何かを含んでいるのかも知れない。この実験室も安全とは言えなくなっていた。
「先生！　　ガラスが！」
　実験助手の男は縮こまっておびえていた。
「地球の生命は有機体、すなわち炭素を素にしたものだが、広い宇宙のことだ。フッ素を素にした生命の体系があっても不思議でも何でもないと思うよ」
「では？」
「炭素系の物質ではあの生き物のエネルギーにはならないから、そのうち切れるまで終わらない可能性もある」
「そんな！」

　扉の外にいるのだろうか。「キキキッ」と奇声を発して粘液を何度も吐き出した。もう、中に入ってくる！　　わたしたちのパニックは頂点に達していた。わたしは機具保管庫の鍵を開けて中からプラチナの壷を取り出した。もしかしたらタコみたい生物だが本当にタコみたいな習性を持っているなら、壷の中に入ろうとするだろう。そして蓋を閉めれば完璧に封じ込めることが出来るのではないかと考えた。いかにフッ化水素とは言えプラチナや金を溶かすことはない。そこに一縷の望みを託した。

二人して机の上にのぼって距離を取り、生物の動きを観察した。
やっぱりだった。
まるで蛸壺の様に、その「タコ」は中に入っていった。わたしは恐る恐る蓋を手にして近づき壷を閉めて回して封じ込めた。ふうっとため息が出た。

「山田先生！　これは一体何です？」
実験助手の男は機具保管庫の中を指さしてわたしを糾弾する口調になった。中にはわたしが長年蓄えてきたプラチナや金の壷や延べ棒がぎっしり詰め込まれていた。研究者だといくら威張っていても、給料は安いし有期雇用なので退職金も年金も期待出来なかったのだ。研究費を少しずつ余らせて、こうした買い物に使っていた。退職のときに家に持ち帰り換金すれば、そこそこ老後の資金になるだろう。しかし、あくまで内密でのこと。実験助手の男に見られたのはまずかった。
「どうだろう。ひとつ上げるから、見なかったことにしてもらえないだろうか？」
わたしは金の壷を差し出した。しかし、彼は頑固だった。
「山田先生！　これは研究費の横領に値する重大犯罪ですよ！　見なかったことになど出来ませんよ！」
買収は出来なかった。わたしはプラチナの壷の蓋を取って男の方に向け、壷の底をライターの火で炙った。――キキキッという奇声を上げて「タコ」は男の上半身に被さった。彼の悲鳴が聞こえたがじきに静かになった。了

三人のキャメロン

選挙がこんなに難しく、様々な人間の思惑が入り組み、複雑怪奇な様相を呈するものだとは今このときまで考えもしなかった。

父親であるジョセフ・キャメロン下院議員が病気で急逝してニュー・ウェールズ選挙区に空きが生じ、補欠選挙が行われることとなった。とはいえ、一般民衆にとっては誰を選ぶかなんてことは大した問題ではなかったのかも知れない。

しかし、ジョセフの息子だからと言ってすんなりそのまま地盤を引き継ぐことは民主主義社会では望むべくもない。やはり、人となりや考え方、政治的主張が問われるだろう。そのときのわたしは政治学大学院を卒業したばかりの若造に過ぎなかった。唯一、明るいニュースがあるとしたら父の親友であり政策秘書であり有能な選挙参謀であったチャールズ・ウィッチェム氏が協力を申し出てくれたことだった。

「ジョン。お父上が急にこんなことになり、大変残念に思っている。願わくは君が後継者になりこの選挙区を守ってくれればと思う」

彼は柔らかな笑みを浮かべた。

「もちろん頑張ります！　父のことは尊敬していましたし、父の元で経験を積んだ後には跡を継ぐ気でもいました。でも、今のわたしでは能力不足ではないでしょうか？」

「いやいや」

彼は笑みを消すことなく、わたしの懸念を打ち消した。「あなたのお父上が最初に立候補したのは二十八歳のときだったよ。きっと大丈夫。わたしがサポートするよ」

「では、すぐに立候補の表明をした方が.....」

「それは、少し待とうじゃないか。選挙には戦略が必要だ。ときとして想定外のことが起こるものなのだよ。無能なものなのに、いっときの人気を得て当選する場合もよくあることなんだ。民衆はそのひとの能力を見ることは出来ないんだ。何を言うか、何をするか。それだけしか判断材料はないのだよ。.....戦略としては最小限の情報で最大限の効果を得ること。わたしが少し考えてみるよ。しばらく時間をくれないか」

「わかりました。父の最高の親友であったあなたを信頼しています」

しばらくして彼から電話があった。

どうもこの選挙区の住民のほとんどは、父がどんな政策に取り組み、どんな成果を上げていたのかあまり知らない様だと言った。やって来た功績は非常に大きいと思えたのだが、民衆は「あって当たり前」と思っているらしかった。

「ウィッチェムさん。と言うことは.....父の功績を訴えて、政治路線を引き継ぐみたいなことを表明しても駄目だと言うことですか？」

「ジョン。慌てなくてもいい。お父上は十分にやってこられた。これまで災害のときにも天候異変のときがあっても、街に大きな影響が出なかったことはこれからＰＲすれば理解してもらえると思う。.....ただね」
「何です？」
「お父上が逝去されたこと自体知らないひとが多いみたいなんだ。だから、何というか.....」
「知らないひとが多い？　どういうことです？　では、わたしは出られないとでも言うのですか？」
　わたしが強い口調で責めると、彼は言葉を選びながら説明してくれた。
「亡くなったことを知らないと言うのなら、もう、そっくりそのまま立候補者名を『Ｊ．キャメロン』としてしまうのはどうだろう？　民衆はジョセフのつもりで君に投票してしまうだろう。でなければ、お父上の逝去を大々的に宣伝して、ジョンがジョセフの跡を継いでこれまで通りの政治を行いますと訴えるか、どちらかしかない。多分、『Ｊ．キャメロン』として立候補する方が賢明だと思うんだ」

　そして、立候補の受付が終了した。
　驚くべきことに「Ｊ．キャメロン」と言う候補者が三人もいたのだ。――一体彼らは何者なのだろう？　同姓同名のひとがこの選挙区に固まっていたのだろうか。わたしはいぶかしんだ。
　しかし、そうだとしたら選挙参謀のウィッチェム氏が知っているはずだった。この事実を踏まえた上で父の名前と紛らわしい名称を付したのだ。この後、選挙管理委員会から問い合わせの連絡が入った。
「キャメロン候補。実は.....」と、事情を説明し始めた。と言っても、他の「Ｊ．キャメロン」の素性がどうとか言う話ではなかった。これからの選挙戦に混乱がもたらされることを防ごうというだけのことだった。
「こちらで候補者の名前に、注文をつけたり、変更を求めたりすることは出来ません。しかし、このままでは選挙が混乱してしまうので、候補者名に番号か符号をつけることをお許し頂きたいのです。『Ｊ．キャメロン（１）』というのでいいでしょうか？」

　これはこれで仕方のないことだった。
　ウィッチェム氏は不快感をあらわにしていたが、結局選挙管理委員会の提案をそのまま受け容れざるを得なくなってしまった。選挙の間中、わたしはウィッチェム氏の言う通りの順番で街頭演説に立ち「キャメロン、キャメロン！」と名前を連呼した。もちろん、「（１）」と言うのもつけてだ。そして、父の功績を持ち上げ、自分こそが後継者なのだと主張し続けた。
　選挙が終わり、わたしは落選した。
　他のキャメロンたちも同じく落選した。当選したのは別の人物だった。ウィッチェム氏や他の候補者の秘書たちが集まり「反省会」を開いてくれた。選挙のため顔は知って

いたものの、他の「キャメロン」たちと話をするのは始めてだった。ひとりが話した。
「実は、本名ではないのです。前職のジョセフ・キャメロン氏にあやかろうと考えてのことでした」
　もうひとりのキャメロンも同じ事を言った。それぞれ、ジェームズ・カムラン、ジェレミー・カメロンと言うらしかった。名前は似ている。通称をキャメロンにしてしまうのもよくあることだった。
　ウィッチェム氏はわたしの横でビールを飲みながら渋い顔でそんな会話を聞いていた。
「ジョン。選挙管理委員会から最終得票数を教えてくれたよ。五万三千票」
「そうですか？」
「しかも、『Ｊ．キャメロン』の票を全部足すと、有効得票数の過半数を確保出来ていたことになるよ。.....ちっ」
　と、舌打ちした。舌打ちしたいのはわたしも同じだった。選挙民はやはり父の死を知らずにそのまま「現職」に投票したのだろう。他の「Ｊ．キャメロン」がいなければ、わたしの当選は確実だったという皮肉な現実だけが残った。
　ビールを一口飲んだ。――落ちて当然だったのだろうか？　　後味は苦かった。了

安楽死病棟

　金曜日午後一時になる少し前。
　病室に男性看護師が迎えに来た。わたしはそのまま病棟の端にある処置室と書かれた部屋へと運ばれた。そしてベッドの上で横たわるよう指示された。わたしは言われるとおりベッドに上がった。横には点滴台があった。これを見たとき少しだけ心の迷いが生じた。
「先生。すみません。タバコを一本だけ吸ってもいいですか？」
「ええ？　　もう時間ですよ」
　医師は面倒臭そうにそう告げた。もうこれから意識がなくなるのにと言いたげだった。そして、乱暴な手つきで腕時計を確認した。ひょっとしたらこれから処置されるのはわたしだけではないのかも知れなかった。
　世界各国から安楽死希望者が殺到しているのか、そんな感じがした。もう、処置室の中での作業も流れるがごとくというのだろうか。
「五分だけ待ちます。さっさと吸って来てください。後がつかえているのですよ」
　そう言われ、わたしは「遺品」となる予定だった私物入れの中からタバコの箱とライターを持って処置室外側の長椅子の所まで行き、タバコを吸った。後五分の命だった。わたしは最後の一服を味わった。

　処置室に戻ると、誰かがベッドの上で横たわっていてさっきの医師が脈拍を確認し瞳孔にライトを当てたりしていた。――十三時十分。死亡確認です。とさっきとは打って変わって厳かな口調で述べていた。
「ち、ちょっと！」
　わたしはベッドを誰か知らない第三者に奪われたことへの文句をつけようとした。
「おいおい、部外者は入らないでくれますか？　　あなた誰です？」
　医師と看護師はそう言った。
「いや、わたしはエリック・ブローニーです。今日、ここで安楽死の予約を取っていたのです。ほんの五分ほどタバコを吸っていただけです。さっき帰って来たら、この知らない人がわたしのベッドを奪って.....」
「変なことを言わないでくれますか？　　まるで、わたしたちが患者取り違えをしたみたいな言い方ではないですか！」

医師は怒った口調でそう言った。
「しかし！　これはわたしのベッドですよ！　すでに処置費用も払い込んであるんです。領収書もあります！　よく調べてください！」
と、わたしは大文句をつけた。しかし、医師と看護師は憮然とした表情で、自分たちのミスを一切認めなかった。それはそうだろう。もし、安楽死希望の意思表示をしたひと以外のひとに「処置」を施したのなら、この国の法律でも殺人罪になってしまいかねないのだ。

それにこの死体となった人物は一体どこの誰なのか？
わたしは、彼の顔をしげしげと見つめた。
自分の他にも安楽死を希望する輩がいて、わたしがベッドを空けた五分の間に入れ替わったのだろう。料金は安くはない。この処置には一週間の待機期間も含めて五万ドル支払っていた。誰でも払える金額ではない。迂闊だった。自分の身が誰かに乗っ取られる。そんなリスクは安楽死を考えて以来、考えたことがなかった。

そして、この後、困ったことが起こった。わたしが、書類上、死亡したことになってしまったのだ。
ここの医師が死亡診断書を市役所へ提出して市の共同墓地に埋められる。「エリック・ブローニー。外国人」として。
わたしは病院を放り出された。市役所に行き、慣れない言葉で事情を説明し、本物のエリックが生きていることを証明しようと試みた。が、係官は頑として受け付けてはくれなかった。
――どうしよう？　自分はどうしてこんな田舎くさい国に五万ドルも出して来てしまったのだろう？　後悔の念が次から次へと湧き出てきて止まらなかった。こんなことになるとは……。しかし、あのときに吸った一本のタバコがこの奇妙な事件に巻き込まれたきっかけだった。それも後悔のひとつだった。

これから、もう一度安楽死を試みるとしても、諦めて故郷に帰るにしても、自分自身がどこの誰かを示す公的証拠が必要になった。エリック・ブローニーの身分証は現時点では使用不可能だ。すでに金曜日に死亡したことになってしまっていたからだ。とすると、後は自分のベッドに割り込んだ誰かが、どこの誰かであることを突き止めて、この一連のドタバタ劇を収拾させる必要があった。それも、自分自身で捜査して証明するところまで持って行かなければならなかった。
それとも……病院に潜り込み、わたしと同じ様な間抜けな患者がタバコを吸いに廊下に出るのを待ち続け、そいつと入れ替わってやろうかとも考えた。やられたことをそのままやりかえすのだ。しかし、誰もタバコを吸いにはいかなった。

とにかく.....。

わたしはこの国の法律と市の条例を細かに調べ始めた。朝から夕方まで図書館に通い、空いた時間は道路上に捨てられている空き缶や段ボールを集めて再生工場に持って行くことで生活費の工面をした。

これはものすごく苦労だった。ただでさえ持病があるのだ。薬も切れてしまったしこちらでは病院にもかかれなかった。

そして、詳しく法律を調べた結果わかったのは、一度死んだ人間を生き返らせる方法はないと言うことだった。わたしはこれら一連の経緯を面白おかしく.....実際には、こんな所へ来たばっかりにという、恨み辛みの記事だったが、図書館のパソコンの掲示板に載せた所、結構評判になり、多くのひとの目にとまることになった。

そんなある日、市の篤志家から声がかかった。

「大変そうだねえ。生きるにせよ死ぬにせよ、何とか協力したいと思うんだよ。資金提供してあげようか？　希望すればだけど」

という、軽いノリだった。

この時点では、彼の説明によるとわたしの記事には百万人の読者がついているそうだった。広告収入を受け取ることで、生活費や病院代くらいは払えるようになった。死んだ人間は雇用出来ないが、ＩＴ先進国のこの国では、ネット上のＩＤだけでお金を受け取ることは違法ではないと言われた。

病気を抱えながらのコラムニストとして、何となくだが、わたしは生き延びる道筋を示された気分だった。こうなると急いで死ぬ必要もなくなっていた。わたしは寿命がつきるまで十五年ほどの間、記事を書き続けた。了

空っぽのパッケージ

フリーランスのライターをしていると、突発的な仕事が多いものだ。いきなりメールで注文が来たり、電話がかかってきたりだ。「トイレのリフォームの記事を一万字で」とか「美容室ジプシーの方のための店選びのコラムを八千字で」とか。締め切りは次の日だったり、二日後だったりと。マイペースで仕事が出来るのがメリットだが、その反面、まとまった休日も、趣味の時間もあまり取れないのが玉にきずと言えた。

そんなある日、「次の締め切りは来週でいいから」と言われ、久々に自分の時間を取ることが出来た。趣味のゲームに取りかかるには持ってこいのタイミングだった。

そう言えば、数年前に買ったゲームのパッケージが包装も解かれないままに棚の隅に積み上がっていた。もう、こんなに自分の時間がなかったのかと、改めて慌ただしい生活だったと実感させられた。

それにパッケージ自体が古いもので、現在最新のゲーム機には対応していなかった。これも、棚の奥の段ボール箱に収められたものが、もう何年も埃をかぶって保管されていた。新しいゲーム機が発売される度に「これいいな」と思うこともしばしばで、やっぱり、こなす時間が全く取れなくても、いつかは楽しもうと思って、とりあえず購入すると言ったことが多かった。

ゲーム機もゲームソフトも最初に一定数売れれば増産されることもあるが、大抵の場合は市場から一回ハケてしまえば、後から手に入れるのは段々と困難になっていく。

それに、古いゲームソフトは古いゲーム機でしか使えない。そんな訳でソフトもゲーム機も同じくらい古いものが積み上がっていたのだ。

少し棚を眺めて「今日はこれをしよう」と思い、パッケージを手に取った。包装のフィルムを剥がすときの心のときめきとでも言うのだろうか。このときだけは、心躍るものがあるのは否定出来ない。

――だとしたら、もっと上手に時間を作って普段からこなしておけと思うこともしばしばだった。

来週まで作業がないとすると、まるまる三日くらいは趣味に費やせることになろうと思う。積み上がってしまったゲーム全部を試すことは不可能だろう。ひとつだけでも、時間をかけてプレイしてゲームを堪能してみよう。

「ファースト・ファンタジー」
　五年前に買ったロールプレイングゲームだ。
　主人公が自分で設定して作った従卒を引き連れ、中世風の荒野を旅しながらアイテムをゲットしていく。まさにゲームの王道だ。わたしは封を切って箱の蓋を開けてみた。ことりとも音もしなければ、ぱさりという説明書の音もしなかった。　――あれ？　と、信じられないことが起ころうとしている予感がした。蓋を下にして箱を縦に横に振ってみた。何も落ちてこないし出てもこない。空っぽだった。
　こんなことがあるのだろうか？
　いや、何万本も発売され、あっという間に売り切れてしまったほどの人気作だったのだ。もしかしたら万分の一くらいの割合で、梱包ミスがあったかも知れなかった。
　他のゲームも同じ様に開けて見た。空っぽの箱が三つとちゃんと入ったものが四つ目の間に置かれた。万分の一にしては随分と高い確率だった。

　わたしは、パッケージの裏に記されたゲームメーカーのサービスセクションに電話をかけて聞いてみた。
「ええと、そんなソフトがありましたっけ？」
　と、とぼけた声の男性の声がした。
「ええ。現物が手元にあるんです。開けたら空っぽだったんです。一体、お宅の生産管理はどうなっているのですか！」
「ううん。.....でも、五年前に生産中止になった商品ですからねえ。万が一、そんなことがあっても、交換も出来ないのです。もう、残っていないので。ですので返金という.....ああ、これも民法上の時効になりますので、正式な対応は出来かねるのですよ」
　と、厚顔さむき出しの台詞を口にした。

　わたしは他のゲーム制作会社にも問い合わせた。どことも同じ様なことを口にして言い逃れた。確かにいずれも問題を提起するには時期が経ちすぎていた。発売直後から完売までの間であれば交換も可能だし、返金の処理もしやすいという。それに、ゲームソフトは元の制作会社とパッケージの制作会社、販売会社とは別組織になっていることが多かった。　従って、古いものについては保証を訴える先がないというのが正直な所であった。

　ゲームを楽しむことを諦め、わたしは事の顛末をブログに書き込んで周りの人たちの反応を確かめようとした。案の定、「そんなに長期間積み上げていたことが間違いだ」みたいな意見が多かった。
　しかし、ある書き込みが注意を引いた。
「Ａ社は五年前に会社ぐるみで商品の抜き取りをしていた！」
　という。わたしと同じ目にあったことがあるひとがいるらしかった。彼の意見を読むと、当時アダルト向けのいかがわしいソフトを販売していて、当局の風俗担当部署から

目をつけられていたことがあり、そのもみ消しのために贈賄が行われ、資金の捻出のために中抜きを行ったと言う信じがたい内容だった。そんな大それたことが、この公明正大なネット社会の片隅で行われている。
「被害者は大抵、買ったゲームやビデオを数年間放置していた。君のように」
「え？」
　そう言えば、積み上げていたのはゲームのパッケージだけではなかった。映画やドラマのＤＶＤやブルーレイなど、結構な数にのぼっていた。でも、どうして行動が読まれたのだろう？　　どうして製品の買い手がそんな積み上げる性格の持ち主だとわかるのだろう？
「このゲームに興味を持つこと自体が、君の性格を表しているんだ。そして買う。この行動は他の購入者全員に共通していた。だから、確率的ではあるものの、ある程度確実な手法だったのさ。あはは」
　そんなことを書き込まれた。
　だとすると、こうしたゲームやＤＶＤを購入することで、こちらの性格や趣向も含めた個人情報がダダ漏れになっていることになる。信じられなかったが、ネットの闇の部分でもある。わたしは結局、この会社に対して法的措置を講じることはなかったし、他の被害者も同様みたいだった。こちらの性格を熟知していたかの様な裏金作り工作。してやられたと思った。了

絶滅危惧種

重要な問題は常に日常の直下百万メートルでくすぶり続けている。意識しなければ手の打ちようがなくなるほど深刻化するまで気づかないものだ。そして気づいたとき.....問題は常に挽回不能な状況で発覚する。

太陽系外の水の惑星「テッラ」。

水と太陽、土に恵まれた理想郷だった。そこでは高度な知的生命体「ホモ・フトゥールム」がテッラとそこに住む生物たちを管理、統治していた。彼らは地上や海洋を汚染することを避けるために宇宙空間に人工都市を築き上げてそこに居住して独自の社会を形成していた。テッラの自然を守るための叡智だった。地上では多様な生命が発達してそれぞれが我が世の春を謳歌していた。

そこではホモ・サピエンスと呼ばれるサルから進化を遂げた生物が地上世界での食物連鎖の頂点に立っていた。ホモ・フトゥールムたちは、彼らが過去何万年の太古の昔から未来永劫にわたり生物の中での王者としての地位を確保し続け繁栄の極みを続けるものと思い込んでいた。そして、彼らが我々ホモ・フトゥールムの未来を占う一種の生物モデルとなっていて、その興隆には多年にわたる観察が行われていた。

ところが.....。繁栄が頂点に達したと思われる五十年前からホモ・サピエンスの生殖活動が不活性となり、出生数の低下状態が続き、ついに前年度の出生数は二〇人となってしまった。今年の見込みは五人。来年度は０となる可能性も否定出来ない。

環境省環境局にいたわたしは、地上を管理している自然保護レンジャーの男から相談を受けた。

「マクシムス・ディミトリス局長。地上で問題が発生しました」

と、深刻そうな顔で言った。

「何事が起こったんだい？」

「ホモ・サピエンスの年齢構成が急速な高齢化に入ったのです。具体的には子供の個体数が減っていて、個体数全体は大きな変化はしていないのですが、今後、二十年から三十年で種の絶滅という深刻な事態となることが予想されるのです」

確かに重大な危機だった。
しかし、実際には地上世界に何百万種もいる生物のひとつにしか過ぎない。その中では時と共に絶滅する種もあれば、新たな進化や交配で出現する種もある。長い目で見れば、惑星の歴史上、取るに足らない事象のひとつだった。
「しかし、局長。ホモ・サピエンスは我々ホモ・フトゥールムに最も近い動物種です。もし、それらが絶滅の危機に瀕するなら、何十年かあとに、我々の社会を襲う事態にもなりかねないと思うのです。どうでしょう？　一度、地上の様子を視察してもらうというのは？」
「ふむ」
「それに、ホモ・サピエンスたちは彼らの政府で絶滅危惧種を保護する制度を作って運用しています。もちろん、我々の社会でも。もし可能ならば一度実態を見ていただき、ホモ・フトゥールム側で何らかの措置が取れないか.....。これはわたし個人の意見ではありません。自然保護レンジャーの北半球グループでもささやかれていることなのです。でも、実現させるには局長や事務次官や大臣の認可が必要です」

地上の様子.....。わたしが前回視察に行ったときには、ホモ・サピエンスは繁栄の極みであり、高度な石炭の火力を利用して、蒸気機関社会を形成していた。今回の視察では、様相は一転していた。彼らはエレクトロニクスを駆使して、社会活動の一部をコンピュータなるものを経由して人工知能を利用するまでになっていた。
地上で唯一の高度な技術と社会性を有する種だった。他の動植物とは一線を画している。だからこそ、我々ホモ・フトゥールムの社会の試金石として観察に値する存在となっていたのだ。だから、端的に言って今回の危機は彼ら自身で解決してもらわなければ困ると言っても過言ではなかった。
「ホモ・サピエンスを絶滅危惧種に指定は出来ないでしょうか？」
「ふうむ」
わたしは腕を組んだ。さっきの理由から、他の動植物でその指定を行い、種の保存を人工的に補助するのは、自分たちホモ・フトゥールムの未来がその成り行きに沿うと言うか、我々社会の将来像を示すものでもあったのだ。種の保存に我々の介入はありえる話だったものの、出来ればそれは避けたい。彼ら自身で解決出来なければ、その未来の指し示すものは我々の未来そのものと言えたのだ。

彼の言う通りに「絶滅危惧種」に指定すれば生殖方法のやり方が格段に広がる。確かに、もう、個体数が減りすぎて駄目だという手遅れの例も過去にはあった。しかし、現在のホモ・サピエンスたちの状況を鑑みる限りでは、まだ、挽回の余地がありそうに思えた。
具体的な方策としては、優良な子孫を残し得る個体を分別して「強制的に交配」させたり「体外受精」させたり「顕微鏡受精」させたりと言った手段があった。手遅れの例をのぞいてほとんどの絶滅危惧種はこの方法で何とか「絶滅」を回避することが出来たのだ。

「君.....」
「適用は可能でしょうか！」
「そうじゃないよ。ホモ・サピエンスたちは他の動植物と違って『人権』を尊重する社会を形成しているのが特徴だったね。だとしたら、そんな方法が取れるのだろうか？」
「いや、そんなことは.....」
　レンジャーの男は言葉を濁した。そして言った。「彼らの『人権』より種の存続の方が大事なのではありませんか。局長！」

　わたしは静かに首を横に振った。種の存続は確かに大事だ。しかし、そんなものを超越した特徴である「人権」を彼らは何よりも重要視していた。彼らだって種の滅亡という状況が問題なのはその知能レベルから理解しているに相違ないはずだ。彼らの「人権」はそれより重要な意味を持っていたのだ。
　わたしはホモ・サピエンスたちの将来は一旦置いておいて、自分たちホモ・フトゥールムの行く末にどう影響が出るのだろうか。出るとしたらどう対策を打つべきだろうか。そもそも全ての動植物を支配する我々に「絶滅危惧種」なんて言う定義を当てはめることが出来るのか。先にその議論を熟成させなければならないと、上層部に意見具申した。
　上司は報告書に目を通して言った。
「種の存続と人権とどちらが大切だい？　　絶滅してしまったら人権なんて絵に描いた餅だろう？」という意見と、もうひとつ真逆の意見が対立した。「人権は生きる権利をも包含する、よって種の存続より優先されるべきだ」
　この対立は延々と続き結論は出なかった。了

硝煙反応

　平和な日常生活が、実存とはかけ離れたものであることに、そのときのわたしは気づいていなかった。まるで薄氷の上で飛んだり跳ねたりする体操選手のようだった。物事の真相に気づかないというのは恐ろしい。いや、知らずに最後まで過ごすことほど、心穏やかなことはないだろう。

　午後六時。すでに夕闇が迫り遠くのものが見えにくくなる時間帯だった。仕事の帰りを急いでいるわたしの前に警官が立ち塞がった。近くで何か事故か事件が起こったのだろうか。検問が敷かれていた。
　何も知らなかったわたしは、警官と目を合わせることなく通り過ぎようとした。
「ちょっと、あなた。停まりなさい！」
　きつい口調で停止を命じられた。わたしは「単なる事情聴取だろう。大したことはあるまい」と気軽に応じた。しかし、警官の目つきは鋭かった。普段の親しみやすい地元の守り神でもある交番の巡査と同じ人物のはずだ。このときの彼は全く違う表情を見せた。事件が起こったとき、ほとんどの警官はにこやかな表情から取り付く島もない険しい表情に切り替わるのだ。ほんの一瞬でだ。

「お勤め帰りですか？　どちらへ向かっています？　何をされている方ですか？　お名前は？　住所は？」
　と、警官は矢継ぎ早に質問してきた。
　考える余地を与えないやり方だった。適当なことを言って誤魔化してしまおうとしても、こんなに一度には嘘を考えつくのは困難だろう。そして、その場での思いつきなど一旦口にしてしまうと、一貫性があるはずもなく、瞬時にして支離滅裂となりたちまち嘘が嘘であると判明してしまう。嘘をついたことがわかると、こちらも後には引けなくなるし、警官も相手を解放することはなくなってしまう。
「ああ……」
　わたしは正直に住所と氏名と職業を述べてしまった。
　これから向かう先と自分の住所地に矛盾はなかった。嘘をつく必要もないし、調べられても少しも困らない。少し深呼吸して険しい顔の警官に正々堂々と述べると心の余裕が出来た。しかし……。

「あなた.....山田さんと言うんですか？　少し焦げた臭いがしますね。上着かシャツかに」
「ええ？　そんなはずは.....。仕事が終わった後にちゃんとシャワーを浴びたのですよ」
「お仕事は何をしているのですか？　ええ？」
「山の中の射撃クラブの管理人です。主に施設の管理とたまにですが、初心者のコーチもしています」
「ちょっとこちらへ来てください」
　わたしは警官に手招きされるがままに、検問所の横に停めてあったワゴン車の所へ連れて行かれた。中には何かの鑑識課員がいた。彼はわたしの手首から何かの痕跡を探すかのように念入りに綿棒で表面をこさげとった。
「硝煙反応です」
　と、鑑識課員が言った。
　同時に奥にいた別の刑事みたいなひとが出て来た。
「お宅.....今日の四時三十分頃は何をしていました？」
「ええと」
「ついさっきでしょう？　何を考えることがあるんです？　さっさと答えなさい！」
「そんなこと言われても.....仕事ですよ」
「どんな？」
　わたしは頭の中で記憶を遡った。しかし、単純なことほど思い出すのに時間がかかるものだ。一時間半ほど前に何をしていたのか、とっさには答えられなかった。業務日誌を見たらすぐに答えられただろう。しかし、夕方暗くなる前の帰り道のこと。手懸かりは自分の記憶しかなかった。答えられなければこのまま警察署に連行されてしまう。現状では証拠がないので任意同行だろうが、すぐに何らかの証拠を持ちだしてそのまま逮捕・起訴されてしまう恐れがあった。わたしは、誰か力になってくれるひと、弁護士に知り合いがいないだろうかと考えた。射撃クラブの関係者にそんなひとがひとりくらいはいたかもしれない。硝煙反応は業務上付いたものだったが、事件の証拠だと言われれば、反論は難しかった。このままでは連行されてしまう。わたしはなんとか、最悪の事態だけは回避したかった。

　そのとき道路に青いバンが停まり、中から別の刑事が降りて来た。目の前の刑事の部下と思われた。そして、さいぜんの刑事に報告した。どうやら最初の刑事は事件捜査の統括をしている立場のひとらしかった。部下の刑事は言った。
「被害者宅の前の電柱にあった防犯カメラにクマが映っていました」
「クマ？」
　刑事とわたしは同時に言った。わたしの職場は山の奥。森林地帯の半ばにあった。その性質上、民家の近くは具合が悪いし、かと言って都市部から時間がかかるのも都合が悪い。山裾の民家の奥と言えばいいだろうか。もっとも、この条件が、わたしを重要参考人にしていたのだ。

　彼は話を続けた。
「殺害されたお年寄りは、農業の傍らハンターをしていたようです。普段は畑が被害を受けないように山の中でイノシシを狩っていました。この日、昼寝の最中にクマが自宅に侵入したのを見て慌ててライフルを手に取ろうとし、不運にも暴発してしまったと言うのが一番しっくりいく説明となりそうなのです」
「ライフルは被害者の持ち物だったのか？」
「はい。被害者の手と腕から硝煙反応が検出されました。間違いありません」
　さらに防犯カメラの映像からは、家から出て行くクマの姿を捕らえていたそうだった。
　想定された事態は、クマは被害者がライフルの暴発で傷を負って倒れた後に家の中を荒らし回り、その後逃走してしまったと見るのが相応だった。
　その報告と前後して被害者の遺体の司法解剖が終わったとして、署から連絡があった。胸部から発見された銃弾は、その場にあった彼のライフルのものと線条痕が一致していたそうだった。

　わたしの容疑はそれで晴れたが、当のクマはその後行方不明のままだった。被害者宅の玄関先を映した映像の姿を最後に手懸かりは途絶えていた。多分、そのまま裏山に逃れたのだろう。とりあえずは、被害者宅にあった食料を食べ尽くして満足していたのに相違ない。
　刑事たちはクマの被害を立証したものの後の対応までは出来なかった。この先は行政の管轄だ。そして射撃クラブ所属のハンターたちから後にそのクマを仕留めたと報告を受けた。胃の中から薬莢や金属くずが見つかったそうだった。了

最後のフライト

　もう自分の手で空を飛ぶことはないだろう。
　そう思っていたが、チャンスは意外な所から舞い込んできた。

　わたしは六十四歳のパイロットだった。
現在は不況に伴う減便のせいで飛行機には乗せてもらえず、地上で事務仕事をしていた。そして来月、定年を迎える。

　そんなわたしに運行の話が持ちかけられたのだ。
　老朽化.....と言っても、本当に劣化したのではなく、旧型で運行コストが高いために、新型の中型機に置き換えられた機体の運行だった。Ｂｗｉｎｇ《ビーウィング》７４７大型ジェット旅客機だ。

「客は乗せません。ただ、機体をロサンゼルス郊外のモハベ空港まで運んでもらいたいのです」
　運行マネージャーにそう言われただけだった。
　わたしはそれでもいいと思った。大好きだったジャンボジェット。子供の頃から憧れ、訓練学校に入学し、努力を重ねてパイロットになり、好景気だった時代は機長まで勤め上げてきた機体だった。

「山田さんには、機長を務めていただきます。副操縦士は同じくジャンボジェットのパイロットだった西島さんを予定しています。運航日はあさって。燃料は.....」
　現地までたどり着けるギリギリの量だった。天候不順や風向きの影響で着陸予定地が変更された場合でも、迂回の出来ない航路を取るしかない。まさに、特攻隊みたいなフライトを予想させた。

「現地到着後、機体は燃料・オイルを抜かれ、駐機場に留め置かれる予定です。.....解体が決まるまでの間」

マネージャーは淡々と説明した。客を乗せるのでもなく、貨物を運ぶのでもなく、ただスクラップ場まで運ぶだけの仕事だった。

わたしは、搭乗する機の最終点検を自分の手と目で行った。客がいないとはいえ、自分にとり身の安全を守るために必要なことだった。点検して回っていると、副操縦士の西島君がやってきた。

「そんなもの、コクピットのコンピュータで確認すればいいのに」
と、とんでもないことを言った。
確かに最新鋭機ならコンピュータで全て管理されている。しかし、計器と実際の機の状態とは違うものだ。実際に自分の身体を使って確認することで、長年のフライト生活で事故もなく過ごすことが出来たのだ。

でも、彼にそんな説教を垂れることはしなかった。この先が長い若者ならともかく、わたしも彼も、定年が間近のロートル選手だった。彼も新たな最新鋭機のライセンスを取得して、残りの何年かをパイロットとして過ごすのであれば、この説教も生きてくるだろう。しかし、彼もわたしも、このフライトが終われば、また、元の地上勤務で定年までの時間を過ごすことになるのだ。だから、無意味な説教を垂れるつもりは毛ほどもなかった。

当日、わたしはコクピットに座り、計器を確認し、エンジンを始動させた。
昔ほど、快調ではない四基のエンジンが補助ユニットからの動力を受けて回転を始めた。このとき、どこか調子が悪いのか、普段聞き慣れたエンジン音がしてこなかった。キイーンと言うタービンの音も濁って聞こえた。西島君は平気な顔でコクピットからコンピュータの示す画面を確認していた。

「オール・ＯＫ。異常なしです。機長」
「おいおい。コンピュータ画面だけじゃ駄目だよ」と言いかけてやめた。わたしは管制塔に伝えた。
「管制塔。こちら大日本航空００１便。滑走路への進入をリクエスト」
「こちら管制塔。滑走路。オール・クリア。進入を許可します」

わたしは、スロットルを開け、機を前進させ導入路を通過して離陸地点へと移動させた。
「管制塔」

「進路クリア。離陸を許可」
「了解。離陸します」
　スロットルを全開にすると、機は加速し長い滑走路を一杯に使い離陸・上昇を開始した。

　ランディングギアを格納し扉を閉じる。そして急勾配でぐんぐんと上昇していった。地表はあっという間に遠ざかっていく。

　雲を抜け上空一万メートルに達すると、機を水平飛行に移行して自動操縦に切り替えた。

　澄み切った青空が広がり、雲は足元の遙か下だった。これからも飛行機に乗ることはあるだろうが機長席でこの光景を見るのは、もう最後かもしれない。わたしは感慨にふけりながらもチラリと計器を監視した。

　わたしは、誰もいない客室に向け、機内アナウンスを行った。
「当機は、十六時発・大日本航空機００１便。アメリカ・モハベ空港行きです。機長は山田、副操縦士は西島で、安全運行で現地へ飛行します。到着は現地時間八時の予定です」
　西島君は、何を酔狂なことをしているのだと、変なものを見る目でわたしにチラリと視線を投げかけた。

　こうしている合間にも燃料は着々と消費されていく。

　しかし、その量はわたしの現役時代のものより少し多かった。燃料ポンプの圧力は少し高い。わたしは、コンピュータのセッティングを変更した。どこかおかしい。

「おかしくても当たり前ですよ。この機はモハベ空港に隣接した砂漠の中で、廃棄されるのでしょう。禄に整備もなされていません。エンジンから火を噴こうが、部品が落下しようが、とにかく現地まで飛べばそれでいいんだと、マネージャーは言っていましたよ」
　西島君がそんなことを言った。
「おいおい。でも、このままだと我々も太平洋を越せないかも知れないんだぞ」
「冗談でしょう。この機の安全性はピカイチです。日本では定期的に分解整備がなされていますが、発展途上国で運用されている機は、整備なんかされていないと聞いています。それでいて、運行開始から今まで、.....まあ、大きな事故もありましたが、それでも、

それなりに安全運行がなされてきたんです。実績を信じましょうよ」

　と、彼が言った途端、エンジンの異常を示すアラームが鳴り始めた。
「おいおい。早速だよ。潤滑油ポンプの圧力が低下している。下手をしたら焼き付くぞ。……二番エンジン停止させよう」
「了解。……停止。でも、これで、燃費はちょっとだけよくなる気がしますね」
「冗談だろう。速度が落ちれば、それだけ滞空時間が長くなる。本当に大丈夫なのか？
コンピュータと計器をチェック。他に異常がないか確認してくれ」
「了解。自己確認プログラム作動させます。……他のエンジンには異常は見られません」

　わたしの乗った機は、そのまま三基のエンジンで飛び続けた。
　そして、アメリカ大陸が見えてくる。ロサンゼルスの北、砂漠地帯にある空港だった。

　空から見ると、古い飛行機が整然と並べられ、解体や部品取り、または、長期保管のために砂漠の中に駐機されていた。まさに、飛行機の墓場だった。

　空港に近づくと、管制塔から着陸許可の無線が入った。
　定年まで一ヶ月。最後のフライトだった。
　わたしは、感慨にむせびながら、慎重に操縦桿を操作し、滑走路へ機首を向け、そして、着陸させた。惰性で進み、滑走路の半ばで停止し誘導路の先の広くなっている箇所へ移動させる。

「フライトお疲れ様です」
　と管制塔から無線が入った。わたしは、計器と操縦桿を指先で軽くなぞった。西島君はそんなわたしを静かに見守っていた。了

職業選択の自由と石像職人

石像を彫る仕事。ノミとハンマーで大理石を削り形を作り出していく。
この仕事につくまでには長い経緯があった。

１９９３年の夏。この年の就職戦線は厳しかった。

求人倍率は政府の指導もあってか、けっして悪いものではなかった。しかし、その内容は我々一般学生にとっては厳しかった。成績のよい学生には一人に十社から求人があるのに対し、成績の悪い学生には一社も来なかった。確かに平均すれば求人倍率は一・〇をわずかに上回っていたが、わたしにはその恩恵は回ってこなかった。

いろんな会社を受けても受けても面接にすらたどり着けない。
不採用が二百社を越えたとき、わたしはふと社会が悪いのではないかという一つの結論に達した。

憲法二十二条では居住の自由と共に、職業選択の自由が基本的人権として保障されているが、今となっては空虚な文言にしか思えなくなっていた。戦後、変な教育に毒された「自由主義」の信奉者にだけ通じる変な権利の章典でしかないと達観したのだ。

そして.....わたしは海を越え大陸の中央付近にある、とある共和国に移住した。
労働者の天国。それが謳い文句だった。

この国では職業選択の自由はなかった。が、その代わり政府により仕事が与えられ、厳しいノルマが地方委員から科せられてはいたが、それさえクリアしておけば後は文句を言われることはなかった。怠け者に取っては住みづらい国だっただろうが、職を求めて[[rb: 彷徨>さまよ]] うことを考えれば、ここは天国だった。

わたしは移民局に行って移住・帰化申請して受理されるのを待った。西側からの移住者は少なく役所もモデルケースにしたいらしく何とか認められたみたいだった。わたしは許可証が出るや否やすぐに労働局に行き職をあてがってもらった。

「ふむ.....君は大学を出ているね。因みにこれまでの職歴は？」
役人は分厚い眼鏡越しにこちらを [[rb: 睨>ね]] めつけた。
「はい。学生時代にアルバイトを少ししたくらいです」
「アルバイト？　何だねそれは？」

この国には学生アルバイトの概念はないようだった。わたしは説明をつけ加えた。
「すみません。正式な職に就いたことはないんです。大学では応用化学を専攻していました」
「ほう。なるほどね」
よくわかったような、わからないような顔で役人は書類に判子をポンとついて、手近にあったキングファイルを取り出した。

「現在空きがあるのは、彫刻職人と、パン職人、農業作業員と.....」

役人はいくつかの職を紹介してくれた。ただ、どれも、わたしの大学の専攻を生かせそうなものはなかった。興味がありそうな職種で選ぶと、美術が好きなので彫刻職人など面白そうに思えた。わたしはそう返事した。
役人はキングファイルから用紙を取り出した。
「やってみるかね？」
「はい。ぜひとも。全力を尽くします」

わたしはこれまで受けてきた企業面接と同じような感覚で前向きな態度を表すように、大きな声で返事した。そして、その場で書類を作成してもらい、この国にある国立美術工房というところに配属が決まった。

工房に着くと責任者が迎えてくれた。貧相な体格の顔色の悪い男だった。

「君が今回配属になった人？」
「はい。日本から来ました。この国に将来を捧げるべく帰化した所であります」
「そう.....それはまた」
男は何か言いかけて止めた。
「わたしは彫刻職人になると聞いたのですが、研修とかあるんですか？」
「はあ？　まず、職人と言ってはいかん。彫刻家といいたまえ。それから、先輩彫刻家

には先生と尊称をつけること。研修はない。元々父子相伝で教え込むのが正統なやり方なのだ。君の場合はわたしが技を伝授する」

どうやら、政府の職人扱いが芸術家気取りのこの人達の気には召さないらしかった。わたしは、郷に入りては郷に従えと、早速その場から男のことを先生と呼んだ。彼は満足そうにわたしを工房の中に案内した。

しばらく工房のある街で生活するうちにこちらの国での仕組みが理解できてきた。

この国では職業選択の自由がなく、基本的にみな親の職業を世襲で継ぐようになっているのだが、それが出来ない人は労働局へ行き新しい職業を紹介してもらわなければならない。かといって文句のある人もいるだろうが、ほとんどは失業の恐れもなく安穏とした生活に満足しているようで、生産効率の悪いところもあるが、それなりに機能していた。

就職難に失業問題。資本主義社会が抱える問題がこの国には一切存在しないのだ。わたしにはにわかには信じがたかったし、それなら、日本人は今まで何をそんなに苦労して問題を背負い込んでいたのだろうと、哀れみの心さえ湧き上がる始末だった。

そして、一週間ほど経った頃、わたしに友人が出来た。

工房に大理石を納める業者の徒弟でカカロフという男だった。よく酒を飲み、冗談を言って人を笑わせるのがうまかった。いい男ですぐに仲良くなったと言う次第だ。

「カコガワくん。君はどうしてこんな国に来たんだい。聞けば自由主義の国からわざわざやって来たということらしいじゃないか」
「君が思うほど、自由はいいことじゃないさ。基本的人権なんてくそくらえだ」
「ほう？」
彼は驚いた顔になった。「自由」という概念を、本当に「自由」なのだと誤解しているうちのひとりだった。「自由」という名の物で本当に「自由」なことなど何ひとつとしてないのが現実だ。しかし、社会主義国家にいるといつの間にかそんな幻想を抱いてしまう。多分、亡命でもして自由主義の国へいき現実に直面するまで理解はできないだろう。

わたしはビールのカップを飲み干した。でも、自由にお代わりは出来なかった。代金は払わなければらないのだが、実質配給制で、一日当たりの消費量が、大人の男で中ジョッキで二杯までと決められていたのだ。まあ、それくらいなら健康にもいいしとわたしは簡単に受け入れた。

「しかしだよ。カコガワくん。麦の収穫高が減収になるとこの配給量も変わってしまうんだぜ。自由主義なら金さえ出せば、いくらでも飲めるんだろう？」

――金さえ出せば。

わたしの頭の中に、日本での思い出がよみがえってきた。確かに金さえ出せば何でも手に入った。金を出して消費を楽しむと言うことは、その裏で、飢餓に苦しむ世界があることに目をつぶるということだった。そして、金がなければ何も手に入らないという逆説もまた然りだった。

ああ、わたしは今まで何という罪深いことをしてきたのだろう？

次の日、先生はわたしに小さな彫像を任せてくれた。ノミとハンマーを持ち、大理石に打ち付けて形を作っていく。こつこつと動物の彫像を一日掛けて作り上げた。

今、工房全体の作業としては、大統領の立像を製作中である。
国家創立七十周年の記念日に除幕式が行われる予定で、複数のベテラン彫刻家の手により製作が進んでいた。
わたしはまだそこに入ることを許されていなかった。

ベテラン彫刻家.....その言葉にわたしはこの国を代表する偉大な芸術家のイメージを膨らませていた。どんな偉大な立像になるのだろう。もしかしたら、大統領本人より、生き生きとし、まるで生きた大理石と呼ばれるほどに完成度の高いものになるのに違いない。そう夢の中にまで出てきた。

誰もいないときにわたしはこっそりとその製作現場に忍び込んだ。除幕式まで待てなかったのだ。わたしの頭の中で、立像はミケランジェロもどこへやらの立派なイメージにできあがっていた。ところが案に相違して、その出来映えはひどかった。まるで幼稚園児がいたずらで作った粘土細工の方がましだった。これってひょっとして世界最新の前衛芸術なのだろうか。誰かこの訳を説明して欲しいと、わたしはわらにもすがる思い

だった。

　このままでは大統領の尊厳をそこなってしまう。そうなれば、工房長の責任も問われるだろうし、怒った大統領はこの工房を閉鎖し、彫刻職人全員を処刑してしまうかも知れない。流石にそこまでしなくても責任を取り解雇するくらいの処置はあるだろう。

　わたしは、また再び失業の心配をし始めた。この国には建前上失業者はいないから、失業保険などない。また、労働局の役人の前に立たねばならないのだろうか。

　――また、君かね？　勤まらなかったそうだな。次は何にする？　パン職人か？　それとも清掃人かね？　石炭運搬でも何でもあるよ。

　嫌みたらしく、そういう風に聞いてくるあの役人の顔を思い浮かべた。

　わたしは不安を抱えたまま、自分に任された小さな動物の彫像を彫り続けた。聞けば大統領の立像の足元にポイントとして置かれるそうだった。それを聞き、わたしはもう駄目だと思った。確実に責任をかぶせられる。連座制があるかどうか知らなかったが、確実に責任を取らされると信じていた。

　除幕式の日、わたしは銃殺を覚悟した。
　大統領はにこにこしながら、みんなの前を歩き、彫刻家の努力をねぎらった。

「うん、うん、よく出来ているよ。よくやってくれた」

　わたしは我が目と耳を疑った。大統領は彫刻家の不手際を少しも責めなかった。

　後で、工房長から聞いたところでは、世襲制の工房では大した作品は作れないことは大統領が一番よく知っているのだということだった。それに何より、大統領自身が世襲の三代目だということだった。わたしは何となく事情を理解した。彫刻の出来映えを否定することは自らの世襲制の正当性を否定することになるであろうことを。

　住めば都。
　とは、よく言ったものだと思った。
　その一件以来、わたしは勤勉に彫刻家としての毎日を続けた。大理石を砕いて粉末に

する。くだけて言えばそんな感じだった。粉末を吹き飛ばした後に残る物が作品だ。でも、ちゃんとした仕事と見なされ給料が支払われた。そんな毎日にわたしは満足していた。日本円や米ドルと比べれば極めて安い賃金だったが、何せ物価が安い上にほとんどの物資が配給品だったので生活には困らなかった。

そして、工房長の紹介で見合いをして結婚し家庭も持てた。

たまに外国のニュースが街頭の白黒テレビで報じられた。

不景気と戦争。財政破綻。そんなことが自由主義の国では起こっていた。

この国での小さな幸福。

どちらがいいかは、考えるまでもなかった。

そして六年おきに選挙があった。

立候補者は現職大統領と、当選しそうにない泡沫候補だけ。

わたしは何の迷いもなく現職大統領に投票した。この生活が永遠に続くようにと。了

富士登山

七月に入ったばかりの第一土曜日の朝早く。
六時半にわたしは同僚の山仲間である橘冴子《たちばなさえこ》と新宿駅西口にある高速バスターミナルで待ち合わせていた。

行き先は富士山の登山口に当たる「富士山五合目バス停」だ。
本来なら地道に麓の一合目から徒歩で上がるのが正しいのだろうが、それは今では一部の修験者のみのルートになっているそうだ。一般の登山客は「吉田口」と呼ばれる登山道を五合目から登るのがポピュラーになっている。

わたしは、学生時代、陸上長距離で少しは頑張っていたせいもあり、体力には自信があったものの、登山に関してはまるっきり素人であった。そんなわたしが何故《なにゆえ》、富士山に登ろうと思い立ったのかというと、密かに憧れていた橘に誘われたからという不純な動機以外に思い当たらない。

彼女は高校時代にワンダー・フォーゲル部であちこちの山々を制覇し、大学時代は本格的な山岳部に所属していて相当な登山上級者であった。彼女に誘われるままに、あちこちの手近な山を一緒に登るうち、わたしのことを登山経験者だと誤解したらしく、今回の山開き（ 七月一日だ ）に合わせて、七月最初のホリデーを富士登山に当てたという次第だった。

手近な山々を巡るうちは、体力だけには自信があったわたしにも、取り立てて問題はなく、ただ、彼女の口にする登山用語にときどきついていけない時があったくらいのものであった。ただ、わたしにとり本格的な登山と呼べるものは正に今回が最初であった。
まあ、学生時代、長距離ランナーとして鳴らした経験から、体力に問題はないし、富士山が日本最高峰の山とはいえ、初心者でも登れるというガイドブックの謳い文句を素直に信じていた。

しばらくして、橘がやって来た。
「おはよう。山田くん。流石に七月となると六時台でももう明るいわね」
と、清潔感のある爽やかな笑顔で言った。
「そうだね。……でも富士山に登るにしては随分と軽装だね」

わたしは、橘の軽そうなリュックを見てそう言った。これまで、近郊の山に登るときでさえ結構な重装備をしていたのだ。それに比べるとまるでハイキングである。
「富士山って山小屋があちこちにあるし、必要なものは現地調達出来るから、そんなに構えなくていいわよ。必要なのは経験と体力だけよ」
「そんなものなのかい？」
「速い人だと四時間半くらいで登れるわ。自信ある？」
「さあ、どうだか」

わたしは謙遜しておいた。三千メートル級の山に日帰り登山並みのスピードなら、確かに重装備では辛いだろう。橘の勝ち誇った笑みに何だか嫌な予感がしてきた。

そして六時四十分新宿発のバスに乗り込む。約二時間半の旅だ。

バスは結構混んでいた。富士山が世界遺産登録されたばかりで、しかも山開きすぐの週末とくれば、にわか登山客が増えても何の不思議もないだろう。わたしは、橘と隣り合わせに座り、吉田口までの二時間半をつぶすことにした。

都内を走るうちはよかったのだが、高速に乗り、中央道に入る頃には、同じ様な防音壁ばかりの景色を眺めるのにも飽きてきて、わたしは荷物の中からコンビニエンスストアで買っておいた缶ビールを取り出し、プルタブを引き、プシュッという音と共に湧き上がってくる泡を口で吸い取った。
「あら、あきれた。もう飲んでるの？　富士山五合目まで二時間もないわよ。アルコール抜けるの？」
「一本くらいいいだろう。それに、今回は俺はハンドルを握る予定はないんだし」

しかし、その一口が災いに転じたのを実感したのは、目的地に到着するのを待つまでもなかった。山梨県内に入り、富士スバルラインを淡々とバスが上っていくのに合わせ、わたしの酔いが予想以上に回ってきたのだ。一体何としたことだろう？　たかが、ビール一缶だ。いつもだったら、口を湿らす程度に過ぎない量だった。なのに、頭がくらくらし、酩酊状態になったのを実感した。

わたしは、左手首につけていたプロトレックの気圧計を読んだ。

七九〇ヘクトパスカルを示していた。結構な低気圧状態だ。飛行機の中ではアルコールがよく回ると言われるが、あれと同じ状況だった。標高は約二三〇〇メートル。登山口にしては高すぎた。今まで登ったどの山より高い位置にあった。

九時五分過ぎ。バスはほぼ定刻通り富士山五合目に到着した。

橘はうきうきした様子で、網棚の自分のリュックを下ろしていた。それに引き替え、わたしは、というと、幾分酔いは覚めたものの、乗り物酔いなのか、アルコールによるものなのかさえ定かではなく、気分は最悪であった。バスを降りて、高山病になるのを防ぐため、おおよそ一時間、辺りを散策し、体調を気圧に慣らすことにした。

「五合目で、二三〇五メートルもあるのね。昔の人は一合目から登ったんだから大した違いだわ。ねえ？」
「そ、そうだね。おかげで、早速、高山病みたいだ。頭がくらくらする」
「ちょ、ちょっと、大丈夫？　だからビールなんか飲むから」

ビールだけではなかった。実際にこれまで登った山は全部千メートル以下のものばかりで、これほどの高所にまで到達したのは初めての経験だった。山岳部で高峰を縦走した経験のある橘とは雲泥の差があった。橘はわたしのことを、まだ、学生時代陸上部で鳴らしたスポーツマンだと思いこんでいる。あいにく、山は初心者なのだ。

とりあえず、橘はわたしを介抱して売店の二階にある食堂まで案内してくれた。ここで、一服し、経過を見ることにした。

他にも客はいた。皆、この二三〇〇メートルの高度に身体を慣らすために、一時間ほど時間をつぶす様子だった。

わたしが、すっかりしょげている間、橘は今のうちにエネルギー補給、と、言わんばかりにラーメンを食べていた。そうだ、これから、エネルギーを消費するんだ。わたしも何か食べておかなくてはと思い、食欲のない時に食べられるカレーを食べようと、財布をリュックの中から取り出し、券売機の所に歩いて行った。すでに標高が高いだけあり、カレーも高かった。しかし、この際、文句は言っていられない。ここで食事を摂っておかなければ、次のチャンスは山小屋にたどり着くまでないのだ。

美味しそうなカレーだったが、食欲は少しも湧かなかった。頭はくらくらし、頭痛もしてきた。本格的に高山病だった。
「どうする？　中止にする？」
橘はカレーを前に、食べるのを躊躇しているわたしに問いかけた。彼女にとっては久々の本格的登山であり、折角の休日をこうしてここまで来ているのだ。わたしの体調不良のためだけに計画を頓挫させるのに忍びなかった。

「ううむ.....」
なおも考え込むわたしに橘は提案した。
「ね、ガイドブックによると乗馬で七合目まで行けるみたいよ。乗って行く？」
「馬で？」
確かに魅力的な提案であった。乗馬で七合目まで登るのならば、しばらく、休むことが出来そうだし、その時間で高度に身体を慣らすことも出来そうな気がした。

「橘さんはどうするんだい？」
「え、あたし？　あたしは歩いて登るわよ。体調もばっちりだし」
「それでは、男が廃るというものだよ。俺も歩いて登る」
「無理すると、登っても降りられなくなるわよ。そうなると、山岳救助隊のヘリコプターに乗る羽目になるわよ」
「ううむ.....」
なおも決心がつかないわたしに、橘は別の提案を持ちかけた。
「登山は諦めてハイキングに切り替えましょう。ここから、御庭《おにわ》へ出て、御中道《おなかみち》へ進んでいくと大沢崩れの直下に出るわ。そこまでだと、距離の割に高低差がないからハイキングにちょうどいいわ」
「申し訳ない」
「いいわよ。あたしだって、今まで他人に迷惑を掛けたことがないかって言われたら、そうとも言い切れないもの。それに、御中道だって富士山を満喫できるわ」
橘は爽やかな笑顔でそう言った。

一時間が経過してある程度二三〇〇メートルの高度に慣れてきたわたしは橘と連れ立って、リュックを背負い、売店を出て、富士山の周遊道路である御中道へと向かった。

「悪かったね」
わたしは素直に謝った。
「ううん。こんなことで、貴重な山仲間を減らしたくないもの」
彼女は率直に本音を述べた。

けれど、ここはここで、楽しめた。
ちょうど森林限界（樹木が生えるギリギリの高度）の小径《こみち》を二人で景色を楽しみながら歩けたのだ。それに、ときどき、沢やガレ場に遭遇し、そういうとき、わたしは彼女の手を取り、エスコートした。彼女の手のひらがやけに柔らかく感じた。

「また、二人で山登りしてもらえるかな？」
わたしは恐る恐る尋ねた。彼女はうふふと笑みをこぼした。
「いいよ.....二人で。でも、低山から慣らして行きましょうね。ずっと登り続けたいから」
橘は素敵な笑顔でそう言った。
「ありがとう。そうするよ」

それからはずっと二人で登り続け、いつしか真剣な交際になっていった。了

タヌキのお札

　わたしは職にあぶれ、川沿いの自転車道の車止めに腰掛け、一日中ずっと川の流れに見入っていた。もう時間に追われることもないし小言をいう人もいなくなった。あるのは、会社員時代に作った借金と、今月分のアパートの家賃や食費をどうするかという切実な問題だけだった。

「あーあ」

　どうして仕事を失ってしまったのだろう。不景気のせいだけではないはずだ。自分の要領の悪さという不手際も責められてしかるべきだった。世の中には、百万人の失業者が出ても、ちゃんと職にありつく要領のいい奴もいるかと思えば、社長の気まぐれで失業する人間もいる。わたしは間違いなく世界で一番要領の悪い人間だった。

　ふと、川岸近くを見ていると、何か得体の知れないものが浮き沈みしていた。

「何だろう？」
　よくよく見てみると人間のようだった。白い肌に草とゴミがまとわりついて、浮いたり沈んだりしながら流れに沿って移動している。――いけない！　わたしは、上着を脱ぎ、ズボンを脱ぎ、下着だけの格好になるとじゃぶじゃぶと川の流れの中に入っていった。

「おい、大丈夫か？　しっかりしろ！」
　わたしは彼の水草まみれの胴体に腕を回し、反対の手で水をかき分けながら堤の上に戻ってきた。

「あ！」
　よくよく見てみると、それは人間ではなく信楽焼のタヌキの置物だった。わたしの心の中に怒りの炎が湧き上がった。高さは四十センチほどのタヌキで、泥と水草が絡み、薄汚れていた。わたしはそれを持ち上げ、石畳にたたきつけようとした。

　と、そのときであった。

「た、助けて.....」
「え？」
　タヌキが口をきいたのである。
　あるいは化かされていたのかも知れない。だが、わたしの怒りはどこかへ吹き飛び、代わりに恐れに似た気持ちが脳裏を占めた。

「本当にタヌキなのか？」
「はい、助けていただいて感謝しています。お礼にといっては何ですが、出来る範囲のことでお役に立てるかと」

　わたしは、取り敢えず今月必要な二十五万円が何とかならないか相談してみることにした。みみっちい相談だと思われるかも知れないが、貧すれば鈍するという奴である。そのときのわたしにはそれ以上のタヌキの有効利用の方法が思い浮かばなかったのだ。

「人を化かすのがわたしの本分です。何とかしてみましょう」
　タヌキは自信たっぷりにそう言ってのけた。「まずは木の葉を二十五枚集めてきてください。大きさは何とでもなります」
「よ、よし」
　嫌な予感がしながらも、わたしは、河川敷に生えている灌木から木の葉をちぎってタヌキのもとへと持っていった。彼は手で十字を切り、えいっと気合いを込めると、目の前に散り散りになっていた木の葉が、銀行から下ろしたばかりの手の切れそうな新札二十五枚に変わった。え？　　と、わたしは喜び、そして、驚いた。

　この技がある限りわたしはこの世で無敵の存在になれるではないか。わたしはタヌキのお腹を愛おしそうな目で見つめた。

　二十五万円さえあれば、当面恐れるものは何もない。わたしは服を着ると、今の今まで逃げ回っていた借金取りと、アパートの大家のところへ行く気になった。

「旦那様」
　タヌキはわたしのことをそう呼んだ。「木の葉のお札が通用するのは人間だけです。ＡＴＭや自動販売機には使えないので注意してください」

「お、おう。……大したことないんだな」
　そう強がっていたが、重要なことだった。お金を払うには面と向かって支払う必要があるということだ。

　そしてまずは二十万円の借金があるニコニコローンに出向いて行った。
　アパートの家賃や生活費の補填に当てるために出来た借金だった。低所得ではもはや返せない借金だったが、タヌキ札のおかげで一括返済のめどが立った。

「いやあ、わざわざお持ちにならなくても、振り込みでもよかったのに」
　ニコニコローンの窓口の女性はそう言って愛想笑いを浮かべた。そうはいかないのだ。目の前で勘定して早く金庫に入れてくれ。わたしはひたすらそれを願った。

　ホッとする思いでニコニコローンを後にし、今度はアパートの大家さんに行った。こちらも現金でおそるおそる支払った。
　大家のおじいさんは、胡散臭そうな目でわたしとお札とを見比べた。わたしの風体と新札という取り合わせが違和感ありありだったのかも知れない。指先をぺろりとなめ、四万五千円丁度そろっているのを確かめると、通い帳にはんこをぽんとついた。わたしは心底ホッとした。

　そうして気に掛かる支払いを済ませてしまうと、急に気が大きくなり欲が出て、このタヌキを使って金儲けが出来ないかと考えた。

「タヌキさんよ。何かこう儲かる仕組みはないのかね？」
　タヌキはちょこんと小首をかしげた。
「わたしの前の旦那様は不動産や高級外車を現金でお買い求めになっていましたね。それを半額くらいで売ってしまうんです。もったいない気がしますが利益率百パーセントの取引ですから誰も損はしません」
「おいおい、タヌキ札を受け取ったら困るじゃないのか？」
「古くなったお札は最終的には、日本銀行へ行き着いて裁断処分されるんです。そのときになって木の葉が混入しているのに気付いても誰も困りません」
「そうか、そんなものか」

　彼のアドバイスに従い、わたしも不動産や高級外車、宝飾品に手を出すことにした。とりあえず、今住んでいるアパートを引き払い、大金持ちにふさわしい住居を買い求めるために芦屋の六麓荘で一戸建を探した。

怪しまれるといけないので、日本語が不自由な振りをすると向こうが勝手に金満家の外国人が不動産を買い漁っているものと勘違いしてくれた。

家を一件買うと後は楽だった。
芦屋に住んでいる金満家の外国人。そんな肩書きで外車を乗り回し、それに飽きると、転売して儲けを出すことに専念した。
その間、タヌキは庭のクヌギの葉からせっせとタヌキ札を増刷してくれた。何せわたしは、彼に取り生命の恩人である。わたしは彼をこき使うことに何ら良心の呵責は起こらなかった。

いや、むしろ、住宅や高級外車を購入した売り主に同情を禁じ得なかったと言っていいだろう。もし、銀行のＡＴＭなんかに入れようものなら、木の葉であることがばれてしまう。偽札以上に始末に負えない代物だった。偽札なら警察が何とかしてくれるだろうが、木の葉では.....ひらひらひら。舞い散る木の葉の前で茫然自失となる売り主の顔が目に浮かんだ。
だが、実際、芦屋の豪邸の取引価格ともなるとＡＴＭを使う人はいないらしく、ほとんどは銀行員が取りに来たり、もしくは持っていったりして、目の前で扇子のように広げて手で勘定してくれる。人間の行員には、タヌキ札は有効であった。

わたしはすっかり芦屋での裕福な生活に慣れ、元のすってんてんな時代の自分の姿を忘れ去っていた。掃除や炊事は家政婦さんがやってくれるし、クルマの運転は運転手さんがやってくれる。電球が切れたり、ヒューズが飛んだりしても自分で一々取り替える必要などなかった。唯一管理しなければならないのが、庭の信楽焼のタヌキの世話だった。
苔が付かないよう、朝起きるときれいに拭いてやり、時折、木の葉を集めてきて誰も見ていないところで、それを「現金化」する。実際、見られたらどんな言い訳が必要だっただろう。わたしにはもはや想像も付かなかった。

ある日、わたしの朝食を作ってくれている家政婦さんが、「近頃食料品もそうなんですけれど物価が何もかも上がりましたね」と言った。わたしは、タヌキ以外のことでは世間に無頓着だったので気がつかなかったが、新聞を改めて読むと、確かに消費者物価指数は上昇していた。

原因は明らかだった。
タヌキ札が大量に出回ったせいで、お札そのものの価値ががた落ちし、反比例するように物価が上昇していったのだ。これはこれでまずいことだった。

「日銀が金融緩和する十年も前からタヌキの金融緩和が始まっていたのですよ」
　タヌキは得意そうに言った。

　わたしはずっと「自分がこのタヌキを利用している」と思い込んでいたのが、実際には自分がこのタヌキに使われていたことを悟った。このタヌキは日本経済を支配下に置くために裏で画策していたのだ。わたしは我が身の不明を恥じた。

　そして、その夜。
　わたしはタヌキを川に捨てに行った。二度と人間に見つからないように重りをつけて。了

久しぶり　ー　タイムトラベル　ー

　わたしがカプセルの中で目覚めたとき、周りには何人もの白衣を着た医師たちに取り囲まれていた。意識が混濁する中、彼らはわたしに呼びかけ、そして、質問を浴びせかけた。
「今日は何日かわかりますか？」
「あなたのお名前は？」
「ここがどこだかわかりますか？」
　彼らの質問には、即座に答えられなかった。

　わたしは実験物理学者の横山教授の作り出した巨大な電子加速器であるサイクロトロンの実験助手をしていた。粒子を光速間際にまで加速させ、反対側から飛んできた同じ粒子に衝突させて小型のブラックホールを発生させる。
　これを応用したタイムマシンで数年前の過去の世界へと移動したのだった。実験が成功していればである。

　これまでにも教授は素粒子を時間の異なる空間に移動させる実験を何度も成功させていた。このことで国際的な賞を何度も取った実績があった。もっとも、人体であるわたしを過去の世界に「飛ばした」のは初めてのことだった。この実験が成功したことを知る唯一の方法は、わたしがこの数年を生き残り、実験直前の教授の前に姿を見せて、その存在を認識させることが必要だった。もしかしたら、このカプセルにもう一度入り、ブラックホールを生成してもらえれば、また、数年の未来の世界――本来の現在の世界に戻ることも可能かと想像したが、過去の世界ではまだ地上にブラックホールを作れるほど科学は進歩していない模様だった。

　この世界は一体西暦何年なのか、わたしにもすぐにはわからなかった。
　医師たちに取り囲まれているときに、背後にカレンダーがかかっているのに気づいた。
　１９８８年１０月のものになっていた。わたしが「飛ばされた」とき、２０２５年だったからざっと３７年前になる。

「もしかしたら、バブル景気の時代ですか？」
　わたしは医師の一人に尋ねた。
「バブル？　景気？　一体何のことだい？」
　彼はキョトンとした顔になった。無理もない。バブルは、それがはじけて初めてバブルだったことになるのだ。実際にはその真っ最中にバブルと名付けられてはいたが、まだ一般的な言葉ではないはずだった。流行語大賞・銀賞を取ったのも１９９０年のことだ。
　ただ、その瞬間に生きている人にとっては「随分と景気がいいなあ、学生の就職率は好調だぞ」などと実感があるだけで、実際、バブル景気の最高期だとは夢にも思うまい。
　わたしは、昭和から平成に変わる時期。そうした景気のものすごく上向いた時期があることを彼らに告げた。
「あはは。何を言っているんだい？　陛下が亡くなるはずはないじゃないか。確かに体調はすぐれないご様子だけど、それは失礼極まりないことだよ。それに、平成？　平成ってなんだい？　あなた.....カプセルの中で酸欠になったのではないか。ちょっと検査してみましょう。何、すぐに終わるから」
　検査は、昭和末期のものだった。まだブラウン管式の表示画面を持った機器と、古めかしい計器板のついたＣＴスキャン。そんなものに入れられて、わたしの脳と身体は「検査」された。
「一応、異常はないみたいだねえ。今日は、一日入院して安静にしておいてね」
　医師はそんなことを言い、わたしを大部屋に移し、医局へ戻って行った。
　大部屋は六人部屋だった。これは平成十五年頃までこんな感じだったのだろう。鉄製パイプのついたリクライニングのないベッドとお金を入れる方式のブラウン管テレビ、そして、酸素のプラグとナースコールのボタンがついていた。

　向かいのベッドの男が声をかけてきた。
「あんた、どこが悪いんだい？」
「頭がおかしいと思われているみたいです。身体に異常はないみたいです」
「あはは、そっち系だったの？　何か変なことを言う患者が入ったって、婦長さんが言っていたよ。あんただったのかい？」
　彼は、腕にゴールドのロレックスをはめていた。脇の棚に外国たばことカルティエのライターが置いてあった。昔はどこでもたばこが吸えたと先輩に聞いたことがあった。
「景気よさそうですね？」
「ああ？　ああ、この時計かい？　結婚記念日に買ってもらったんだ。いいよ、ロレックスは。丈夫で壊れないし、正確だし」
「いや、わたしには高すぎます」
「へえ。あんた何する人？」
「大学の研究室でポスドクです」
「何だい？　それは？」
「博士号を取った後、大学で有期契約で採用される研究者のことです」
「ふうん。聞いたこともないなあ」

この世界ではわたしの言うことはことごとく通らなかった。

「ふうん。平成の世ねえ。……どんな時代なの？」
隣のベッドの男が尋ねて来た。多分、よっぽど入院生活が暇だったのだろう。こんな与太話にでも食いついてくるのだ。もう、一日が四十八時間に感じられるくらい長くなっていたのかも知れない。
「とにかく、災害が多いんです。火山が噴火したり、阪神・淡路大震災が起こったり、東日本大震災が起こったり……」
「嘘だよ。それは。関西で大地震なんて起こるわけないじゃないか。よっぽどおかしいよ。この人の言うことは。笑い話にもならねえ」
一言で切り捨てられた。

気づけば、六人部屋のわたしを除く五人が腹を抱えて笑っていた。しかも、わたしを指さしていた。この分だと、平成の世の次に令和が来ることも信じられないだろう。
でも、そんなことはどうでもよかった。このままでは、わたしは完全に認知症の老人のような扱いを受け続ける。早く退院して、元の時代に戻るには、普通の人のように振る舞わなければならなかった。

そして、三ヶ月。
昭和天皇が崩御して、わたしの「予言」のひとつは当たった。改元されて「平成」の世になり、小渕恵三官房長官がその額を持ち、記者会見する様子がテレビで何度も流され、「平成おじさん」のあだ名がつけられた。

「もしかしたら、あんた本物なのかい？」
隣のベッドの男は尋ねた。
「ですから、何度も言っているでしょう？　本物です」
「じゃあさ。何か儲ける方法はないかい？　この先十年か、二十年で」
「ふうむ。そうですねえ。アメリカのアップル社とマイクロソフト社の株を買っておいたら値上がりすると思いますよ」
「ええ！　ただのパソコンとソフトの会社だろう？」
男は、わたしを笑った。まだ、パソコンもＯＳも一部マニアの趣味の世界のものだった。

そして１９８９年末になり最高潮だった株価が下向きに転じた。
バブルは絶頂期を過ぎたのだ。しかし、まだ不動産投機の嵐は続いていた。
それも９１年から土地が下落を始め、９３年にかけて本格的なバブル崩壊期を迎えた。

わたしはその間、未来の時代にいた頃の知識と情報で、株の売り買いをして収入を得て、不景気な中を何とかくぐり抜けた。まさに日本経済は暗黒の４０年だった。

２０２５年１０月。
わたしは大学の研究室を訪れた。
教授は少し驚いた顔をしていた。
「え？　君なのか？」
「お久しぶりです。横山先生」
「さっき飛ばしたばかりなのに？」
そう。この時間にさっき過去の時代に飛ばされたばかりだったのだ。そこに突如、年を取ったわたしが姿を現したのだ。
わたしは研究室の壁に掛かっていた鏡を見た。すっかり老け込んでいて、まるで退職前のサラリーマンのような姿になっていた。そして、この３７年間の苦労を語った。

「ふうん。苦労したんだねえ。でも、この研究の成果が証明されたことになるんだ。君の貢献は大きいよ。うん。うん」
教授は何度もうなずき喜んでいた。
「この時代の知識を生かすことで何とか食いつなぐことが出来ました。わたしを本採用の研究者にしてもらえますよね？」
わたしは教授の手をつかんで懇願した。

「それは.....いいけど。でも、どうしてこの研究論文をその昔の世界で発表しなかったんだね？　多分、君が教授になっていたと思うよ。あはは」
と、わたしの苦労を笑い飛ばした。
まさに暗黒の４０年だった。了

起訴と不起訴の狭間

１．混乱

ボルン地方検察庁刑事部に不思議な事件が持ち込まれた。
その件で、わたしは次席検事に呼び出された。
彼は警察から提出された捜査資料を机の上に置いて内容をかいつまんで説明した。

普通の強姦事件と思われた。単純な犯罪といえば語弊があるが、女性本人からの被害届も出されているし、抵抗した際に負ったと思われるケガの診断書があり、そして、女性の体内から容疑者の体液も検出されていた。有罪になる証拠は全てそろっていて、起訴するのに何の問題もないだろう。わたしが相談を受けるような要素はひとつもないと思われた。

「実は.....」
次席検事は言葉を濁した。「容疑者は自分がトランスジェンダーで、同性愛者だと主張しているそうなんだ。これは警察での取り調べでも述べているし、弁護士も同じ事を主張している」
わたしはその意味が即座にはわからなかった。
容疑者の身体は男性。トランスジェンダーだと主張するからには心は女性ということになる。そして同性愛者だからセックスのパートナーは女性となるのだろうか？　しかし、それは容疑者の心の中だけの世界である。実際には容疑者が被害者女性を強姦したという事実が目の前にある。それだけのことだった。

ここ、ノルドシュバイツ共和国では半月ほど前に性的マイノリティの権利と平等を定める法律が成立し施行されたばかりだった。それに乗じての犯行なのだろうか？

「そんな言い訳を通しては駄目ではないですか？　ＬＧＢＴＱ平等法が性犯罪の免罪符みたいになってしまいますよ！　そんなことを許さないためにも今回は厳罰に処するべきです！」
「それもそうなのだがねえ。ことがことだけにこれの対応を厳しくして一罰百戒というのだろうか。こちらもそうしたいのは山々なのだが、ただ.....」

「何です？」
「政府筋から圧力がかかっているんだ。性的マイノリティには最大限の配慮をと」
「では、被害者女性の人権はどうなるのですか？」
「それはそれで問題なのだがねえ。.....ただ、現政権の肝煎りで成立された法律なんだ。それなりの配慮をするように.....つまり、容疑者を心の性である『女性として扱う』ように法務大臣官房から内々にリクエストされているんだ」
「まさか.....指揮権の発動ですか？」

　法務大臣は最高検察庁の検事総長に対して捜査を指揮監督する権限がある。もちろん、各地方検察庁の検事には独立した捜査権が認められてはいる。しかし、回り回って上司か指示が飛ぶのだ。公務員である以上それを無視出来ないと言う内部事情も同時に存在していた。ただ、指揮権の発動はある意味「伝家の宝刀」である。滅多やたらに出るものではなかったし、過去発動された例は極めて少なかった。もう、国の根幹を揺るがすようなよっぽどの事情がある場合に限られていた。今回もそれに当たるのだろうか？
わたしには疑問だった。

「仮にだよ。起訴したとしてどうなるだろうか？」
　次席検事は渋い顔で尋ねた。
「検察としては被害者の人権を守るために全力を尽くすことになります」
「確かにその通りだけどね。しかし、ここ最近の裁判ではＬＧＢＴＱの扱いには極めてセンシティブになっている。実際、彼ら、彼女らに有利な判決が相次いでいるしね。もし、起訴して無罪判決がおりてしまったらどうなるだろうか？　　君の言うとおり、ＬＧＢＴＱだと主張することが、この手の犯罪者の免罪符になりかねない」

　上司である彼にそう言われ、わたしも天を仰いだ。政府肝煎りの法律。そして、この１ヶ月後に開催されるＧ４０国際会議。我が国だけがＬＧＢＴＱの権利と平等を規定した法律が整備されていないとすれば、大統領の発言力にも影響が出てくる。それで、この法案の成立を急いだのだ。拙速と言う言葉は正にこのことだった。

「この容疑者が本当にトランスジェンダーで同性愛者なのでしょうか。罪を免れるための虚偽の発言である可能性はないのでしょうか？」
「それは憲法で認められた内心の自由だよ。.....表面上の姿は男性でも心が女性だと言われたらそれで終わりだ。確かに精神科医の鑑定は今後の裁判の過程で.....もし起訴したらだけど、明らかになっていくだろうがね」
「では、鑑定留置などは認められますか？」
「いや、時間はかけられない。君はこの手の起訴や公判の経験が多いだろう？」
「やはり政府の意向ですか？」

「はっきりとしたリクエストではないんだ。現在の所。.....しかし、国際会議までに不起訴にしたいらしい。それも彼らからの注文の行間を読んでくれという態度でしかない」

　わたしは少し時間が欲しいと述べて、本件を一旦保留にしてもらった。ただ、容疑者の勾留を最大で二十日間引き延ばすことは可能だったが、Ｇ４０国際会議の日程も考慮に入れると結論は急ぐものであることは明らかだった。

２．知見

　なぜこんな法律を制定する必要があったのか。
　わたしは誰かに文句を言いたかった。ただし、こちらも法律の専門家とはいえ、あくまでも実務家の立場である。法律理論上の問題点はないのか。これも、法律制定後の裁判事例はまだなかった。.....もし、最高裁判例があるのなら？　いや、そうであれば次席検事はわたしに相談などしなかっただろう。判例に従って粛々と処理すればいいだけの話だ。

　わたしはその足で、大学の専門家に会いに出かけた。
　ボルン大学法学部の男女共同参画を専門とする教授だ。
「わたしもこの法律に関しては、ちょっと拙速だった感が否めない」
　と、男性教授はそう言った。
「と、言いますと？」
「政府は世界スタンダードみたいな言い方をしてはいるものの、実際には一部のリベラル派が優勢なヨーロッパの国で制定されているに過ぎない。その理由は彼らの宗教にある。もちろん建前上は、政治と宗教は分離されたものなのだがねえ」
「実際そうではないのでしょうか？」
　この国では市役所の建設工事に宗教儀式を行うだけでも市民から提訴されるほどだ。公権力が宗教行事を行うことについては極めて厳しい目が向けられていた。もっとも、儀式を行わないことで、担当する工事業者は作業における心の安寧が損なわれたと、逆に市を訴える一面もある。どちらが訴えたにせよ、支払う慰謝料は税金から出ることには違いはない。

「でも、アメリカの大統領やイギリスの首相が日曜日に教会に行っても誰も文句はつけないし、聖書を重んじる発言をしても、それはまっとうなことだと思われているのが、世界の常識なのだよ」
「それもそうですね。では、宗教上の理由でこの法律の採用・不採用が決められているというのでしょうか？」
「それが、現在の大勢だと思うよ。ほとんどの宗教では性的マイノリティ、特に同性愛は罪だとみなされている。カトリックもプロテスタントもイスラム教も仏教も。.....君は聖書のソドムとゴモラの街が神によって焼き払われた話は知らないかい？」

「大まかな話は知っています。性的に放埒《ほうらつ》な暮らしをしていたために神の怒りにふれたと？」
「そう。むしろこっちの方が世界スタンダードに近いと言えるだろう」

「では、認められている国では、その問題はないのでしょうか？」
「リベラル派が多数だと宗教的な決まり事より、個人の権利が優先されることもあるからねえ。でも、世界でも１０カ国ほどしかないはずだよ。細かい数字はちょっと記憶にはないが」
「では、我が国がこの法律を急いだことに問題はないのでしょうか？」
「法律の制定自体は問題はないと思う。ただ、実務面で問題を起こす可能性をはらんでいるのは確かだよ。現に君も裁判を担当することになって困っているのだろう？　あはは」
　と、教授は笑った。「これからが大変だよ。この法律の実効性を担保するために民法の婚姻規定や性別変更条項や刑法の強姦罪も変更の必要に迫られるだろう？　憲法はすでに１４条で婚姻の自由を定めているけどね」

「ああ。でもそれは昔の家制度の下で、家長が結婚相手を選んだり認めたりしているのを廃止して、個人の恋愛による結婚を認めるという趣旨だったのですよね？」
「歴史的経緯はその通りだよ。でも、憲法の文字通りに、あるいは、拡大解釈を認めるならば同性カップルもあり得るだろうし、両性が認めれば一夫多妻や一妻多夫もあり得ることになるよ。君はどう思うかね？」

　もう、法律問題を通り越して言葉遊びになっていた。
　聞く相手を間違えた、と、わたしは思った。
　しかし、である。
　本当に憲法解釈から出た法律議論だとすると、裁判官や検察官といった実務家の判断では判決が出せない可能性があった。裁判になれば解釈のために鑑定人が招致されるだろう。このひとみたいな大学教授などの専門家だ。このひとのようなリベラルなひともいれば、反対に保守的なひともいる。こちらは、憲法を厳格に解釈して同性婚は想定されていないという立場で、そもそも、この法律制定には反対の立場だった。
　彼らの間で憲法解釈の討論が行われ、話は平行線をたどるだろう。こんな裁判はかなり長引くだろう。

　教授の論理では、この法律自体に問題はなかった。
　性的マイノリティの法的な平等性を定めたものだからだ。
　実務面になったときに問題は表面化する。その通りだった。

　現在のわたしには、性的マイノリティを理由に犯罪行為の言い逃れをしている「男」を

いかに処分するかが問われていた。法律の正否を問うことではない。

強姦罪は男性が女性に性交を強制する行為を処罰する法律だ。

もし、「男」が女性として、この女性に性行為を行ったとすれば、この犯罪は確かに成立しない。しかし、「男」を男性として扱うならば最初の意見通りに単純な強姦罪となるだろう。

問題は、法律制定後の初の事例として性的マイノリティを保護すべしという政府筋からの無理なリクエストにあった。

３．被害者の声

捜査の最後に被害者女性から聞き取りを行った。取調室に入って来たのは髪を短く切りそろえたボーイッシュな感じの女性だった。わたしは内部事情は述べずに端的に彼女の気持ちを尋ねた。

「実は.....」
と、彼女は口を開いた。「わたしもＬＧＢＴＱ.....なのです」
トランスジェンダーなのだという。「なので.....男性に体を触られるのはすごく嫌だったのです」
「それは.....本当なのですか？」
「はい。現在はホルモン療法を受けていて、将来的には性別適合手術と戸籍の変更を予定しています」
「なるほど」
「実は結婚を予定している女性もいたのです」
彼女はそう言った。そんな女性がわざわざ、あんな悪質な男から性犯罪の標的に選ばれた理由に合点が行かなかった。わたしは質問を続けた。
「加害者男性と面識はあったのですか？」
「会うのは初めてでした。.....でも、実のところ結婚予定だった女性のストーカーだったらしいんです。それで、自分は被害届を出し加害者を罰することを選んだのです」

彼女は警察での取り調べではその辺りは曖昧なことしか言っていなかった。
単純な強姦事件として処理され、プライバシーにかかわる告白をしなくても「男」が罰せられる。そう思っていたのだという。

新たな証言だった。容疑者を起訴すれば.....それなりの刑罰に処せられるだろう。強姦罪が適用されれば５年以上の有期刑となる。そして、初犯だが悪質な言い逃れをしていて、裁判所は情状酌量を認めないだろう。しかし、この犯行が性的欲望が主な動機ではなく、どちらかと言えば好意を抱いていた女性を取られた復讐心によるものだと推定された。わたしは迷った。もしかしたら刑事裁判にかけるより民事事件で提訴して容疑者が支払うのに難渋するほどの慰謝料を請求した方が効果的かも知れない。

　そして何より上司から「起訴しない方が望ましい」という指示を受けていたのだ。しかし、被害者もＬＧＢＴＱだとするなら話は別だった。足枷はなくなった。
「あなた.....本当に加害者を厳罰に処することをお望みですか？」
　わたしは最後に背中を押してもらいたかった。
「もちろんです。自分と彼女のために」

　彼女も、性的行為そのものが問題なのではなく、加害者からパートナーを守るために被害を届け出たということを示唆した。多分、弁護士は不同意性交罪ではなく強要罪・暴行罪の適用にとどまると主張してくるだろう。わたしは受けて立つ気で容疑者を起訴することを決めた。

４．裁判

男を強姦罪で起訴して裁判に持ち込んだことで、ボルン地検は厳しい立場に置かれることとなった。「男」の供述が珍奇で人目をひくものであっただけに、傍聴人の数はひときわ多かった。傍聴人の数が多いとマスコミも注目し、それに比例して裁判官もやる気が違っていた。

当初、懸念していた通り、こちら検察官と相手方弁護人の主張は真っ向から対立していた。ＬＧＢＴＱ平等法によれば「被告人の男」は女性とみなされるので強姦罪は適用出来ないという意見と、「男」の主張は罪を逃れるための虚偽のものだから、男性・女性の関係があり、強姦罪が成立するというこちらの意見が繰り返され、議論と証拠の開示が続けられた。

傍聴人もマスコミも多いので、裁判官もおいそれとは発言は出来ない様だった。
どちらかの肩を持つのも、今のところ難しい。
出来るだけ他人の口を借りて、自説を通したい。
それは、検察官も弁護人も裁判官も同じ様だった。
鑑定人として、大学教授などの専門家や性的マイノリティを支援するＮＰＯ法人の有識者などが裁判所に呼ばれ、意見を述べた。そして、双方の主張はどこまでも平行線をたどった。結論の出ない意見主張。これがこんなに辛いものだとは、わたしも当初は想定すらしていなかった。結論に近づきそうになれば、反対尋問でまた何度も同じ議論を蒸し返される。

今回のドタバタ劇の一番大きな過ちは、ただ憲法の記述のみに依存するだけの法律を拙速に成立させてしまったことに起因していた。この法律が機能するためには、関連する民法や刑法の改正が必要不可欠だったのだ。
実務の段階で混乱に陥るという.....最初に訪ねていった大学教授の言った通りのことになった。
適用すべき法律のバックボーンが脆弱な論理でしか支えられていなかったのだ。
実務家の手に委ねる前に、そうした個別具体的なケースについてもっと議論を深めておくべきだった。

議論は「男」の側に有利な方向に傾きつつあった。
やはり、新しい法律の方が若干にせよ理論的に煮詰められているもの。
古い法律は、適度な解釈を伴わないと、実効性に欠ける面があった。

――もう、駄目なのだろうか？
わたしは悩み始めた。議論が噛み合わないばかりか、徹頭徹尾、平行線をたどったままであったし、有識者の意見もどちらが正しいかではなく、どちらの意見が多いかしか、頼るべき資料はなかった。多分、どちらを勝たせても裁判官は責任を問われなかっただろう。

それに加えて、政府からの圧力がかかり始めた。
大統領が出席したＧ４０国際会議が終了し、結局、問題が解決しないままになっている現状に怒り心頭だったみたいで、とうとう、法務大臣に指揮権の発動を命令したのだった。そして、突如の起訴取り下げと「男」の釈放が決定された。

検察の面子を汚したことで、わたしの身分も危うくなってきた。
次の人事異動では、どこかへ左遷させられるか、あるいは、早期退職を勧告されるかのどちらかに決まっているみたいだった。

しかし、被害者女性が同時に起こしていた民事裁判では、逆に「男」が敗訴した。
懲罰的な処置として莫大な慰謝料が認められ、「男」が一生働いても得られないほどの額の支払い命令がなされていた。こちらの裁判では、刑法とＬＧＢＴＱ平等法との対決ではなく、純粋に相手に負わせた身体的・精神的な苦痛を問うものだったからだ。

被害者の依頼した弁護士は、この点に注力して余計な法律議論には立ち入らずに、うまく論点をかわしていた。そのため判決も加害者がＬＧＢＴＱなのかどうかには触れずに、犯行により被った苦痛のみについて評価したものとなっていた。
この点、われわれ検察は自らの不味《ふまい》さを味わわされた。被害者の代弁者.....でなければならないのに、その第一義を忘れていたのだ。

今回の刑事裁判では検察庁に対する非難はすさまじいものであったが、民事裁判の結果を受けた形で、新たな民法上での性的マイノリティの地位の確立と刑法における強姦罪の定義の見直しが行われるきっかけとなった。了

お菓子の思い出

（１）

お腹がぺこぺこなときほど、食べたいものが手に入らないことがよくある。
わたしは空港の乗り継ぎのときに空港内の店で何か食べるか、買って食べるかと考えていた。何とかなるだろう。そんな考えが日本国内でだけしか通用しないことに気づくのに、そう時間はかからなかった。

最初から計画はほころびを見せていた。
別の形で。
日曜日の午前中に仕事場で残った作業を片付け、それから社員寮に戻り、午後一番の新幹線で成田空港へと移動することになっていた。おとといの金曜日に職場の庶務から、新幹線の指定券と航空便のチケットを受け取っていた。
月曜日の朝十時発の飛行機だったので前日の日曜日のうちに成田空港近くのホテルで一泊してそのままシャトルバスで空港に向かえばいい。

しかし、駅までのバスが渋滞に巻き込まれ、着いたときにはすでに指定券の便は出た後だった。――まずい。次ののぞみの指定券を買い直すか、自由席で東京駅まで我慢するかの選択肢があったが、指定に乗りそびれた時点で買い直しの費用を会社が出してくれるはずもなく、わたしは次ののぞみの自由席に乗り込んだ。

車内で弁当を.....と考えていたが販売員は回ってこなかった。
広島を出て四時間。東京に着いたときすでに日は暮れ、なんだか寂しい気持ちになっていた。それに東京泊まりではない。さらに成田まで移動しなくてはならない。
後で考えれば、多少遅れてでも、ここで夕食をすませるべきだった。夜遅くなればホテルのレストランも閉まってしまうだろうことは想定していたが、近くにコンビニエンスストアくらいはあるだろうと思っていたのだ。
特急で成田空港駅に着き、駅から出るとホテルのシャトルバスが待っていた。そのままホテルに直行だった。近くには何もなかった。

――何か食べたい。

一晩中、と言う訳でもなかったが、出張先での仕事の下調べをしているうちに、そのまま疲れて寝入ってしまった。

朝、起きるとすでに九時前になっていた。わたしは慌てて顔を洗って荷物をまとめてホテルを飛び出した。

空港なら何か食べる所があるだろう。

それに十時の飛行機ならすぐにチェックイン出来るはずだ。

そんな想いも空しく、空港のチェックインカウンターでは遅延のマークが点滅していて、受付も保留状態となっていた。どこか食事の出来る所は.....。カウンターからこっちでは食事をする場所はなかった。向こう側には色々店がありそうだったが、目に見えるのに手に入らない。一種の苦行だった。

（２）

いつになったら飛ぶのか？
カウンターの係員に聞いたが、まだ、東京着の便が来ていないのでいつになるのか明言出来ないと言われ、わたしは途方に暮れた。

お昼を少し過ぎた頃、やっと飛行機が到着してチェックインが開始された。
荷物を預けてやっと向こう側のエリアに入ることが出来た。
久しぶりの食事だった。
早くてお腹が膨れるもの。ハンバーガーを二個とポテトを食べた。少しだけ空腹が満たされた。

飛行機が飛び立つと結構頻繁に機内食が出た。
さっき食べたところなのにというくらいの頻度だった。そして、窓が閉められ現地時間に合わせるかのように睡眠時間となった。

そして中継地点に入った。
ロシアのシェレメチェボ国際空港だった。
ここでもわたしはお腹を空かせていた。変なタイミングでの機内食を満足には食べられず、残しているうちに到着してしまったのだ。もっと詰め込んでおくべきだったと後悔の念に陥った。現地時間は夜中である。空港内の店は開いていなかった。乗り継ぎ客のためのラウンジがあったが、言葉も通じず、結局じっと待っていただけだった。

次の中継地はスペインのマドリッド国際空港。
ここも現地時間は早朝で何も開いていない。
ラウンジでぼうっとしながら時間を潰していると、お腹がぐうっと鳴った。ひもじかった。
ふと横を見ると太ったおばあさんが座ってこっちを見ていたのに気づいた。彼女は笑みをこぼしながら鞄の中から紙包みをとりだした。

「ポルファボール・テン・エスト」（ これをどうぞ ）
　と言いながらそれを差し出した。言葉はわからなかったが、どうやらくれるみたいだった。わたしは鞄のポケットに入れてあった旅行ガイドを素早くめくり、言葉を探した。これかなと思いそれを指で指し示しつつ.....。
「グラシアス」（ ありがとう ）
　と言った。
「デ・ナーダ」（ どういたしまして ）
　と、彼女は言い手をあげた。

　紙包みの中にはベビーカステラみたいな形の生地に砂糖をたっぷりとまぶした感じのお菓子が数個入っていた。それをひとつ手に取り口に入れた。砂糖の甘み、小麦粉の芳醇な香りとバターの風味、玉子の滋養が口の中いっぱいに広がった気がした。
　よほどお腹が減っていたので、こんなに美味しく感じたのだろうか。それとも、本当に美味しかったのか。そのときのわたしには判断がつかなかったのだ。ひもじい想いをしているサラリーマンに神様からいただいたサプライズプレゼントの様な気がした。

（３）

わたしはおばあさんに、美味しいですと言おうとしてまたもや旅行ガイドを繰った。その部分を指で示して言った。
「エス・デリシオッソ」（おいしいです）
「サーベ・ビエン？」（ほんとうに？）
「シー」（はい）
わたしは美味しいと身振り手振りで伝え、涙を流さんばかりの勢いでおばあさんに謝意を伝えた。おばあさんは満足そうに何かいい、次の便に乗るからとそこから立ち去った。わたしの手元にはおばあさんからもらった紙包みと残った三個のお菓子があるばかりだった。

そして、わたしは乗り換え便に乗り込み機上のひととなった。
次の中継地はブラジルのサンパウロだった。ここも夜間だった。わたしは機内食をお腹いっぱいに詰め込んでしばらくの空腹に耐えるすべを学んでいた。

最後のフライトでたどり着いたのはチリのサンチャゴ国際空港だった。
幸いこちらは午前中だった。あちこちの店が開いていて何でも買えそうだった。しかし、通貨を現地のものに交換しなくてはならない。実際には持っていた米ドルでも通用しそうだったが、これから行く予定の地方都市だとどうだかわからない。空港の交換所で両替するとどっさりした紙の束に変わった。貨幣価値が全然ちがうみたいだった。

そして、一旦、仕事を統括していた商社の支店に立ち寄って挨拶して、また戻り、今度は国内線のターミナルへと移動した。飛行機で一時間半。コピアポ空港へと向かった。そこからはクルマで三時間。もう、地の果てに来たみたいな感覚だった。

三ヶ月後。
仕事を終え帰国の途についたとき、あのお菓子のことを思い出した。
わたしの頭の中ではもう美味しいを通り越して天上の美味の域に達していた。あれ以

上美味しいと思うものは、これまでにも食べたことがないし、それ以降も同じくらい美味しいお菓子とは巡り会わなかった。

それに誰に聞いてもそんなお菓子は知らないと言う。

しかし、あれほどの美味しさだった。きっと有名なお店か、名の知れた菓子職人に違いないと思い込んでいた。

帰りの便がマドリッドに着いたとき、乗り継ぎ便までに時間があることと、スペイン語に少し慣れてきたのもあり、マドリッドの街に出かけることにした。

街の中であちこち探し回ったが、大きな菓子店ではそれは見つからなかった。似た様なものは確かにあった。味で言うとカステラやマドレーヌに近かったかも知れない。しかし、あの口いっぱいに広がる滋味と言おうか。それを再現するものには行き着かなかった。

――やっぱり、お腹が空きすぎてひもじい想いをしていたからあんなに美味しく感じただけかも知れない。と、思いはじめていた。空想は頭の中でどんどんと加速して、実際とは別の現実を作り出すことはよくあることだとは、それまでの社会経験からわかってはいた。

しかし、あの美味が空想だけのものだとは信じなくなかった。

（４）

　そして数年後。
　横浜の港近くのお菓子屋さんであの味に再会した。
　スペインともマドリッドとも何の関係もなさそうな場所とお店だった。
　奥の調理場ではあのおばあさんが働いていた。オーナー兼菓子職人と言った感じだろうか。出来たお菓子を並べる様、日本人従業員にテキパキと指示していた。
　わたしは懐かしさいっぱいで、そのおばあさんに声をかけた。

「セニョーラ！」（奥さん！）
　おばあさんは一瞬キョトンとした表情になってわたしの顔をしげしげと見つめ、そしてアッと驚いた顔になった。
「あのときの人ね？」
　と、おばあさんは早口のスペイン語で言った。
「そうです。あのときいただいたお菓子の味が忘れられなくて、色んな街を訪れるたびにお菓子屋巡りをしているんです。あのお菓子はおばあさんが作ったものなのですよね？」
「ああ.....」

　おばあさんは一瞬手を止め、そして水道で手を洗いタオルで拭きながら店の陳列棚のこちらに歩いて来た。そして、懐かしそうな笑みをこぼした。
「実はね.....」
　おばあさんの話では、自分自身もあのお菓子がどこの何というものなのかわからないそうだった。
「でも、美味しかったですよ。おばあさんが作ったのでしょう？」
　わたしは怪訝な口調で尋ねた。
「わたしもね。昔、日本のどこかを旅行したときに、あるお菓子をもらったの。それがすごく美味しくて美味しくて.....。その後、どこで売っているのか作っているのかをずっと探したの。でもわからなかった」
「でもあのお菓子は完璧でしたよ」
「ううん。完璧じゃないの。わたしがもらったのはもっと美味しかった。それで、そのお菓子を思い出しながら、自分でレシピを考えて再現しようとしたのよ。でも、全然違うものだった。あなた知らない？　どこのお菓子か。マドリッドで出会ったのだから商社員か何かでしょう？」

「いや。……もしかしたら。ああ」
「教えて！」
「見た目は沖縄のお菓子のサータアンダギーに似ていると思います。でも味が違います。かなりスペイン風に改良されているのでは？」
「サータアンダギー？　オキナワ？」
「ええ。でも風味は違います。おばあさんのお菓子は砂糖とシナモンの味がして生地もカステラ風でしたよね？」
「ううん。それは何とか味を再現しようと、あれこれレシピを変えたものなのよ。多分それかも知れないわ」
「おばあさんも、やっぱり腹ぺこだったのですか？」
「そうね。……多分そうだったかも知れないわ。日本ではスペイン語があまり通じないしホテルでの食事もいかにも外国人向けみたいだし、あまり食欲がわかなかったの。だからちょっとお腹が空いていたのかも」

「空腹が最大の美味と言う訳ですか？」
「そうかも知れないわね。今度、そのオキナワのお菓子を探して取り寄せてみるわ。でも、あのときのものとは違うと思うの」
「食べたのはいつのことですか？」
「そうね。まだ少女の頃だったわ。父親が商社員だった頃に日本にいたことがあるの。でも日本のどこだったかは記憶にないの。もう六十年も前の話よ」

おばあさんとはその後一時間ほど話をして過ごした。
謎のお菓子。
でも、やっぱり、記憶が薄れるにつけて、頭の中ではどんどん美化されていくのだろう。しかし、おばあさんだけは違っていた。その味を実現しようと自分自身が菓子職人となり、店まで出しているのだ。もう、元のお菓子の味なんてどうでもよかった。わたしはこの店に並んでいたあのときのお菓子を袋いっぱい買って帰った。

電車の中でひとつ口に放り込んだ。
マドリッド空港のラウンジで味わったあの芳醇な香りが広がった。了

１３日の金曜日とふたりの娘

１．

わたしの勤めていた会社が倒産し、急遽、転職先を探しハローワークで紹介された人材派遣会社に籍を置くことになった。しばらくは事務所に常駐しながら、あちこちの企業に面接に行き、派遣先を探すことになる。この間、給与はかなり据え置かれる。派遣させられて初めていくらと言う条件だった。

今の家の住宅ローンは到底払えそうになかった。
そのため、日曜ごとに近くの町にある不動産業者を回り、適当な貸家を探したのだった。

今まで住んでいた家はちょっと大きかった。田舎だからと大きめの土地を買い、建ぺい率ギリギリまで建てたのだ。４０年ローンだったが、会社の業績も当時はよかったし、ボーナス払いの月も生活に余裕があった。

大きな家だっただけに、数年住んでいるうち荷物が増えに増えた。子供の学習机は言うに及ばず、妻の趣味であるピアノも買った。電化製品も物置一杯あり、季節の替わり目に入れ替えるのも大変だった。だから急に引越しとなると簡単にはいかない。同じくらいの大きさの家でなければこれらの荷物を収容しようがなかったのだ。――後から考えると全部捨ててしまい、小さな家かマンションを探すべきだったと思っている。

何軒もの不動屋さんをハシゴして、家賃の高さを思い知らされた。そんなとき、ふと気になって入った古びた不動産屋さんでとある物件を紹介された。
「お宅の言う様な条件に合致するとなると、ここしかありませんや」
彼の指し示す物件の家賃は格段に安かった。以前住んでいた家と同じくらいのスペースがあるのに、月五万でいいと言う。敷金もなしだった。こんな破格の条件だとライバルも多いに違いない。しかし、他に誰も借り手がないみたいだった。

わたしたち家族は不動産屋に連れられて現地を見に行った。
家の周りを取り囲んでいる生け垣は鬱蒼と伸びるに任せたかの様に、かなり大きくなっていた。家本体は日当たりが悪そうに思えた。何だかじとじとしている感じだった。しかし、これは、入居前に植木屋さんが剪定してくれるそうだ。

門扉を開けて中に一歩入ると、足元に黒い猫がいた。わたしたちの侵入を喜んでいない様だった。毛を逆立てて、わたしたちを威嚇した。不動産屋がこれを棒きれで追い払った。
玄関の鍵を開けると、中から、むっとしたよどんだ空気が流れてきた。わたしは思わずむせかえり、ハンカチで口元を覆った。妻と娘を見ると同じ様にしていた。
「ささ、中へどうぞ」
玄関先には、見学者用と思しきスリッパが置かれてあった。わたしは、それに足を通した。
壁はすっかり変色し、所々、壁紙が剥がれて丸まっていた。下地にはカビが生え、黒い点々を作っていた。壁紙は元はホワイトだったのだろうか。全面が茶色に変色し、その上、あちこちに、薄茶色のシミがついていた。油汚れ？　血の跡？　まさかな。わたしは湧き上がってくる妄想を振り払った。

二階の洋室に入ると、ここだけ家具――子供机の様に見えた――が置かれていた。不動産屋の言うことには、撤去しようとしたのだが、どうしても部屋から出せなかったのだそうだった。
「部屋から出せない？　ではどうやって入れたのですか？」
わたしは食ってかかる様な口調になった。
「多分、大工さんが新築時に造ってくれたのと違いますか？」
と不動産屋は言った。一応筋は通っている。
わたしは胸騒ぎがして、引き出しを開けると日記帳が一冊残っていた。前の住民のものだろう。子供の字だった。

９月６日金曜日、学校でＡ子ちゃんたちに取り囲まれ悪口を言われた。泣いてしまった。
９月９日月曜日、誰かわからないが、机に悪口が書いてあった。もう、転校したい。
９月１０日火曜日、お父さんの会社がうまくいき、都心に転校できることになった。嬉しい！
９月１２日木曜日、転校の話はなしになった。お父さんの機嫌が悪い。
９月１３日の金曜日。一階で激しい口論があり、ドタンバタンと家具の倒れる音がした。わたしが恐る恐る見に行くと、お父さんがお母さんに暴力をふるっていた。お母さんは床の上に横たわり、動かなくなった。その瞬間、お父さんはわたしの方を見た。次

はわたしだ！

　わたしは階段を駆け上がり、子供部屋に入るとドアを閉めて鍵を掛けた。階段からドタドタと言う足音が迫ってきて、ドアの前で止まり、そして、どんどんとドアを叩く音が響いた。どうしよう。開けないと怒られる？　それとも開けじゃ駄目？　どうしたらいいの？　神様！　助けて下さい！　……。

　そこで日記は終わっていた。

2.

わたしは、パタリとページを閉じると、この家で過去に何があったのか、それはひょっとして惨劇ではなかったのか、思索をぐるぐると巡らせた。今となっては、この家の壁紙に所々ある壁のシミも血の跡に見えてくる。
「不動産屋さん。この物件の過去の事故ですが。告知義務があるのではないですか？」
「いや、何もありませんよ。.....ええ、何にも」
彼の口調は、語尾が震えていた。絶対に何かある。わたしはそう確信していた。賃貸物件の場合、告知の義務があるのは三年前のことまでだ。

でも、今のわたしに選択肢はなかった。この家で契約を決めた。

わたしはこの家から毎日、派遣先の会社に勤めた。
家はなんとなく薄気味悪い。
妻や子供たちもそう感じているらしく、夕食のときも、テレビを見ている間も口数が少なくなり、会話も減っていった。陰気な家に陰気な家族。もしからしたら、あの惨劇を引き起こした父親は、この家の陰気さが作り出した魔物ではないのか。わたしはその陰気さの正体を探りたいと思いはじめた。

手懸かりは、あの日記の記載だけ。
でも、もしかしたら何かわかるかも知れない。そう思い、わたしは自分の業務日誌を過去にさかのぼって調べ始めた。９月に１３日の金曜日があるのは直近では２０１９年と２０１３年だけだった。
わたしは次の日、休暇をとり、町の図書館に行った。新聞のバックナンバーを調べるためだった。一ヶ月ぶんくらいは棚に収納されているが、数ヶ月前より古いものは縮刷版と呼ばれる新聞社発行の冊子に収められていた。それより古いものはマイクロフィルムだ。何社かの新聞の地方欄を探すと２０１９年の９月１４日土曜日の記事の中に前日起こった事件の概要が載っていた。

「一家で謎の死亡事件。夫と妻と子供ひとりの遺体が発見された」とあった。
他殺か一家心中かは不明で警察は両面で捜査中と書いてある。
やはり、あの日記は殺された少女の最後の言葉だったのだ。わたしはそう確信した。

3.

　次の日、わたしが職場に行くと派遣元の会社の営業マンが先に到着していた。
「山田さん。どうして昨日、休暇なんか取ったんです？　　こちらの主任さんはひどくお怒りですよ！　　大事な会議だったのに、資料が間に合わなかったと。こちらには強硬な苦情が入って来ていますよ！　　説明してもらいましょうか。こちらの会社にも迷惑をかけたことになりますし、我が社の信用にも傷をつけたのですよ！」

　と、彼はわたしが休暇を取ったことに文句をつけた。
　昨日の朝のこと。わたしは職場の上司と派遣元の管理者に確認をしてから休暇を願い出たのだ。今になって問題にするなど、非常識なのはその主任とこの男ではないのか？

　しかし、そんなことを主張してみても立場上、無駄なことはわかっていた。
　お怒りなのは事実なのだ。わたしは素直に頭を下げた。そして派遣元の上司とわたしの連名で始末書を出すことで折り合いがついた。「二度と承諾のない休暇はとりません」と。

　その日、わたしは不機嫌さ満面で帰宅した。
　先に帰宅していた妻は陰気な顔で家事をこなしていた。
「おい。夕食の準備はまだなのか！」
　わたしは、つい言葉を荒げた。
　妻の隣で手伝っていた娘もおびえた顔でわたしと妻の顔をキョロキョロと見回した。なぜ叱られるのかわからない。それは確かにそうだろう。家が貧乏になり、妻は仕事をかけ持ちして、家事までこなしている。失業したときの約束ではわたしも家事を半分、受け持つことになっていた。どう考えても妻に当たる理由はなかった。

　食事の後、妻はわたしに相談があると話しかけた。
「生活のことか？」
「ううん」と妻は首を横に振った。娘のことらしい。「学校でいじめに遭っているらしいの。できれば学区外の小学校に転校させたいと思うの」

「ええ？　うちに金がないのはわかっているだろう！　贅沢言うんじゃない！」
　わたしは声を荒げた。

　しかし、話はそこで終わらなかった。次の日も、その次の日も妻は何度も繰り返した。
　いじめが段々とひどくなり、もう耐えられないという。
　それは確かに、よその学校に移った方がいいだろう。しかし、学区外だと通学費用が余分にかかるし、教科書や教材も新たに必要になるかも知れないし、制服や体操服も替わってしまうのだ。つい先日買いそろえたばかりなのに。

　勤め先でもわたしの立場は悪くなる一方だった。
　例の主任からにらまれ、もうよっぽど嫌われているみたいで、雑用ばかりを命じられ、何か理由をつけて派遣契約を打ち切ろうという態度がありありだった。朝の８時半から夕方の５時半までわたしには針のむしろだったのだ。

4.

陰気な家に帰ると娘は泣いていて、妻は繰り言ばかり。
わたしの精神は限界に達していた。問題が仕事のことだけならまだ耐えられただろう。言われたことを愚直に実行して成果物を提出し、文句のない程度に仕上げることは出来ていたし、もし、派遣契約を解除されても、また別の職場で一から頑張ればいい。そうも思っていた。しかし、気持ちの安寧を求めるべき家庭内まで崩壊寸前になると、もう、社会のどこにも逃げ場を失うこととなってしまっていた。

何か気を紛らわす手段を考えるべきだった。
しかし、小遣いすら受け取っていなかったし、それまでの趣味も全部おあずけ状態となっていたのだ。段々と怒りは家族へと向けられるようになりつつあった。

その日の夕食後にも、妻は娘の転校話に加えて、自分の仕事の愚痴を始めた。職場に嫌なひとがいて、ことある毎に意地悪されている。もう今の仕事を続けたくない。新たに仕事を探したいという。
今の家計は、わたしの給与と妻の給与でギリギリ成り立っていた。余分な出費は一円も認められない。嫌なひとがいるくらいの理由で失業してもらっては困るのだ。わたしは妻にこんこんと現実を見つめ直すことを要求した。

説教が３０分を超えた頃、とうとう妻は切れてしまった。
「仕事が辛いのはあなただけじゃないのよ！　どうしてわかってくれないのよ！　あなた仕事で辛い思いをしたことはないの？　そんなひと、世の中にいないわよね？　どうしてあたしだけがこんなことをガマンしなければならないのよ！　あたし絶対に転職するからね！」

その言葉にわたしも切れた。

台所にあった包丁で妻を刺し、泣きわめく娘を追いかけた。
娘は二階に駆け上がり、ドアを閉めて棚か何かを置いたらしくドアを開かなくした。

「おい！　開けろ。開けるんだ。父親に逆らう奴は許さないぞ！」

　わたしはドアをどんどんと叩き続け、娘を脅かした。

「お父さんやめて！　許して。学校にはちゃんと通うから。いじめられても耐えるから」

「おい！　開けるんだ！」

5.

一時間後.....わたしは子供部屋の中で茫然としていた。
床は血で染まり、壁にも薄茶色の染みの上に赤い血が飛び散っていた。

わたしは、自分自身が「自分」ではない別のものにかわっていることに気づいた。
――普段ならそんなことで怒り心頭になることなどなかったはずだ。この程度のいざこざなんて、結婚当初、いや、付き合った当初からよくあったのだ。それがこの日、このときに限りなぜ凶行に及んだのか？　何か見えないものがこの家族に取り憑き、悪業をなしているとしか思えなかった。

わたしは、子供机の上に娘の字で書かれた日記を見つけた。
ページを繰り、文字を目で追っていき、ハッとなった。
.....まるでこの物件を見に来たときにあったあの日記の内容そのままだったからだ。前の家族もこんな惨劇に遭っていたのだろうか。自分がそんな事件の主人公になるとは、少しも.....いや、内心どこかで気づいていたのだろう。だから、不吉な予感しかしなかったのだ。わたしは自分の手を見た。血で染まりヌルヌルした感触の包丁のとってがあり、血脂で滑って自分の手も少し切っていたみたいだった。

壁にかかったカレンダーを見ると、今日は２０２４年９月１３日だった。曜日は確かめなくても「金曜日」だった。

――前の家族は最後にどうなったのだろう？
新聞記事では生存者はいなかった。警察は心中か他殺か両面で捜査をしていたみたいだった。だとしたら？　後はわたしの死で物語は終了する。
あの不動産屋は、また新しい居住者を探すだろう。それは食い止めたかった。こんな惨劇は自分で終わりにしなければならない。しかし、その方策は今のわたしには考えられなかった。

　そして、わたしは風呂場に行き血を洗い流した。何度も何度も石鹸を塗ってシャワーの水をかけ、同じ事を朝まで繰り返した。血の臭いと脂分はどうやっても落ちなかった。
　朝方.....惨劇の現場をそのままにして、わたしは家を出た。

　記事のあった地元の新聞社に行き地方欄の担当部署を訪れ、当時のニュースについて問いただした。
「ああ、あの事件ですか？」
　担当の男は軽そうな返事をした。
「記事では惨劇のように思えましたが.....」
「実はひとり、生存者がいたという証言があったんですよ。本当の所はよくわからなかったんですけどね」
「ええ？」
「夫と妻と娘の死体が見つかっていたんですが、近所のひとの話では、もうひとりお嬢さんがいたそうなんです」
「娘が？　　もうひとり？　　彼女はどうなったんです？」
「それが.....当時も警察では行方を追ったのですが、未だ見つかっていないそうなんです。結局、近所のひとの思い違いで娘はひとりだけだったということで落ち着いたみたいですよ。住民票や戸籍を調べたそうですが、やはり、子供は殺された女の子ひとりだったと」
「ええ？」

　あまり長時間、同じ場所にいては危険だった。新聞社を後にして近くの公園で立ち止まった。ブランコに腰掛け、揺らぎながらここ数日のことを思い返した。
　自分で自分のやったことが信じられなかった。誰かに突き動かされたと言うのだろうか。もうひとり誰かがいたのだ。あの家には。
　しかし、もう確かめるすべはなかった。家には死体が転がっているはずだし、異臭がすると近所のひとが警察に通報したら、あっという間に自分は捕まってしまうだろう。

　もう一度、図書館に行ってみた。
　もうひとつの１３日の金曜日だった２０１３年の９月の分を確かめるためだ。
　やはり、同じ様な心中事件が報じられていた。
「むむ？」
　こちらは心中未遂事件となっていて、死にきれなかった父親が逮捕されていた。
　殺されたのは娘ひとりだけ。妻はかろうじて病院で一命を取り留めていた。

　あっと思った。
　あの家には、その子の怨念が今もさまよい、あの世からそこに住む人をたぐり寄せていたのだ。近所のひとの言うもう一人の子供とは彼女の幽霊だったのだ。わたしはそう確信した。住む人に不幸をもたらし、あの世へと引き込む。わたしはそれに気づかず大

変なことをしてしまったと、あの家を選んだことをひどく後悔した。

　家の前に立ち戻ると、すでに警官が周りを取り囲んでいて大勢が中と外を行き来していた。わたしは遠くから見守る野次馬である近所のひとりに尋ねてみた。
「どんな家族だったのですか？」
「そうねえ.....」
　初老の女性はわたしがその家の主だったことに気づいていないみたいだった。「ご夫婦で娘さん『ふたり』と一緒に住んでいたみたい。でも、会っても挨拶もしないし、何となく陰気なご一家だったわ」
　と、語った。
　彼女の目にはもうひとりの「娘」が写っていた。やはり、わたしたちは幽霊と一緒に住んでいたのだ。

　この家にまつわる物語の連鎖を止めるには、わたしが生き残って人生をやり直して、幽霊の思い通りにはさせないことだと思索を巡らせた。でも、ふたりも手にかけたのだ。もしかしたら極刑も免れないかも知れなかった。極刑を回避するためには？　　わたしは公園の [[rb: 雲梯> うんてい]] に目をやった。あそこに縄をかけたらどうだろう？　　ひと思いに楽になれるかも知れない。しかし、死への恐れから決心はつかなかった。

　その日の午後、わたしは警察に自首した。了

行方不明になったおばあちゃん

（１）買い物

わたしは日曜日に家族みなで百貨店に出かけた。
お歳暮に贈る品物を選ぶのが目的だった。

毎年のことである。夏と冬。面倒な慣例だと思ったが仕方がない。近くの量販店で買って風呂敷に包んで持って行けば安上がりだしお手軽なのだが、送り先は遠くの親戚もいるし、何より高級百貨店で買ったことに意味があるのだ。包装紙が違うだけで不経済だとは思いつつも毎年、同じ頃に同じ店で購入していた。お中元とお歳暮だった。

わざわざ混んでいる時期.....それも休日に行く必要もなかったのだが、やはり会社関係の送り先には自分で選ばなければならないと思ったし、親戚関係はおばあちゃんが自分で見て選びたいと言っていた。それで、妻と子供二人とおばあちゃんと連れだって、お食事がてら行くことになったのだ。

百貨店に着いて早々、わたしは家族で来たことを後悔した。時間的に丁度お昼であり、食事にしようと思ったところ、子供達は、やれハンバーグだスパゲティーだと騒ぎだし、おばあちゃんは肉は嫌いで、うどんがいいと言う。わたしと妻は顔を合わせ入り口近くの総合案内所にいたコンシェルジュさんにどこか適当な店はないかと尋ねた。

若いコンシェルジュさんは新米らしく手元のマニュアルをさっとめくった。
「七階レストラン街にご家族でお楽しみいただけるお店が二つございます。『東京家族庵』と『ファミリー食堂・アリオ』でございます。どちらも和洋食を取りそろえてございます」
「ふうん。どうもありがとう」

エレベータで七階に移動して、その食堂を探し、家族連れで賑わっている所をみるとそのレストランがあった。わたしたちはその中のひとつに入った。席についてメニューをめくる。
子供たちの選んだものは最初に言っていたものとは違っていた。
カツ丼と天ぷらうどん。

　おばあちゃんはそんな孫たちの姿を見ながら嬉しそうにメニューを繰った。

「勝男と食事なんて何年ぶりかねえ」
　とおばあちゃんは、わたしと百貨店のレストランに来たことをうれしそうに言った。だが、忘れてもらっては困る。
「お中元のときも来たじゃないか」

　わたしは何を食べようか迷うおばあちゃんを無視して、ザルうどんと、きつねうどんを頼んだ。肉が嫌いなら他に注文するものなど、あろうはずがなかったからだ。ここに来て迷っても困る。だが、いざ、うどんが運ばれてくると、おばあちゃんは冷たい方がいいと言いだした。

「また、お腹を壊しては面倒だからきつねにしてくれよ」
　とわたしはあっけなく決めてしまった。
　ザルうどんなど食べるのに五分もかからない。それで、お茶を飲みながら、熱いきつねうどんにふうふうと格闘するおばあちゃんの食べ終わるのを待っていた。多分、最後の方は麺がのびてしまったのだろう。年寄りだからたくさん食べられないとわがままを言って残してしまった。だったら、もっと早く残せよと内心思いながら食べ終わるのを待った。
　子供と妻はすでに食事を終えて、先に出て、百貨店のレストラン街に併設してある、子供広場で遊んでいた。

「おばあちゃん。遅いよ！」
　と子供が責めると、おばあちゃんはわたしのせいにしはじめた。頭に来たが黙っていた。

　それから、本来の目的であるお歳暮を選ぶのに出かけた。
　今年夏のお中元と昨年冬のお歳暮の購入履歴と送り先が記入されたショッピング案内を、百貨店から事前に郵送されていた。それを見ながら完全に同じものでもなく、価格が同程度のものを探していく。

　さっさと選びたかったが、こればっかりは妻とおばあちゃんの意見も無視出来ない。
　お歳暮商品ばかりの特設の催事場。
　百貨店に入ったときにコンシェルジュさんに聞いた限りでは、ここと地下一階の食品街にも海苔や佃煮、和菓子の店があり、お歳暮として送ることも可能なそうだった。催

事場で選べなければそっちも見て回ることも予定に入れていた。

　面倒だったので先におばあちゃん関係を見ることにした。主に親戚とお寺さんである。毎年同じものを選んでいる割には、いつもここで迷うのだ。わたしはいらいらしながらおばあちゃんが品物を選ぶのを後ろから見ていた。

「本家にはやっぱり佃煮の方がいいかねえ？」
「去年は何を送ったんだい？」
「覚えてないよ」
　わたしは百貨店から送られて来た購入履歴を見た。やはり佃煮だった。それでいいじゃないかと、投げやりに言った。おばあちゃんは不満そうにそれを選んだ。一体何を選ぶことがあるというのだ。わたしは段々不機嫌になっていった。面倒なことこの上ない。

「お寺さんには何を送ったらいいかねえ。お前だったら何がうれしい？」
　それは現金が一番うれしいに決まっている。だが、それを言ったら身も蓋もない。それを何か選ばなければならなから面倒に感じるのだ。わたしは妻に去年何を送ったのか聞いた。彼女も購入履歴を見た。

「お中元のときはビールセットを送っているわ」
「ビールねえ？　　寒くなってきたから日本酒の方がいいんじゃないかしら」
　とおばあちゃんは反論した。
「いまどき寒いところで飲むわけじゃないからビールでいいんだよ」
「でも.....」

　まだ時間がかかりそうだった。
　わたしは腕時計を見た。自分たちもお歳暮商品を選ばなければならないのだ。こんな所でゆっくりしている暇はなかった。面倒になったわたしは自分のスマートホンをおばあちゃんに渡した。品物が決まったらお歳暮売り場の外の椅子に座って待っておくことと、もし、はぐれたら妻のスマホに電話を入れる様に言った。

「使い方が分からないよ」
「だからぁ！」

　着信があれば緑のボタンを指先で押さえればいいと何度も説明した。
「いいな。ちゃんと出るんだよ！」

　心配顔のおばあちゃんとはここで分かれて自分たちの用事を済ませることにした。会社の上司と普段お世話になっている人たち向けの分だ。これは毎年のことだが、少しくらい心のこもった物と思われるものにしなければならない。それで、妻と二人で選びに掛かった。
「課長へは去年は何を贈っていたっけ？」
「ええと。ウイスキーだわ。今年もそうする？」
「銘柄だけ変えようか」
　そして、同程度の価格のウイスキーを選んだ。
「後は、山田さんだけど。去年は何を？」
「あら。去年は送ってないわね。忘れたのかしら」
「ああ、そうだ。山田さんは去年の一年間は海外赴任だったんだ。今は日本にいるから何か贈りたい。何にしようか」
　取引先の商社の人だが個人的に色々面倒を見てもらっているのだ。何もしないのも具合が悪い。
「一昨年はビールとカニ缶のセットだわ。どうするの？」
「同じだと芸がないな。こっちのグルメセットはどうだろう」
「あたしが欲しいくらいだわ。うちにも買いましょうよ」
「また今度にしような。じゃあこれにしよう」

　こうして次々と決めて受付カウンターに並んだ。案内係が番号札を渡してくれた。しばらくの間待った。妻は子供たちがキッズスペースにいるのをちらりと確認して、そっちの方に移動した。

「番号札五十番の方。二番カウンターへどうぞ」
　わたしの番号が呼び出されカウンターの椅子に腰掛け申込書と商品の札をテーブルの上に出した。係員は商品の内容を復唱して確認し、わたしはカードを出して決済してもらった。そして発送控えをもらった。

（２）行方不明

「さあ、やっと終わった。帰ろうか？」
　わたしはキッズスペースにいた妻と子供に声をかけた。
　今日は珍しく子供たちは上機嫌で遊んでくれていた。

　だが、催事場の外に出て椅子のあるところに行ってもおばあちゃんはいなかった。百貨店で一旦はぐれると二度と捕まらないのは経験上知っていた。だから、わたしのスマートホンを渡していたのだ。わたしは妻におばあちゃんに電話を入れるよう頼んだ。

「しょうがないわね。トイレにでも行ったんじゃないかしら」
　と、言いながらわたしの電話番号をタップした。しばらくスマホを耳に当てていたが、少し首をかしげた。おばあちゃんが出ないと言う。

「ええ？　　どういうことだい？」
「だから出てくれないのよ。十回くらい鳴って後は留守録のメッセージになるの」
　わたしは、ひょっとしてトイレで倒れているのではないかと心配になった。
「ここで子供を見ていてくれるか。おれがそこらを探してくる」
「でも、あなたもスマホがないんでしょう？　　一回はぐれると、わたしたちもわからなくなっちゃうわよ」
「じゃあ、子供たちを連れて一緒に探すしかないじゃないか」
「しょうがないじゃない。これからお義母さんにも携帯電話を持ってもらった方がいいんじゃないの？」
「年に一度か二度のことなのにそんなの不経済だ」
「まあいいわ。一緒に探しましょう」

　そうして、わたしと妻そして子供たちを連れて辺りを探し回った。しかしどこにもいなかった。近くにいた店員にも尋ねた。
「この階に他に休憩できる場所はありますか？」
「そうですね。この催事場の東側にも、もう一カ所、こうした椅子をご用意した場所がございます」

　それを聞いてそこまで小走りに急いだ。椅子に座っている老人が何人かいたが、うちのおばあちゃんの姿はなかった。わたしもいよいよ心配になった。倒れて医務室にでも運ばれて行ったのではないか。最悪の事態が頭の中に浮かんだ。それに、おばあちゃんは品物を選ぶだけで決済はわたしのカードがないと出来ないはずだ。

「やっぱりトイレで倒れたんだろうか」
「まさか。分かれたときは元気だったわよ」
「でも、電話にも出ないんだろう」
　妻は渋々、女子トイレの中を探索した。開いているトイレをのぞき、閉まっているところにはノックをして回った。妻はいやそうな顔で出て来て、おばあちゃんの声はしなかったとわたしに報告した。

「いなかったのか？　　それならどこに消えたんだろう」
「本当に倒れたのかしら？　　他の階も探してみるの？」
「縁起でもないこと言うなよ。おばあちゃんはまだそんな.....」
「でも電話にも出ないし、もし出る気があるならその辺にいる人に聞いてでも出られるでしょう？」
「それもそうだな」

　わたしたちは、一階の総合カウンターまで降りて、コンシェルジュさんに事情を説明して全館放送してもらった。

　――町田市からお越しの山田つね子様。町田市からお越しの山田つね子様。ご家族の方がお待ちです。おられましたら一階の総合カウンターまでお越し下さい。繰り返します。.....。

　それでもおばあちゃんは現れなかった。
「ひょっとしたら先に帰ったんじゃないかしら」
「まさか。待ってるって言ったんだよ」
「でも、聞いてる風で聞こえてないときもあるみたいだし」
　と、妻は痴呆説を唱えた。確かにそんなときもあった。

　困り果てているわたしにコンシェルジュさんは声をかけてくれた。
「もしかして地下一階の食品売り場におられるのではないでしょうか。あちらにも海苔や佃煮の売り場がございますので。こちらでお確かめしてみます」
「ええ？　　そんなことが？」

　コンシェルジュさんは館内無線を使って地下一階の店員と警備員に連絡を入れてくれた。そちらに八十代の老婦人がいて、うろうろしていないか、椅子に座って休憩していないか。確かめるよう簡潔に話していた。そして、こちらを見てこくりとうなずいた。

「おひとり休憩所におられるそうです。東側エスカレータの降り口近くの休憩スペースでございます。ちなみに医務室ではお年を召した方の来訪はないそうです」
「本当ですか？　　ありがとうございます！」

　わたしはエスカレータをドタドタと音を立てて駆け下りた。
　降り口横の椅子のスペースでおばあちゃんは佃煮店の店員に付き添われて座っていた。世間話をしていた。
「どうして電話に出ないんだよ。心配したんだぞ！」
　わたしが声を荒げると隣の店員が「まあまあ」と取りなすようなことを言った。
「だってボタンを押しても反応しないのよ」
「ええ？」
　おばあちゃんの言う通り液晶のタッチパネルが反応しなくなっていた。
　どうやらおばあちゃんの指先が乾燥してカサカサになり。タップが効かなくなっていたみたいだった。

　地下一階の食品街でわたしはおばあちゃんのリクエスト通りに佃煮と海苔を買い、送付伝票に送り先の住所を書き入れカードで決済をして買い物を全てすませた。

　帰り際、総合案内所のコンシェルジュさんに一件落着したことのお礼を述べた。
「いいえ。お客様に快適にお買い物をしていただくのが、わたくしどもの仕事であり一番の喜びでございます。またのお越しをお待ち申し上げます。ありがとうございました」
　と、姿勢を正してお辞儀した。
　わたしの怒りと慌てふためいたことはどこかへ消え去っていた。
　快適な買い物。そんな楽しみが百貨店にはあった。了

デパ地下大騒動

（１）

もしも最初から結末が見通せるなら？

世の中の悲劇の９９パーセントは回避出来るだろう。しかし、それを知るのは「やってしまった」後のことになる。

わたしは都内にある老舗デパート地下食品売り場の企画を担当していた。各テナントの売り場面積当たりの売り上げを監視したり、ときには新しい催し物などの企画を考えたりしていた。景気のいいときにはやりがいもあり楽しい仕事だった。

今日、先月末締めの各テナントの売り上げをデータにまとめ、それを売り場面積で割った数字を売り場主任に報告した

売り上げを面積当たりで評価するのは、デパートの地下食品売り場の面積が限られているので、いかにそのスペースを有効活用するかがこの業界の死命を制するものであると同時に、広いスペースを取っているテナントと少ないスペースで頑張っているテナントを公平に評価する手段でもあった。

わたしの報告書について主任は不機嫌そうに言った。

「丸川豆腐店の売り上げがここ三ヶ月間低迷している。三割減というのは季節のせいじゃないだろう？　　どうなっているんだ？」

「色々事情があるみたいです」

としか答えられなかった。

文字通りの意味だった。商品やテナントによっては季節性の増減はつきものだが、ときとして企画や営業担当者には計り知れないといおうか、人智を超えた何かが作用していることもあった。理由がないのに売り上げが増減する現象が起こるのだ。

「その事情を聞いているんだ！」

主任は語尾を強くした。

「はい。現在中東の産油国で減産が行われているではないですか。その結果、石油価格の

高騰が起こっています。それで豆腐の製造に必要な燃料費が上がると共に、大豆の生産コストも上がっています。それが豆腐の原価を押し上げている状態です。.....ただ、豆腐はあくまでも豆腐であり、それ以上のものではありません。結果的に値上げには踏み切れず、質を落としたようです」
　と、取ってつけた言い訳を述べた。
「むしろ値上げして売り上げをキープすべきだったな」
「最初はそうしたいと先方から申し出があったのですが、何しろ豆腐ですから製造原価の値上がりを補うには無理があります」

　わたしが事情を説明しても主任はあまり細かい事情には気を払わなかった。
　管理職には数字がすべてだ。
「改善の見込みがないのであれば来月から退去しれもらう。食材売り場のメインストリートの店なんだ。新しいテナントに入ってもらうしかない。この案件は早急に処理しろ」

　わたしはそう言われるのは前々からわかっていたが、実際、この宣告をするのはつらかった。先代店主の代からここで商売をしていて、わたしも入社当時はよく勉強させてもらったものだった。今の店主が無能だとは思わないが、やはり、工夫がないと生きていけないのが実情なのだ。知名度が広がるような「特別なブランド」を作り上げるか、付加価値の高い.....例えばＳＤＧＳやフェア･トレードに貢献するような商品を取り扱うかなどだ。

　丸川豆腐店でもう少し話を聞こうかと思い、売り場を歩いていると鮮魚店の店長から呼び止められた。
「あっ！　山田さん！　解体ショー＆直売会のマグロが入ってますよ！」
「そうですか。ちょっと見てみましょうかね」

　わたしはそのマグロを見に行った。この催しは毎週土曜日の午前中に行っていた。店頭で店長自らさばいて短冊状にして直売すると言うものでこの売り場の呼び物の一つだった。企画したのはわたしで、結構評判もよく、好みの部位を指定して買えると言うことで、お客の評判も概ねよかった。

　鮮魚店の冷蔵庫に入ったマグロを見ると、今週のは二百キロを超えそうな本マグロだった。卸売り市場では高値で取引される高級品だ。

「へえ。これはよく手に入りましたね」

「いやぁ。デパート側で現地漁協と直接交渉してくれたからですよ。卸売市場を経由させると、こんないいものは高級料亭や寿司屋に取られちゃいますものね。それでもこんな大物はここ何ヶ月か扱ったことがないですよ。解体ショーが楽しみです」
「本当にそうですよねえ」

いつもは、１００キロから１５０キロのビンチョウマグロが多かった。それでも、最初に水揚げされる漁協に話を付けに行くのには苦労したものだった。従来の慣例を崩してまでこのデパートに入れてくれるようになったのが港で海産物の水揚げを管理している漁協の理事長だった。彼を何度も接待して一年がかりで大物をこっちに回してくれる様に話をつけたのだ。この企画は大当たりして週末の地下食品売り場の売り上げ全体を底上げした。その結果、マグロの値段を何倍も上まわる利益を生み出したのだ。

初めての企画が終わった後、骨の周りに残ったトロや赤身で店長は簡単なすしを作ってスタッフに振る舞ってくれた。それを醤油につけて食べると口の中でトロの脂がとろけて甘い味がした。
「本当に美味しいですねえ」
と、皆が感動をあらわにした。それほど美味しかったのだ。
「ええ、最高です。魚屋冥利に尽きます。このような企画を作っていただいてありがとうございました」
「いや、こちらこそ」
鮮魚をさばいた店長も心から喜んでくれた。わたしは嬉しかった。

だが、良いことはいつまでも続いてくれないものだ。
これから、売り上げの落ちた丸川豆腐店に引導を渡しに行かなければならない。新規の店舗にテナントに入ってもらうときは頭を下げて頼むだけだが、追い出すときには何だかこちらが悪者の様な気がする。

「あの？　店長いますか？」
「はい。お待ち下さい」
こちらがデパートの名札を付けているので、店員はあわてて丸川店長を呼びに行った。
「何でしょう？」
「丸川さん。ここしばらくの売り上げの件なんです。もうおわかりでしょうが、三割以上落ち込んでいますよね。それに今後の回復の見込みもないでしょう？」
「そ、そんなことないです。今、頑張って新しい商品を考えている所なんです」
「それはどんな？」
わたしの意地悪な質問に彼は即答出来なかった。彼に具体的なプランはなかったのだ。
「実のところデパ地下の一等地に流行らない店をおきたくないという事情があるのですよ。立ち退き料など後のことはデパートの法務部で処理します。しばらくお考えくだ

さい」

　わたしは残酷だが主任に言われたとおり、テナント契約の解除を伝えた。彼のがっかりした顔にわたしは心が痛んだ。ここを引き払えば、高い出店料を払わずにすむが、自分の豆腐屋の売り上げではやっていけそうにないことは容易に想像がついた。この場所でも売り上げを確保できないのに、郊外の商店街の店ではたかが知れている。

　だが、悪いことは重なるものでその日のマグロ解体ショー＆即売会は失敗した。事態を把握するために、わたしはアルバイトの学生に命じて付近にあるライバル店に偵察に出した。

（２）

「どうだった？」
「やっぱり同じ様なマグロ解体をしていました。さらに赤身のブロックのパック詰め放題コーナーがあるんです。多分それに客を取られたと思います」
「そう……」

わたしにとっては大失敗だった。ライバルデパートの行動くらい事前のチラシのチェックで把握できたことだった。完全に秘密を守っていたなら話は別だが、そんなに極秘にしてしまうとお客も来ない。わたしは叱られるのを覚悟の上で主任に報告した。
「馬鹿野郎！　この企画を作るのにどれだけ投資したと思ってるんだ！　漁協の接待だけでも大変な額だ。早急に対抗策を作れ。いいな！」
「しかし、マグロ対マグロでは詰め放題の量で勝負するしかありません。他の商品も視野に入れてもいいでしょうか？」
「例えば何だ？」
「高級和牛のパック詰め放題です」
「赤字を出したのではどうしようもないぞ。大丈夫なんだろうな？」
「要は、地下食品売り場の売り上げ全体を底上げすれば、牛肉自体の赤字は認めていただけますよね？」
「それは結果次第だ。マグロのときはここだけでなく他の売り場にもいい影響が出たから営業部長から誉められたんだ」
「わかりました。考えます」

それから、着替えてライバル店をいくつか偵察してまわった。高級和牛はすでに手がつけられていた。野菜も玉子も食パンも。ほとんどの食材が催し物のテーマに選ばれていた。ことここにいたってわたしは困り果てた。また、地下食品売り場に戻り精肉店に行ってみた。
「ちょっと相談があるのですが」
「はい。何でしょう？」
「何かこう……変わった企画ができないでしょうかね。すでにパックに詰め放題ってどこの食品売り場でもやってるではないですか」
「そうですねえ。例えば高級松阪牛や神戸牛でそれをするとか？」
「それも他店ですでにやっていました。さっき見てきたところです」

「そうなんですか？　そんなことして赤字にならないんですかねえ？」
「いや、赤字でしょう。ただ、お客さんが来てくれることでデパ地下全体が潤ったらそれでいいんですよ。テナント単独の損失はこちらで負担します」
「ええ？　そうなんですか？　そうですねえ」

結局、彼からもいいアイディアは出してもらえなかった。

段々とわたしは一人で考え込むことが多くなっていった。気がつけば誰とも話をしない日が増えて行った。主任には少し心配をかけたようだったが、元々、自分さえよければいい性格の人物だったので、わたしもあまり、援護射撃を期待したわけではなかった。

次の週末。マグロの解体ショーをしているとき、わたしは制服を脱いで客に紛れ込んでいた。お客さんの生の声が聞きたかった。
「やっぱり、解体ショーっていいですか？」
と、来ていた初老のご婦人にさりげなく聞いてみた。
「それはやっぱり目の前でさばいたらこれ以上新鮮なことってないでしょう？　パック詰めされたものは、本当はいつさばいたのかなんてわからないじゃない？」
そんなことを言った。やはり、パックの食品の鮮度に疑問を抱かれている。
わたしはひとつのアイディアにたどり着いた。
高級和牛と解体ショーのコラボだ。
これはまだどこのデパ地下でもやっていなかった。

わたしは精肉店が仕入れをしている兵庫県の但馬の牧場へ行き、毎週牛を一頭入れてもらう交渉をした。そして土曜日の昼間に屠殺業者の手配をした。精肉店の店長にも協力を依頼した。

そして当日、「神戸牛・さばきたて・パック詰め放題」と銘打って地下食品売り場の一角で催し物をした。牧場から連れてこられたのは一頭の黒毛但馬牛。リクエスト通り三歳の雌牛だった。つぶらな瞳をしていた。

「可愛い！　牛さんだ！」
と言う声が見物客の間からこぼれてきた。何か勘違いしていると思った。――食肉に可愛いはないだろうと。わたしは解体開始のサインを送った。

屠殺業者は専用器具を持ち、つながれた牛の頭部にあてバシュッと言う音と共にビスを打ち込んだ。その瞬間牛は、気を失いけいれんを始めた、彼は牛に蹴られないよう注

意しながら額から穴を開けて針金を通し中枢神経を麻痺させた。
　その後、首をかき切って頸動脈を切った。血液が水道のようにほとばりしり、それを見た客は悲鳴を上げて逃げていった。だが、まだ三割くらいの人が頑張っている。彼は牛の後脚をチェーンブロックで天井につり下げ、そのまま腹を割いて食道を縛った。こうしないと、胃の内容物が漏れてくるそうだ。

　そうしておいて反対側の結腸を縛り糞が漏れないようにすると、一気に腹を切り裂くと内臓がぼとりと落ちてきた。それを見ていた何人かの客が卒倒した。嘔吐している客もいる。彼は嬉しそうに皮を剥ぎ始め、それを見た何人かの客が青い顔で逃げ出した。彼は綺麗に剥ぐと牛刀で大きな塊に分解した。

　その後は精肉店の出番だ。彼も嬉しそうな顔で肉をさばき始めた。あっという間に肉の塊が店先に並んでいるのと同じ状態になった。

　だが、血まみれになった会場を見るとそこだけでなく全フロアに客は誰もいなかった。

　屠殺業者はこう言った。
「あの人達は肉って、スライスやハンバーグの形で牧場にいると思ってるんですかねえ」
　しょうがなさそうな顔をした。
　子供達の好きなハンバーグも毎日こうやって牛を精肉処理しているのだ。
　それに目の前でさばいたのなら新鮮だし混ぜものが一切ないのだ。どうして嫌われたのか、その時のわたしはわからなくなっていた。――客を呼ぶには呼べたが売り上げには全く貢献しなかったことのみ、悔悟の念に囚われていた。

　次の日、動物愛護条例違反で警察の捜索を受けた。動物虐待だという。

「何故ですか？　どうしてマグロならよくて神戸牛だといけないんですか？　お巡りさんは肉が嫌いなんですね？」
　と、わたしは警官に食ってかかった。

「残念だったな。マグロは愛護動物の対象にはなっていないのだよ」
　警官は事務的な口調で言った。

　主任は一連の出来事を全て見ていたはずだったが、冷ややかな顔で何一つわたしをかばってはくれなかった。――売り上げに貢献しなかったからだろうか。わたしはなおも

お金のことに囚われていた。了

お遍路さん　―　運命の人　ー

1.

七月の最終週、大学院修士課程一年の前期試験が終わった夜。わたしは新宿駅西口の高速バスターミナルで徳島行きのバスを待っていた。傷ついた心を癒すためとでも言ったらいいのだろうか。四国出身の学食のおばちゃんの勧めに従った形で、夏休みを使い、四国八十八カ所霊場を巡るお遍路に出ることにしたのだ。弘法大師空海が開いた八十八のお寺と二十の番外霊場を徒歩で巡る長い長い総延長一四〇〇キロの旅路である。

わたしは、登山用のザックに白衣《びゃくえ》と輪袈裟《わげさ》、山谷袋《さんやぶくろ》をたたんで押し込み、納札《おさめふだ》と納経帳は別に入れ、また、登山用の寝袋《シュラフ》なども用意して野宿も可能な装備をしていた。白衣には徳島に着いてから着替えるつもりで、今はＴシャツとジーパン姿である。菅笠《すげがさ》と金剛杖《こんごうつえ》だけはザックには入らないので、手に持っていた。他人から見れば、何だこいつと思われそうな格好と言えなくもないだろう。

時折、わたしは携帯電話の画面を確かめた。今回の四国行きを研究室の指導係である博士課程の先輩院生には告げているが、指導教官の先生には何も言っていなかったのだ。

夏休み一杯研究室を留守にするなど、普通ならあってはならないことだった。工学科の研究室では、通常、お盆の数日以外は休みなしに実験が行われ、四年生の卒業研究や、大学院生の学位論文を書くための研究が日夜続いている。そうした中、どうしても心の中で踏ん切りの付かないことがあり、お遍路の旅に出たことには理由があった。でも、それが理由になるのか？　自分で問いかけたとしたら、それすらクエスチョンマークがつくだろう。自分自身がまるで見えていないというのが正直な所だった。

「あら、山田くん。本当にお遍路に出るのね？」

午後九時のうす暗闇の中から、そう中年女性に声を掛けられて振り向くと学食のおばちゃんが立っていた。

「あ……。ええ、はい」

「四国へは行ったことあるの？」

「いえ、今回が初めてです。おばさんこそ、何でバスターミナルに？」

「急なお葬式が出来てね。親戚のおばあちゃんなんだけど」
「この度は.....」わたしはこんなとき何と挨拶したらいいのだろうかと迷った。正直何と言ったらいいのか、皆目見当がつかなかった。「ええと.....お悔やみ申し上げます」
「やだ。別に気にしなくてもいいわよ」
「どちらまで乗られるんですか？」
「高松まで」
　わたしの行き先の徳島バスターミナルの方が早かった。先に降りることになりそうだ。

　間もなくコトバスエクスプレスが乗り場に入ってきた。乗客は荷物片手に続々と車内に入っていく。わたしも、ザックを右肩に掛け、左手に菅笠と金剛杖を持ち、入り口からバスの中に入った。座席は四列で、偶然にも通路を隔てて、学食のおばちゃんと隣り合わせになった。

　コトバスエクスプレスは東京ディズニーランド発のバスで、すでに何人かの乗客が乗り込んでいた。寝ている人もいたようだが、新宿西口で大勢乗り込んだものだから、目を覚まさせてしまったようだった。
「どっこいしょ」
　おばちゃんは旅行鞄を一つ前席の下のスペースに押し込み足を伸ばした。わたしのザックは大きすぎ通路にはみ出した。金剛杖と菅笠は前のシートにもたせかけた。

「ふう」
　一応、荷物類を落ち着くところに落ち着かせると急に空腹になった。わたしは、コンビニエンスストアで買ってきたおにぎりとお茶をザックから取り出した。
「あら、今頃夕ご飯？　　不摂生は駄目よ」
　おばちゃんはそう言った。午後八時を過ぎたら食べてはいけない主義らしい。もっとも、まだ、そんなことを気にする年齢ではなかった。九時だろうが、十二時を回ろうが、飲むときは飲んだし食べるときはたらふく食べた。そんな生活が研究室に配属されてから常態化していた。
「それで、奈実ちゃんとは連絡取れたの？」
　――ギクッ、とした。

2.

「あ……いいえ。まだ」

　彼女とは大学の四年間を通し、同じサークルでつきあっていた仲だった。何度もデートもしたし、彼女の部屋に泊まり込んだことも一度や二度ではない。
　仲が急に冷え込んだと感じたのは今年のゴールデンウィーク辺りからだった。

　彼女は大学を卒業と同時に大手メーカーに就職し、一般職として働き始め、どうやら、先輩社員に見初められたらしかった。最初はもちろん、わたしもそんなことに気付かず、普通に彼女と付き合いを続けていた。それが、段々と、距離を感じるようになったのは、二人で食事に行く店の格式が上がり、飲みに行くときのお酒も学生時代のビールに焼酎から背伸びして高級ワインに変わり出したのを実感したときだった。

　単純なわたしは、彼女が社会人になり給料がもらえるようになったからだと、ただ漠然と考えていた。が、その考えが甘かったのに気付くのに時間は掛からなかった。
　六月のある日曜日の夜、彼女からわたしの携帯電話にメールが入ったのだ。

　――別れて欲しい。

　ただそれだけの文面だった。
　わたしはうろたえ、すぐに彼女の携帯に電話を入れたが、取ってもらえず、メールも無視された。直接会って真意を確かめたいと思い、彼女の勤め先の近所まで行ったこともあったのだが、その直後、警察から「ストーカー規制法」に基づく警告を文書で受けてしまったのだ。もう救いようがない事態だった。

　そして、共通の女性の友人を通して、彼女が会社の先輩と付き合っているということを知らされた。
「だって、奈実が付き合っている相手は幹部候補生なんだよ。二十八歳にして年収六百万もあるみたいだよ。片や月五万円のアルバイトをしている大学院生。勝負になんないわよ。あきらめたら？」

友人はそう言った。わたしは一言も反論できなかった。

研究だって順調とは言えない。このまま続けていたって、学会発表できるかどうかすら怪しいのだ。学会発表できなければ、修士の学位論文すら通らない可能性があるのだ。とにかく、今のわたしはあらゆる面でやばかったのだ。

――アルバイト削ったら？
と、指導役の先輩からも言われていたくらいだ。実験をやっても思った通りの結果が出ない。焦る。余計に訳がわからなくなる。基礎となる理論さえもが揺らいでくる。そんな研究地獄のまっただ中にいた。
このとき、唯一の支えは恋人である奈実の存在だけだった。その彼女すらわたしの元から遠ざかって行ってしまったのだ。その晩、わたしは、やけ酒に安い焼酎をがぶ飲みし、次の日、大学を欠席し、下宿でげえげえ吐いた。

そんな顔色で学食に顔を出したら、おばちゃんに見とがめられた。
「ちょっと、どうしたのよ？　顔色悪いわよ。二日酔い？」
「え、ええ、まあ」
「何かあったの？」
わたしは、正直に自分の置かれた状況を説明した。おばちゃんは水を持ってきてくれ、時間を掛けてわたしの話を聞いてくれた。学食は昼休み以外には暇なのだ。研究の合間を縫って頭を切り換えに来る大学院生しかいない。
その中で、おばちゃんが高松出身だと聞いた。かの国にはお遍路さんなるものがあって、弘法大師空海の修行した跡をたどりながらお寺を詣って回ると功徳があるという。悩みなんかも癒やされるという。

3.

「わたしも、結婚して子供が出来るまでＯＬしてたことがあるから、何となく奈実ちゃんの気持ちもわかるわあ」
「ええ？」
「だって、大学の狭い世界から急に社会という広い世界に飛び出したのよ。仕事の出来る優秀な先輩がいたら魅力的に見えるし、その人から交際を申し込まれたら舞い上がってしまったりもするじゃない？」
「おばさんも、社内結婚だったんですか？」
「うーん、近いかも。取引先企業の営業マンだったの。その当時は格好よく見えたわ」
「その当時はって.....あはは」
「そうよね。結婚して二十年も経つと、一杯あらも見えて来るわよ」

　わたしは自動車のテールランプの光が流れていく真っ暗な高速道路の光景を見つめていた。奈実は多分、わたしの元には戻ってこないだろう。それに実験だって、多分、うまく行かないに違いない。秋には先生から研究テーマの変更を迫られるだろう。そう考えながらうとうとし、日付が変わる頃には浅い眠りに落ちていた。まさに煩悩だらけの身の上だった。

　次の朝六時に鳴門海峡を通過したバスは定刻通りに六時四十分、徳島バスターミナルに着いた。先に降りるわたしにおばちゃんは声を掛けてくれた。
「じゃあ、頑張るのよ。お遍路さん。お遍路さんは決して一人じゃないんだからね」
「え？」
「ほら、金剛杖にも同行二人《どうぎょうにん》と書いてあるでしょう。いつも御大師様と一緒という意味よ。頑張りなさいよ」
「はい」
　わたしはおばちゃんと別れた後、バスターミナルの中でザックにしまってあった白衣に着替え、第一番札所「霊山寺《りょうぜんじ》」に向かって歩き始めた。

　道に迷うことはなかった。

　有名な順路であり、あちこちに案内の看板も出ている上に他のお遍路さんも大勢と言うほどではないにしても、やはりいて、その後ろを歩いていくことで目的地に近づくことが出来た。
　暑い暑い日中の道路。額からは汗が吹き出し、顎を伝って地面に落ちた。
　そんな中、ひとりのお遍路さんが道の脇にうずくまっていた。女性の様だった。
「どうしました？」
　わたしが声をかけると、彼女は顔を上げこちらを見た。よほど困っていたみたいで涙目になっていた。年はわたしと同じくらいだろうか。見ると履いているスニーカーの底が剥がれて歩けなくなっていた。
「見ましょう。貸してください」
　彼女は片方のスニーカーを脱いで差し出した。

4.

　近くには「お接待」と呼ばれる家々があった。お遍路さんたちに施すことで自らにも功徳があるとされ、お茶やお菓子や果物を配っていて軒先を借りることも出来た。そこでわたしはザックの中から接着剤とテープを取り出した。剥がれた底のゴムに接着剤を塗り込みテープで周りを五周ほど巻き付けた。

「半日から一日で接着剤が固まると思います。それまではテープで持ちこたえてくださいね」
「ありがとうございます！　本当に困っていたんです。まさか旅先でこんなことになるなんて！　ありがとうございます！」
　と、彼女は何度もお辞儀した。「でも、どうしてあんな物を持ち歩いているんですか？」と、不思議そうな目でわたしを見た。修理した靴の具合をとんとんと確かめながら。

「大学の研究室で接着剤の研究をしているんです。本当は材料力学が専門なんですけど」
「へぇ。わたしも材力専攻なんです」
　聞けば、他の大学の院生らしかった。
　そして、研究に行き詰まり、同時に失恋も味わったと彼女は自己紹介した。わたしたちは意気投合して三十分ほど話し込んだ。

「データがおかしいのは接着剤の厚みを考慮していないせいだと思いますよ」
　と、彼女はずばり指摘した。
　傍目八目《おかめはちもく》と言った感じだろうか。本人にはわからなくても、他から見るとわかることって割合とあるものだ。
　わたしも彼女の研究内容について悩みを聞き、それに対して二つ三つ指摘した。彼女と話すことは新鮮であり楽しかった。それにこれからの行き先も一緒だ。

「やっぱり指導教官の先生に断りを入れないなんてやばいと思いますよ」
　と、彼女は言った。

「そうですね。後で電話しておきます。あなたは八十八箇所全部回るのですか？」
　わたしが聞くと彼女は吹き出した。
「無理ですよぉ。いくら理解のある先生でもそんなに長いこと休みなんか取れません！」

　そして彼女とは一週間ほど行動を共にした。
　研究室に戻ってからも困ったときには彼女に意見を求め、彼女もわたしに意見を求めてきた。恋愛感情よりひとつ上の感覚なのだろうか。互いに対するリスペクトからなる友情みたいな感覚だった。もし「運命の人」がいるとしたら、こんなのを言うのかも知れない。今までの逆境は全てこのためにあったのだろうか。そう思えるようになり、わたしは目先の幸せに惑わされることもなくなった。了

薬剤に漬けられた小指の標本

1.

　そのおじいさんが目の前の座席についたのはどの駅からだったか？
　奇妙な薬剤の入った茶色のポリタンクを持つという目立つ格好なのに、なぜかわたしの記憶からは欠落していた。

　わたしは姫路駅から１７時ちょうどの新快速電車に乗った。
　神戸・大阪・京都を最速で結ぶ関西の基幹の交通機関だった。
　途中の駅にはほとんど停まらない。なので早いのだ。最高速度こそ新幹線よりわずかに劣るものの、１５分間隔で運行されているため極めて利便性の高い路線だった。

　この日、北陸地方へ向かう仕事があり大阪駅で特急サンダーバードに乗り換えた。担当していた工事が長い期間に及んでいたため、もう何度もこの列車に乗って現地に赴いていた。もはや慣れた通勤列車も同然だった。
　しかし、特急列車には特急列車独特の雰囲気がある。

　一番の違いはお弁当とビールだ。
　通勤電車ではどんなに空いていても、お弁当など食べたことがないし、ましてやビールを飲んでうたた寝することもない。これは特急列車と言う特殊な空間だけがなせるわざだろう。わたしは荷物を抱えて、指定席に着くと落ち着いて荷物を広げ始めた。駅の売店で買ったお弁当を出してその横にビールの缶を置き、そして雑誌を取り出した。
　金沢駅まで３時間弱ほどの旅路だった。

　次の新大阪駅で大きな荷物を抱えたおじいさんが乗ってきた。目つきが鋭く、一瞬わたしはその筋の人かと思ったほどだった。おじいさんは、わたしに対して丁寧に荷物を足下に置いてよいか断ってそれを置いた。網棚には上げたくない事情があるみたいだった。なにやら、液体の入った容器が入っているようで、揺れるとちゃぽん、ちゃぽんと音がした。そのたびにおじいさんは、にやりとこちらを向いて笑った。しばらくは、無口なまますごし、わたしは雑誌に集中していた。

　やがて、車内販売が通りかかった。
　おじいさんは販売員を呼び止めてお酒のワンパックを１つと、おつまみを買った。
　わたしに「失礼」とだけ言ってパックを開けちびちびとお酒を飲み始めた。半分くらい飲むと老人の顔が赤くなり、気分がよくなったのだろうか、わたしに話しかけてきた。

「あんたは何をしてる人なんだい？」
「わたしですか？　　プラント・エンジニアです。これから北陸地方の工事現場に行って、ボイラーの調整運転をするんです」
　おじいさんは不思議そうな顔をした。
「ああ、ボイラーね。調節弁の設定とかするのか？」
「ええ。よくご存じですね。現在ではほとんどのボイラープラントは運転を自動化しているのですよ。特に燃料に点火するときが一番難しいのです。何年かに一度くらい爆発しては死人が出ているでしょう。重油も石炭も簡単には点火出来ないんです」
「ほう？」
　おじいさんはこの仕事に興味を持ったようだった。わたしもおじいさんにこの荷物のことと仕事について聞いた。

「外科の医者だ。無資格だがな」
　おじいさんはそう答えた。わたしはますます興味を持った。無資格の外科医なんてまるで漫画の主人公の様だからだ。しかし、そんなことが可能なのだろうか。おじいさんの言い分では資格より腕前の世界なのだそうだった。

「軍隊にいた頃、衛生兵をしていたんだ」
　と、そんなことを言った。
　――軍隊？　　いつの戦争のときだろう？　　わたしは太平洋戦争に従事していたと言う意味だと取ったが、もう、戦争が終わって７８年にもなる。当時何歳だったのかは知らないが、何にせよ、言葉通りならおじいさんの年齢が若すぎるのではないかと思った。どう見ても６０代後半か７０代前半にしか見えなかった。

「ときどき機械工場で指をなくす人がいただろう？」
「ええ、今でもときどき事故がありますね」
　研削盤で砥石が割れて指をとばしたり、ボール盤で掌ごと巻き込まれたりと言った事故は、現在では減って来てはいるものの、やはり、たまには起こっていた。

　おじいさんの話では、そんなひとの指や腕を元に戻す仕事をしていると言った。

やはり、日常生活でも差し支えがあるし、その筋のひとと勘違いされても具合が悪い。そんなひとから需要があると言う。わたしは興味が湧くと共に、疑問にも思った。

「そんなことが可能なんですか？」

おじいさんは切断された指が残っていれば、荷物の中に入っているこの薬剤につけて、凍らないぎりぎりの温度で冷蔵しておけば将来、移植することが可能だと言った。保存液のようなものだそうだった。この薬剤について聞いたが、世界でも南アジアの一部でしか採れない薬草から抽出した液と複数のアミノ酸を反応・混合させたものだとしか教えてくれなかった。もちろん、厚生労働省の認可など受けていない。謎の代物だった。

だが、移植しても神経が痛んでいたりすると、せっかく付けてもうまく動かすことが出来ないという。うまく切るには、骨に傷を付けずに、神経も傷つけず、骨と骨の間の軟骨の中間を切るのが理想的と言った。だが、本職の解剖医でもなければそんなことは不可能で、ほとんどは何らかの障害が残ると言った。

2.

　おじいさんは買ったお酒を飲み干すと、段々と饒舌《じょうぜつ》になってきた。
「おじいさん。大丈夫ですか？」
「ああ。酔っちゃおらんよ」
　確かに、饒舌な割にその怪しげな仕事と薬剤のことに関しては一切口にはしなかった。本当に酔ってはいないのかも知れない。おじいさんは隣に座るわたしの左手に目をやった。

「お前さんも左手の小指と薬指の一部が欠けているな」
　と、おじいさんは言った。確かに若い頃、機械操作のミスで小指と薬指の第二関節から先を失っていた。だが、欠けた指は粉砕されてもはやこの世にはない。

「ふうん。確かに利き腕ではないにせよ、日常生活には困ることはないのか？」
「結婚指輪が出来ないのが、唯一の困りごとです」
　実際、妻もわたしのことを気遣って自分も結婚指輪を嵌めていなかった。
「余ったのでよければ、付けてあげようか」
「え？」

　わたしはその申し出に戸惑った。確かに今の状態より見てくれは、格段によくなるが、元々誰のものだったか分からない指である。第一余った指とは何のことなのか。それが気になった。聞いてみると、大けがで体の一部を失い、後で付け直すつもりで保存したが、それまでに命を失ってしまったかで引き取り手のないものだという。

「それに、臓器移植だったら誰も前の持ち主など気にするやつはおらんだろう？　　誰から誰に移植したのかはコーディネーターだけの秘密で患者にも提供者の家族にも知らされることはない」
「確かにそうですが.....」
「わしのクリニックは小浜《おばま》にあるんだ。一度寄ってみないか？」

おじいさんの謎のクリニックは奇しくもわたしの目的地の途中にあった。今日は金沢で泊まり、明日の朝一番で工事の現場に行く予定だったから、途中下車して少しくらい到着が遅れても差し支えないだろうと思ったのだ。それにおじいさんの仕事にも興味があった。そして小浜駅でおじいさんと共に列車を降りた。

クリニックは町外れの海の近くの丘の上にあった。おじいさんは先に立って扉の鍵を開けた。中には大きな冷蔵庫と、大がかりな診察設備があった。普通の外科医院より数段上の設備だった。

「この設備はどこから購入したんですか？」
「全部自分で作って組み立てたんだ。４０年かかったがな」
そう言って、おじいさんは大阪で買ってきたというあの薬剤を冷蔵庫に付いている金属製タンクに注ぎ込んだ。
「これが切れたら保存できなくなるからな」
おじいさんは冷蔵庫を開け、茶色のビンを二つ取り出した。薬指の先端と小指だった。わたしは驚いてそのビンを見た。いつのものか分からないが、薬剤の中でゆらゆらと、持ち主が来るのを待っていたかのようだった。

「お前さんどうするかね？　今だったら二十万円でつけてあげるよ」
わたしは、自分の指の再生と言うよりこのおじいさんの秘密の医療行為自体に興味があった。それに、二十万円くらいなら指の代価としては破格の値段だ。しかし、手術の内容が内容なだけに若干ためらいの気持ちがなかったと言えば嘘になる。と言おうか、実際には不安の方が遙かに大きかった。

おじいさんの指示で、わたしは左腕に麻酔を掛けられ、診療台の上に固定された。おじいさんは小さなメスを持ち、わたしの薬指に切れ目を入れ、ピンセットで、血管と神経の端を外に引っ張り出した。そうして置いてビンから取りだした薬指を同じように処理し、わたしの身体に接合し、皮膚を器用に縫い合わせた。わたしの薬指はまるであつらえたかの様にぴたりと合い、事故に遭う前の状態に戻った。驚くわたしを尻目に、次は小指の作業に入った。同じように、神経と血管を接合し、皮膚を縫い合わせる。わずか三十分の間にわたしの左手は完璧なものになった。抗生物質だと言って薬をくれたのでわたしは何の疑いも抱かずにそれを飲んだ。

3.

「あの、おじいさんはどうしてこういう仕事を始められたんですか？」
「まあ、来てごらん」
　おじいさんは手招きしてわたしを更に奥にある冷蔵庫に導いた。その中にはさっきの茶色のビンより更に大きい容器が置いてあった。
「こ、これは何が入っているんですか？」
「臓器だよ」
「ぞ、臓器？」
「そう、身体の部品だ」
　おじいさんの話では、肝臓や腎臓、肺、脳、あらゆる臓器を保存していると言う。
「何のためにそんなものを？」
「じゃあ、臓器移植は何のために行うのかな？」
「ええ？　　じゃあ、おじいさんは臓器移植もしているんですか？」
　わたしも肝臓の半分を切り取って薬剤に漬けて保存しておけば、将来、肝硬変や肝臓癌になったとき、自分の肝臓をそのまま移植できると言い出した。もうここまでくると半信半疑だった。

「あの、おじいさんは何のためにこんなことをしているんですか？」
「哲学的な質問かね？」
「いえ、素朴な質問です。例えばご家族を移植が出来ないために失ったとかですか？」
　おじいさんは目をつぶってしばらく考えこんだ。
「戦友をな.....目の前で失ったんだ。同じ村の出身でずっと助け合ってきた。そして戦争が終わって内地に引き上げたら一緒に仕事をしないかと誘ってくれたんだ。だが、その前に敵の爆弾でやられてしまった」
　わたしはそのとき、おじいさんの年齢を推察した、戦争に行ったにしては若すぎる。
「あの、いつの戦争ですか？」
「ふふ、わしが若すぎると思っているんだろう」
「はい」
「あの身体の部品を見ても気付かなかったかい？」

　わたしは、まさかと思った。あの身体の部品をとっかえひっかえしながら、生き延びてきたとでも言うのだろうか、だが、目の当たりにした事実からは十分可能だった。

「すみません。戦争に行ったと言うのは分かりました。それで、ご戦友の方は戦死されたのですか？」
「爆弾のために、わしの目の前でバラバラになった。だが、わしは必ず故郷の土を踏ませてやると約束して、あいつのバラバラになった肉片をかき集め、当時、入手できた最低限の成分の薬剤につけて、内地に持ち帰ったのだ。だが、臓器のいくつかは足りなかった」
「そうだったんですか？　それで菩提を弔うためにこういうことを始められたんですね」
「菩提を弔うためじゃないさ。足りない臓器は心臓と眼球だけだったんだ」
「え？」
「そう。まだあきらめちゃいない」
　わたしはいやな予感がした。意識が段々ともうろうとしてきた。
「悪いな。麻酔が効いてきたようだ。ここを見せたのはせめてもの償いだ」

　遠のく意識の中でおじいさんの声がした。

4.

　気がついたとき、わたしはすでに天国にいることを覚悟していた。
　しかし、わたしの体は研究室の手術台の上に固定されたときのままで、何ら変なことをされた形跡はなかった。では一体何をされたのか？　疑問だけが募った。おじいさんはわたしの体のパーツを取るだけのために、ここにおびき寄せたのではなかったのか？

「あんた.....佐々木勝正と言う人はご存じか？」
「え？」
「知っているかと尋ねている」
　おじいさんはわたしの免許証を手にして、名前と住所の部分を指先で押さえた。
「あ、ああ。わたしの祖父の名前です」
「ああ、やっぱり」
　おじいさんはほっとしたような口調でため息をついた。
「あの？　おじいさんは祖父とどんな関係があるんです？」
　おじいさんはこちらに背を向け、戸棚からアルバムを引き抜きページを繰った。そして集合写真をわたしの目の前に示した。軍人たちばかりが写った記念撮影みたいなものだった。わたしも祖父の思い出写真の中から見た覚えがあった。

「佐々木小隊長には何度も命を助けられた.....」
「ええ！　では、祖父とは？」
「同じ部隊にいた。小隊長の突撃命令と退却命令はいつも的確だった。あの日も.....」
「それでわたしの心臓と眼球が助かった訳ですか？」
「小隊長がいなければわたしは生きて祖国には戻れなかった。恩人のお孫さんを犠牲になど出来なかった」

　そしてわたしは解放され、本来の仕事へと向かった。

　後から、そのおじいさんのことを確かめようと、記憶をたどってそのクリニックへ行こうとしたが不思議なことにそれっきり、二度と同じ場所にはたどり着けなかった。あ

のときの記憶は鮮明にわたしの脳裏に刻み込まれていたのにである。あれは夢だったのだろうか。いや、そんなはずはない。左手の指は全部そろっていた。手術を受けたのは事実だった。

ちゃぽん、ちゃぽんという薬剤の音とそこに浮かぶ人間の臓器。
そんなことを思い出しながら小浜駅に向かった。了

妖怪奇譚《ようかいきたん》

1．妖怪画

平成時代になって間なしの、とある夏頃。
わたしはその当時ある種の妖怪に取り憑かれているような感じだった。

いや、実際にはもっと前からだったかも知れない。
何をしてもうまく行かず、なすことやること全てが空回りし、いや、それ以上に裏目に出ることさえ多かった。一生懸命に仕事に打ち込んだかと思えば、その数ヶ月後には身体を壊して休職し、やがて自主退職すると云った具合に全く社会の歯車と自分の努力とが噛み合っていなかった。

一年前から再び定職に就いてはいたが、あらゆる障害が降りかかり中々流れに乗れないとでも云おうか、しかも病欠が多く収入は少なかった。そうは言っても食って行かなくてはならない。そのため、それを補うべく自宅でできる内職を考えた。この夏のことだ。

わたしには特段、優れた能力はなかったのだが、先日から何となく始めた水彩画が妙に自分に合っていた。別に今までそういう修行をしたことは一切ない。あえて云うなら中学、高校の美術の時間に少しだけ習った程度のものである。それがやってみると意外と好評で応募したビジュアル系雑誌のイラストに採用してもらえるようになったのだ。

画風はというと.....最初に雑誌社が募集していたポップなものではなかった。深夜にわたしが描く絵はグロテスクで子供が見たら泣き出しそうだと担当者から評された。それでも採用されたのは相手にも何か感じさせるものがあったのだろうか。今となっては定かではなかった。

――可愛く描けているな。自分ではそう感じることもあったほどだ。

とにかく毎晩、夜中の三時までわたしは絵を描き続けた。

「山田先生の絵は妖怪画ですね」
　と、雑誌の編集担当者は言った。
「静物画のつもりなんですけどね」
「いやいや.....ただの絵ではないと思いますよ。独特の画風を確立していらっしゃる。こんなことを言うとわたしの知識不足をさらけ出すようですが、同じ画風の絵師さんを見たことがありませんよ」

　わたしはどこをどう見たらこれが妖怪に見えるのか不思議に思った。ただの猫の赤ちゃんがグロテスクな妖怪に変貌していく。その過程がわたしの中の.....脳みそから筆を持つ指先までの間のどこかの器官で行われているらしく、無意識のうちにどんどん作風はグロテスクに染まっていった。

　ただ一つ言えるのは、本来の仕事の終わる夕方六時から夜中の三時まで絵を描き続けているにもかかわらず、暮らし向きがまったくよくならないことだった。別に原稿料が安いわけではなかったし、高価な画材を使っているわけでもなかった。ただし入った収入はみなその絵に絡んだ事象に消えていくのである。猫を描いたら、野良猫のえさ代に余計な出費がかさんだり、花瓶に生ける花を描いたら、普段買ったことのない花屋で、送り先のない花束を買わされたりと云った具合である。

2. 貧乏神

深夜３時。わたしは描き上げた猫の絵を見つめて、ため息をついていた。

確かに「妖怪」かも知れない。そんな気がした。特にデフォルメとかした訳でもないのに。ただ、昼間に公園で見かけた可愛い猫を描いただけのつもりだった。しかし、わたしの記憶を司る脳みそから筆を持つ指先へとたどるうちに、「どこか」でそれを妖怪の姿にならしめていたのだ。

――お前さん、ひょっとして貧乏神なのかい？

わたしは絵に描いた「妖怪」に問いかけた。

そのとき絵の中の妖怪の目がぎょろりと動きこちらを見た。わたしは背筋に冷たいものを感じ思わず後ずさりした。二歩、三歩下がるまでもなく、背中はすぐに安っぽいベニヤ板で出来た壁にぶつかった。これ以上の逃げ場はなかった。わたしは描いた紙をくるくると巻き、紐でくくって筒に入れ、神社でもらった家内安全のお札を糊で貼り付けた。

――これはただごとではないぞ。

もはや、貧乏神に取り憑かれていることは確実だった。貧乏を楽しむだけならいい。その上、生命まで取られることがあっては大変なことになる。そう思ったのだ。

翌日、いの一番でタウンページで探し当てた高名な祈祷師の先生に電話をしてその絵を持ち出かけた。住所は確かにうちと駅の間にある地名だった。しかし、行こうとしてもよくわからない場所であった。路地を右に曲がり、左に曲がり、また脇道へと進む。電話で道案内してもらいながら何とかたどり着いた。

繁盛しているのかいないのか、よくわからない事務所だった。粗末な建屋で表のアルミ製の引き戸の前に暖簾《のれん》がかかっていた。高浜易断という名前がそうみたいだった。わたしは恐る恐る中をのぞくと祈祷師の先生が座ってテレビを見ていた。声をかけるとこちらを向き「連絡のあった人ですかな？」と言い、わたしに座るよう勧めてくれた。

　わたしは座るや否や、祈祷師の先生に絵のことを、そして、ここ何年かの困窮生活のことを訴えるかのような勢いで説明した。

「ふうむ」
　祈祷師の先生は絵を見ながらため息をついた。「この絵は、あなたの願望をそのまま表したものですぞ。わかりますかな？」
「いいえ。……絵は好きですが、貧乏神は嫌いなんです」
「あなたの深層心理はそうは思っていないようです。貧乏を心から愛しておられる。いっそこのまま絵を描き続けてはどうですかな？」

　ぶるぶるぶるとわたしは首を横に振った。とんでもない話だった。絵を描いているのは少しでも貧乏から逃れるためであり、絵を描くことで貧乏になるのなら本末転倒もいいところだった。が、貧乏神に取り憑かれているわけではなく、自分の深層心理の表れであるなら、そう恐れることもなさそうであり、少し安心した。

　そのとき絵の中の貧乏神の姿が変わった。まるで手を合わせるように懇願していた。
「あなたは、わたし自身なのです。あなたから、わたしが離れたらこれまで通り絵を描くことが出来なくなります」
　と絵の中の貧乏神は告げた。
「え？」
　わたしは祈祷師の先生の顔を見た。
「山田さん。ですから、あなたに取り憑いているのではなく、あなた自身が貧乏神様の一部なのですよ。このまま絵を描きなされ」

　そんなお告げを聞いて、わたしはとぼとぼと絵を入れた筒を持ち家路に着いていた。今日も一日会社を休んでしまったし、一体何をしているのだろうと疑問に思った。そして、絵の中の貧乏神に少し同情心が沸いてきた。

　わたしは一晩中葛藤した。
　このまま貧乏を取るか、絵を取るかの選択だった。
　一晩悩んで、わたしは生き甲斐となった絵を取ることにした。
　結果がどうなるのかは、深くは考えられなかった。

3. 絵師

　その日から入れ替わり立ち替わり、色んな妖怪がわたしの前に現れては消えた。妖怪百科なる俗な書物に登場するような有名な妖怪もいれば、名も知れぬ奇っ怪な姿をしたものもいた。ただ、いずれの妖怪もわたしに害を及ぼそうというものはなく、出自を問うたときに、全てわたしの中から生まれ出《い》でたるものと告げた。

「おいおい、いい加減にしてくれよ。俺の頭の中は妖怪だらけっていうのかい？」
　わたしは誰にともなくつぶやいた。
「お呼びですかい？」

　絵の具と絵皿の間からもやもやと霧が立ち上り、隙間からこの間の貧乏神が姿を現した。どうやら、これが、この妖怪たちの親玉らしかった。

「別に呼んではいないさ。でもお前さんたち、いつも俺の頭の中にいるのかい？」
　わたしは疑問を投げかけた。
「あの祈祷師の先生の仰るとおりですよ。私どもはあなたの意識の中から生み出された存在なのです。絵を描き続ける限り存在し続けます」
「では、俺が筆を折ったり、あるいは、.....寿命が来てぽっくり逝ったらどうなるんだい」
「そのときには、別の宿主を捜します。妖怪を書き続ける人はいつの時代もどこかにいるのです。その人のお力を借りる次第ですよ」

　わたしは腕を頭の後ろに組んで身体をのけぞらせた。妖怪どもに囲まれて肩が凝って仕方がなかった。思いっきり背をそらすと胸骨がぽきぽきと音を立てて気持ちがよかった。妖怪たちの相手をするのには慣れてきた。これはこれで代え難い体験であるし、これといって健康的被害はないということになっているから放置しても問題ないどころか、絵を描く上で味方になる存在なのだ。

　ただ、問題はわたしの暮らし向きだ。

　今の職場はときどき、執筆がたたって体調を崩し、一月に一、二回は休んでいる。そろそろ上司から引導を渡される可能性があった。それに給料は欠勤がある分ひどく安くなっていた。絵でそれを穴埋めするはずが、貧乏神のおかげで絵に関しては完全に赤字である。プラスになるのは生き甲斐としての絵画という意味においてのみであった。

「貧乏神さんよ。俺の生活は何とかならないか？」
「そう言われましても、取り憑いた人を貧乏にするのが私どもの仕事ですから」
　貧乏神は殊勝な表情で返事した。

　そんなある日、わたしは上司に呼ばれた。

4. 大不況

「山田君。今の会社の業績が厳しいことはよく知っているね。そこで整理解雇の話が出てきている。正式には労働組合との折衝後ということになるが、君の仕事ぶりを見ていると真剣さが足りないねえ。自分でもわかるだろう？　覚悟しておいてくれたまえ」

がびーんとわたしは思った。ついに来た。前々から覚悟はしていたが、こんなに早く来るとは思わなかった。

その夜わたしは貧乏神に相談した。
これこれこういう事情でまたもや会社をクビになってしまいそうだ。何とかならないだろうかと。

「あなたの気持ちはよくわかります。でも私どもに出来ることは他人を貧乏にすることだけで、あなたに幸運をもたらすことは出来ないのです」
「それは知っているよ。ただ.....うちの会社のライバル社の社長にしばらく取り憑くことは出来ないだろうか？」

我ながら悪魔のような手段だと思った。

「それには、あなたの絵が必要です。社長の絵を描くか、わたしの絵を社長のオフィスに飾らさせるかして下さい。そうすれば効力を発揮できます」

いすれにせよ大した問題ではない。わたしは貧乏神の絵を、例のビジュアル系雑誌の紹介で寄贈させてもらった。元の会社の名前は出さずにである。そして、記者がその絵と一緒に写る社長の姿を写真に収めた。

しばらくして、その会社の業績は悪化の一途をたどり、あっという間に倒産してしまった。その会社の受注していた仕事はそっくりそのまま、我が社へと引き継がれ、当面の業績は向上することとなった。そのお陰でわたしの解雇はなくなった。

でもこのことで貧乏神が絵師だけのものではなく、社会一般に広がるきっかけになったみたいだった。何せ「貧乏神の絵」ということでテレビにも紹介され、あっという間に多くのひとの耳目を集めたのだ。もう、見たことがないひとがいない。そんなほどだった。

結果的にパンドラの箱を開けて悪魔を世の中に解き放ったと云うべき出来事であった。

見事なまでに、見たひと、描かれたひとが皆、貧乏になり落ちぶれて行くのだ。

世間では「不況・不景気・不渡り・倒産」と呼ばれる言葉が一躍沸騰ワードと化して行った。あちこちの会社が経営破綻し、そして、失業者で町があふれかえる事態を引き起こしていた。

それはそれで問題だった。まるで、世の中の諸悪の根源がわたしのせいみたいだった。

まあ、それとて、わたしとしては貧乏な仲間が増える程度の被害でしかなかったが。

空白の３０年。わたしのせいだったのだろうか？

そして、今年も暑い夏が終わった。了

暗号機と三百枚の小判

1. 祖父の暗号機

遺産にはときとして思わぬものが紛れ込むことがあった。

祖父がミカン箱くらいの大きさの荷物を運び込んだのは、冷たい雪の降る二月の日曜日だった。僕は祖父がこっそりと部屋に運び込む現場を目撃して後をついていった。祖父は僕が見ていることに気づいていたが、それを気に留める風でもなく、僕に手招きした。

部屋の中は祖父が若いときから買い集めているアンティークで一杯だった。古びた木製のテーブルの上に置かれたさっきの箱から中身を出すのを手伝わされた。僕が触った感触ではきれいな木箱に入った何かの機械のように思えた。重さは１０キロよりわずかに上回るだろうか。

「これ、なんなの？」
「開けてごらん」

祖父は白い手袋を僕に渡し触らせてくれた。ぎぎっと錆びた金具の音がして上蓋を開けると中にはアルファベットが記入されたタイプライターのようなキーボードが並んでいた。祖父は嬉しそうにこれが普通のタイプライターではないことを説明し始めた。

まず、キーの奥に同じ並びになっているランプがあり、キーを押すと点滅すること、そして、さらにその奥にはダイヤルがついていて、キーと点滅するランプのつながりを不規則にしてしまう暗号機になっていると説明してくれた。

「どうしてこんなものを買ったの？」

僕は家族が祖父の趣味に関してあまり理解を示していないことに薄々感づいていた。父たちが見たら「また変なものを買ってきて！」と、いやな顔をするに違いない。しかし、祖父は僕の質問の意味を取り違えた。

「これは第二次世界大戦のときに使われた暗号機で今では貴重なものなんだよ。エニグマ暗号機と言ってね。ドイツ軍が通信に使っていたものなのだよ。こんな程度のいい品物は滅多に出てこない。本当にいい買い物だったなあ」

そう言って新品の乾電池をセットしてスイッチを入れてキーを叩いた。押したボタンとは違う文字のランプが点灯した。そしてその瞬間、電磁石の音がしてダイヤルの一つがガチャリと音を立ててまわった。ダイヤルの中には電気接点が入っていて、これらが回ることで配線を組み替えて複雑な暗号を作り出すらしかった。

これがある限り通信の秘密は完璧に守られる。

しかし、長い戦争の間にやはり解読されてしまうという悲劇が待っていた。と、祖父は歴史の話を熱心な口調で僕に説明した。こうして祖父のアンティークコレクションがまた一つ増えた。

祖父の部屋に山積みされたアンティークが再び日の目を見たのは僕が中学三年生になった年の春だった。祖父が亡くなってから三ヶ月が経ち、残されたアンティークはほとんどが処分されてしまい、そのうち何点かは歴史的価値を買われてアンティークショップに引き取られていった。父たちは「ゴミ」と呼んでいたので多分、ものすごく安値で手放したのだろう。

僕はこれらのアンティークたちに祖父の愛着がこもっていると知っているだけに、ゴミみたいな扱いで引き取られていく姿が悲しかった。

「おいおい。これは大変だ！」

父の素っ頓狂な叫び声で騒ぎは始まった。

祖父のアンティークの目録がご丁寧にも封筒に入った形で見つかり、その中に誰の目にも値打ちがわかるもの、すなわち小判があったのだ。実際の目録には「慶長小判、傷なし」とか細かい項目が書かれていたが、アンティークには素人な父たちは小判とあるだけで大騒ぎとなった。なんと三百枚もあることがわかったのだ。財産分与に際して初めて出てきた財産らしい財産であった。

2. 小判のありか

しばらくして、我が家に叔父と叔母がやってきた。
父と祖父の財産分与についての話し合いのようだった。
「兄さん。小判三百枚だって？　すごいじゃないか。父さんも少しはいいことをしてくれていたんだなあ。兄弟三人で割り切れるかなあ？」
「何言うのよ。一枚ずつの値打ちが違うんでしょう？　換金してから分割すればいいわ」
そんな好き勝手なことを言っていた。
「でもさあ。部屋のゴミを全部処分したんだけど、小判なんかどこにもなかったんだよ」
「どこかに預けていたのかしら？　兄さん、遺言書は残ってなかったの？」
「さあ？　保険とか証券類は分けて封筒に入っていたからそれ以上は探さなかったんだよな。もしかしたら何かあったかも知れない」

父がそう言って、祖父の書類入れを引っかき回すと小さな封筒が出てきた。皆固唾をのんで出てくる紙切れを待った。出てきた紙には、定規を当てて書いたと思われる几帳面な字のアルファベットが並んでいた。

「ローマ字？」と叔母。
「いや、ローマ字にはなっていないよ。何語で書いたのだろう？」
父は叔父にそれを見せた。
「さあ、暗号じゃないかなあ。逆から読んでいくと文章になるとか、特定の文字、例えば『X』を抜くとローマ字になるとか。何か手懸かりはないのかい？」

思いつくままに皆がそれぞれのアイディアを述べた。何せ小判三百枚の行方がかかっているのだ。しかし、何をどう並べ替えたって読める文章にはならなかった。

僕は何年か前に祖父が大事そうに買ってきた暗号機を思い浮かべた。元のローマ字を一字打つと別の文字に変換され、電気接点の入ったダイヤルががちゃりとまわり、また次の文字が全然別の文字に変換される。どう考えてもあの暗号機がないことには解読しようがなかった。

　父や叔父さんたちが散々知恵を絞り尽くしたところで、僕は祖父の暗号機の話を持ち出した。
「ええ、暗号機かい？」
「暗号だと言うのなら解読できる可能性があるんじゃないかなあ？」
「昔の日本軍やドイツ軍の暗号も解読されてたんだろう？　　解読できるよ。きっと」

　そんな楽観的な意見を述べた。
「その暗号機はどうなったんだい？　　兄さん」
「さあ？　　祖父のアンティークは全部まとめて引き取ってもらったからなあ」

　僕は父たちが祖父の残したものを安易に捨てるような処分をしてしまったことが悲しかったし、あの暗号機にも本当はすごい価値があることを知っていた。そして、父たちは小判の行方にしか興味がなかったのだ。
「暗号機はもっと複雑だったよ」
　僕は暗号機の動作するさまを説明した。
　電気接点の組み替えで入れた文字が完全に入れ替えられること、そして、ボタンを押すごとに接点が収められたダイヤルが回転して完全に組み替えられること。そう主張すると、祖父の暗号書がさっぱりわからないことに根を上げていたのだろう。父がアンティークの売却先をショップに問い合わせてみることになった。
　叔母さんは、クロスワードパズルの得意な従兄弟に一度チャレンジさせてみるといい、暗号書のコピーを取り持って帰った。

3. 解読

アンティークショップから連絡があったのはそれから一週間ほどした頃だった。あの暗号機は実際にものすごく値打ちがあったものらしく買い手はすぐにつき、現在は東京のコレクターの所有物になっていて、その人は二度と手放す意思はないらしかった。

「困ったなあ、少しだけでも借りられませんか？」
電話口で父は店主にそう頼み込んだ。
アンティークショップの店主と祖父とは長いつきあいでもあり、新しい持ち主に頼んでくれることになった。先方は手で直接触らないことを条件に一日だけ貸してくれることとなった。精密機器扱いで送られてきた暗号機の使い方を少しだけ知っている僕に操作する出番がまわってきた。

数年ぶりに見る木箱は、あのときと少しも変わっていなかった。
僕が白い手袋をはめた手で上蓋を開けると中からアルファベットの並んだキーボードが現れた。
「何だよ。ただのタイプライターじゃないか」
隣で父がため息をついた。でもただのタイプライターではなかった。僕は祖父のやっていた通りの手順でスイッチを入れて操作しようとした。暗号書の通りにキーボードを叩けば元の文章をランプで点滅して示してくれるはずだった。

しかし結果は出鱈目だった。何の意味もないアルファベットの羅列がさらに何の意味もなさない羅列に変換されただけだった。

「なんだよ、頼りにならないな」
父はまたもため息をついた。
「使い方が間違っているのではないか」
と叔父は言い出した。叔母はなおも自分の息子が解読する方にかけていたようだった。

ふと、僕は祖父がキーボードの上の方についているダイヤルを回していたことを思い出した。そして箱の手前にある電気プラグも差し替えていたのだ。これらの組み合わせによって暗号が何通りにも作り出されるのだ。だから、この暗号を作ったときと同じ組み合わせにしないと元の文章が再現できないと父に説明した。

再び、祖父の書類箱の探索が始まった。どこかに、暗号解読のためのメモがないかと思ったのだ。でも、今度はアルファベット三文字とプラグ配線三本をあらわすメモということがわかっていたので割合と簡単に見つけることができた。最初は小判に気を取られ、みんながゴミと思っていた紙くずの中にあったのだ。目録とは別のメモの中にあった。

僕はメモを元にダイアルを回し、プラグを差し替えてセットした。
その後に暗号通りにキーを叩くとランプが光った。それらを紙に写してみると今度は普通のローマ字が再現された。

――わたしのアンティークは大事に残してください。小判が三百枚ありますが台所の床下の壺に入れて埋めてあります。三人で仲良くわけること。

そんな遺言が書いてあった。アンティークを残すことという遺志は残念ながら果たされなかったが、小判の方は図らずも手つかずだったからみんなの目に生気が戻った。

「早速掘り出そうぜ」
「駄目よ。お母さんも台所を使っているのだから」
「そうだな。この暗号機も返さなくちゃならないし、埋蔵金の発掘は来週の日曜日だな」
三人はそう相談して発掘は次週の日曜日に持ち越した。
役目を終えた暗号機は先方がわざわざ取りに来てくれた。やはりよほどの貴重品らしく他人任せの運搬にはできないらしかった。

「いやあ。お役に立ちましたか？　何をしたのかは知りませんが」
「ええ、父が暗号の遺書を残していたものですから。これを貸していただいたお陰で何とか解読できました」
「そうですか。この暗号機は歴史的にも……」
彼はこの暗号機の価値をまた説明し始めた。興味のない人には猫に小判だと思ったが、僕は余計なことは何も言わず横に座って聞いていた。当時の使い方では、ダイヤルのあわせ方を毎日更新して秘密を守るのに利用したという。

コンピュータのなかった第二次大戦時には解読はほぼ不可能と言われていたがイギリス情報部が解読に成功していたという。巨大なスイッチを何千個も組み合わせた計算機を作り出し。それを使って暗号機のダイヤルとプラグの設定を割り出したというのだ。

4. 小判

　さて、日曜日になり叔父と叔母は従兄弟と共に我が家にやってきた。台所の家具はあらかじめきれいに片付けられていつでも発掘作業にかかれるようになっている。

「いくよ」
　叔父がスコップを土の上に突き立てた。ザクッという音が響き、何杯かの土をすくったところでカチンという堅い音に変わった。

「お、何かに当たった」
　三人は色めき立った。いよいよ黄金色の小判と対面することが出来る。従兄弟が下に下りて手で周りの土をどかし叔父と二人で壺を抱え上げた。

「何だか軽そうだぞ」
　と、叔父は変なことを言った。
「ふたを取ってみよう」

　壺の中から出て来たのは封筒一通だけだった。開けてみると、それは第二の暗号だった。了

続・短編集「タヌキの宝くじ指南」

著　　黒川 文

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社